
機械天使～魔法と科学と学園と～

紅きtuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械天使と魔法と科学と学園と

【Nコード】

N8602N

【作者名】

紅きtuki

【あらすじ】

魔法 それはあらゆる困難も瞬く間に解決させる力も持たない、小さな力。

科学 それは失敗と成功の重なりによって築かれた、人類の礎。この世界にはそれらが同時に存在し、今やこの世界の住民には欠かせない文明となった。

これは、その世界を救おうと『裏切り者』と呼ばれながらも影で活躍する青年、そしてその青年に恨みを持つ少年とその部下であ

プロローグ『魔法と科学』

右手首から手の甲周辺を包帯で隠している青年は、大きな鏡の前で自分の髪型を整えていた。手に薬品を付けては、自分の気に入らない個所を紅い瞳で睨みつけ、自分好みの髪型と修正していく。

やがて自分の髪を整え終えた青年は満足したのか、鏡から離れると、その鏡とは反対の方向にある、これまた、大きな木製の両開き扉に近づき、緩やかにそれも大袈裟に開放する。周囲に響き渡る木と地面が擦れる古びた摩擦音。

その扉の前には階段があり、階段の下では待ち伏せていた武装集団が、青年を確認するとすぐに、青年に向かって一斉に銃器を構えた。

映画の世界ではカチャカチャと言った擬音語が鳴るのだろうが、実際はそんな音はしない。良く聞くこの擬音語は映画などの演出で、銃器を構えた、と言う事を分かりやすくする為の物だ。

もし、実際にそんな音が鳴ったとすれば、どこかのパーツが外れていたり危険極まりない。

しかし、青年はそんな現実的だが非現実的な現実に対して一切恐れを見せず、それどころか、今から通いなれた仕事場へと向かうような余裕まで見せ、扉を開ける為に一度中断された歩みを再開する。青年が第1歩を踏み出すと同時に、一斉に発砲が開始された。

何の指令も無かった、恐らく青年が一步目を踏み出すと同時に発砲するように事前に命令されていたのだろう。

遠慮が一切感じられない発砲は徐々に火力を高め、何千の弾幕となりて青年に襲いかかる。

無造作に放たれる銃弾は階段を割り、奥の大きな鏡を割り、周りにある女の人々が彫られた白い像を破壊する。が、不思議な事に青年

には傷一つ無かった。と言うのも、次々に放たれる銃弾は青年に当たる瞬間に白き光を放ちながら角度を変え、そして進路を変えこの場を通り過ぎて言ったのだ。

しかし、白き光を良く見ると、それは様々な何重もの曲線や文字に彩られた1つの模様に見える。そう、魔法陣だ。

その光景は青年に銃弾が当たる瞬間に魔法陣が現れては青年を守っているように見える、がそれは間違いだった。と言うのも、それは青年に銃弾が当たる度に出現しているのでは無く、青年に銃弾が当たる度にその姿が見えるのだった。

その証拠に連続で銃弾が命中している魔法陣を良く見ると、青年の周囲を徘徊している事が分かる。それも無数に。

徘徊する速度は魔法陣それぞれ違い、外側で高速で回っている魔法陣もあれば、内側で低速で回っている魔法陣も存在する。

「……もう、終りにしよう」

青年が徐に終りを告げると、周囲の魔法陣に変化が現れる。と言うのも、丸い曲線は刺々しく鋭くなり、徘徊する速度を上げ、規則正しく綺麗に並んでいたのだ。やがて、魔法陣は半透明の剣や槍、弓や銃と様々な武器へと姿を変え、さっきまでは無かった風を切る音を鳴らし青年の周囲を徘徊する。

青年は自分の周辺を飛び回る内の1つの剣を握ると、その剣は色を得、その実態を明らかにする。

「……C i d e 『ジエノサイド』」

青年は魔法名を呟いた瞬間、未だ止まぬ銃弾の雨の放出元へと数mも飛翔し、武装集団の1人を手に持っている剣で突き刺す。

次に青年は人から剣を抜かず、自分の周辺を浮いている槍を右手

に銃を左手に取った。手に取られた二つの武器は色を得、その実態を明らかにする。

そのまま青年は槍をアスファルトで出来た地面に突き刺すと、鉄棒に片手でぶら下がった様な姿勢で地面と平行になりながら回転する。

そして余った片方の手で銃を乱射しながら槍の上の方へと少しずつ移動して行き、一番上まで来ると槍から手を離し回転の勢いを利用し、そのまま高く宙に浮上した。そして、そのまま重力に従い放物線を描きながら落ちて来ると綺麗に槍の上へと着地する。

槍は全て地に埋まり、その埋まった槍を中心として、アスファルトが蜘蛛の巣の様に割れる。そして今度は青年が地面に着地すると周りの地面が盛り上がり青年を中心としたクレーターが出来上がった。

その衝撃で膨大な埃と武装集団が宙へ浮き上がる。

埃が薄れて来ると、そこには無数の武装者が無残にも横たわって居た。

そして青年がそれを確認したからか、青年の周辺からたくさんの半透明の武器が消えて行く。

「……Fortuna『エターナルライフ』」

青年が突如そう言うのと右肩辺りに、一際大きな魔法陣が出現した。そのまま青年が前を向いたままの姿勢で魔法陣に左手を突っ込むと、手に光が満ち、そのまま左手を大きく横になぎ払う。

それと同時に魔法陣がガラスの様に破壊され、左手には黒い雷を纏う闇を表した漆黒の剣が握られていた。

そしてなぎ払われた先には銃を青年に向ける武装者が漆黒の剣に首を跳ねられていた。

プロローグ『魔法と科学』（後書き）

あとがき

この作品は魔法学園に最強の主人公とかなりベタです。

非禁禁忌プロローグ『非禁禁忌』

魔法の力によりステンドグラスだけで出来た神秘的なビル状の建物が存在する。

しかしビル状と言っても、それは外見だけで中身は上か下まで筒抜けでいて床と天井以外何も無い。この世界の住人は今も遙か過去から存在し破壊されなかったこの建物を研究し続け、貴重な文化遺産として一部の上級貴族しか足を踏み入れる事を許さなかった。

しかし、決して上級貴族ではない1人の青年がこの地に訪れる。

「『非禁禁忌』と称される者がこんな所に何用かな？」

青年はその問いには答えず、ステンドグラスの建物の入り口からその中心に立つ黒いローブを着た老人に近づく。

老人はその青年の様子に舌打ちをすると、ローブから手を出し、魔法名を唱える。

「古代魔法『ライトレイディエーション』」

老人の手から腕にかけて川のような文字の流れが出来上がり、手の先に魔法陣が浮かび上がる。

そしてそれらは徐々に光を強め、手の先の魔法陣が一層明るく光る。しかし、

「……C i d e『ジエノサイド』」

青年が魔法名を唱えると、瞬時にたくさんの魔方陣が青年の周囲に現れ、青年は老人に向かって指を差す。すると青年の周囲に浮遊していた魔法陣は老人の周りに瞬間移動し、その姿を半透明の武器

へと変化させる。

それと同時に青年が指を鳴らすと、無数の半透明の武器は色を得、その実態を明らかにする。

その結果、老人は無数の武器に囲まれ、身動きができなくなり、発動しかけていた魔法を中断しざるをえなくなる。

「『非禁禁忌』、お前の目的は？　いくつもの神殿を次々に物色している様だが」

青年はその問いにも答えない。老人がその事にまたもや舌打ちをすると、唐突に不快な笑みを浮かべる。

すると次の瞬間、老人の背の方向からガラスの扉が開く音がこの空間に鳴り響き、そこから次々に武装した集団が現れ、数十人の集団が狭い空間になだれ込む。

そして、遅れて来る様に1人の小柄な少女が武装集団の前に何の前触れも無く、唐突に現れる。

どこかの制服だろうか、胸元にピンク色の大きなリボンに制服ならではの大きな赤い襟、その縁には白いラインが入っている。そして裾にも2本の白いラインが入った赤いスカートと、この状況には相応しくない服装をしている少女が、武装集団の前に現れた時同様に、老人と無数の武器のわずかな隙間に瞬間移動する。

それを見た青年がその老人と少女に無数の武器を一齐に振りかざす。が、すでに2人はそこに居なく、無数の武器がお互いぶつかり合って不協和音を奏でる中、少女のみが武装集団の前で肩に着いた埃を落しながら魔法名を唱えていた。

そしてそれに合わせる様に青年も魔法名を唱える。

「新・近代魔法『イマジナリー・マジックソード』」

「……Fortuna『エターナルライフ』」

少女の左肩に大きな魔法陣が現れる、と同時に青年の右肩に一際大きな魔法陣が現れる。少女は前を向いたままの姿勢で魔法陣に右手を触れると、右手に光が満ち溢れる。

それ同様、同じ動作をする青年の左手にも光が満ち溢れ、同時に腕を真横に振り払らい、魔方陣が破壊される。

そしてその手に少女は白いスッキリとしたデザインの剣を、青年は黒き雷纏う、漆黒の剣を握っていた。

少女は剣を出現させる際に使用する魔法陣の大きさと剣その物の質の違いに嫌な汗を流しながら、青年に突進する。その時、地に落ちていた無数の武器が浮かび上がり、少女に雨の如く襲いかかる。

少女はそれを科学の靴により生み出された超人的な跳力で遙か彼方上空に飛び上がると、ステンドグラスの壁に科学の力を駆使し張り付く。

少女が急いで自分の元居た場所を見ると、その光景に少女は驚きを隠せなかった。

攻撃を上へ回避している僅かな時間に武装集団が無数の武器で全滅させられ、無残にも地に倒れていたからだ。

青年は邪魔な雑魚を片付けると、上の方で壁に張り付いている少女を睨む。そして、科学も魔法の力も使わずに、それこそ超人的な脚力でそれも一瞬に少女のすぐ横まで飛び上がる。

少女が遅れてその様子を捕らえると、とっさに対向側の壁へ飛び跳ねる。

そして改めて青年をその目に捕らえると、青年は壁と垂直になりながら壁を歩いていた。

「……瞬間移動は出来ないのか？ 出来るのならそれを使い早くここから離れる。それを拒む事はしないし、深追いはしない。……だ

が、それを拒絶するのなら終りにさせて貰う」

「し、瞬間移動する為にはこの靴にしばらく力をチャージする必要があるの……」

「……勝手にしろ」

2人は地上に降り立ち、少女は身を屈めて靴に魔力を注ぐ。青年はガラスを鏡の代わりに使い自分の髪を整える。

非禁禁忌プロローグ『非禁禁忌』（後書き）

今回は青年の呼び名と、新たなキャラ、少女との戦い。を書かせて頂きました。

そしてネタバレ防止のため、今は多くは語りません。

非禁禁忌プロローグ『謎の少女』

「あ、あなたは一体、何者なの？　ここに入れたって事は『上級参隊』なの？」

少女は屈みながら靴に魔力を注ぎつつ、震える声で恐る恐る青年の階級について問う。

階級と言うのは身分を表す物で当然だが階級が高い人は裕福な暮らしをしている。そして少女が言う上級参隊と言うのは3段階に分けられる階級の最高位の事だ。

このステンドグラスだけで出来た神殿に入る為の条件がまず、上級参隊でなければならぬ。そして、多額の献金をしてやっと、この神殿へ立ち入る事が許される。

しかし見るからに青年は上級貴族と言う身形をしていないし、何よりも不法侵入をするような人が上級貴族とは言い難い。だからこそ、少女は青年の階級について質問をしたのだ。そこから思わぬヒントを得る為に。

そもそも少女は不法侵入をしたこの青年を捕まるためにわざわざここに来たのだ。それも自分の意思ではない、少女が所属する組織の命令でだ。だから少女もおちおちと、青年に従いこの場を離れる訳に行かない。それは仕事を放棄する事になるからだ。それに組織からの教訓に『捕まえる事が出来なければ、最低その手引きになるヒントを得て帰れ』と言う物もある。

しかし青年はその問いには答えず、ただ黙って自分の髪型を整えている。

そして髪を整え終え、髪を固める薬品をポケットにしまい、少女を睨む。

その紅く鋭い眼光に睨まれた少女はビクッと身を震えさせる。そ

んな少女に対して青年は階級について逆に質問する。

「……お前はどんなんだ？」

それに対して少女は左袖をまくりあげると、露出された細い腕に魔法の力で刻まれた赤紫に光る紋章を青年に見せる。

階級はその紋章で証明され、何か資格を得たりすれば、さらにそこに情報が埋め込まれる。つまりこの紋章は絶対に身から外す事の出来ない身分証明みたいなものだ。

青年は少女に近づきその紋章を見つめる。2人の距離は青年の目に赤紫色の光が反射している事が少女に確認できる位だ。そして、その紋章から少女の身分を読み取った青年はありのままを呟く。

「……筋金入りのお嬢様じゃないか。階級の最高位に立つ成績優秀なお嬢様、そんなお前がなぜ、俺を追う。こんな危険な仕事、お前の様な奴に任させるはずが無い」

「そ、それは……」

少女はそこまで言うと、何か言いたくない事情があるのか口を閉じてしまった。その様子を見た青年もそれを察して、それ以上を聞くことはしなかった。その結果、この空間に沈黙が生まれ、無情にも時だけが過ぎて行く。

どれほどの時間が立ったのだろうか、数秒にも数分にも感じられるあやふやな時が流れる。その時、少女の靴に瞬間移動に必要な魔力が溜まったのか、ほのかに淡い光を浴び始める。それを機に少女は最後に青年に対して苦笑顔を浮かべると、可能になったばかりの瞬間移動を使い、この場を離れる。

取り残された様にそこに佇む青年は自分以外誰もいない空間で独

り言を呟く。

「……人と話したのは……久しぶりだな」

非禁禁忌プロローグ『謎の少女』（後書き）

今回はこの世界の階級について書かせて頂きました。

いまだに世界観は明かしていませんが、これで少しはわかる？ と
思います。

そして少女の動機。

なぜ、お嬢さまが危険な任務についたのでしょうか。

今は明かされませんが

後々、明かして行きたいと思います。

断末魔プロローグ『断末魔』

「お前が頼み込んで来たから任せてやったのに……なんだア？ この結果はア？」

大きな大きな電子的な学園寮が存在する。

その寮の片隅に電子的な文字で天井全体に『23』と描かれた近未来的な部屋がある。そこで非禁禁忌と称される青年との戦いから逃げ帰って来た少女は、上司に当たる人物に説教を食らっていた。恐らくここが少女の部屋でわざわざ上司がここに足を運んで来てまで説教をしている。その様子から察すると、少女はよっぽど大きな失敗を仕出かしたのだろう。今も、上司は声を押さえながらも抑えきれない怒りを露わにしながら少女を怒鳴りつけている。

そしてその上司だが、上司と言っても若々しく、非禁禁忌と同年代くらいだろう。

非禁禁忌が黒い服で身を固めているのに対して、こちらは白い服で身を固めている。それもわざと対照的にするように。これは2人に何か関係がある事を表している。

「断末魔様。申し訳ございません」

断末魔。人はこの上司をそう呼ぶ。

何がどう伝わってこの上司がこんな称号を得たのかは定かではない。一説によると人に対する情が無く、残忍残酷な気性をしている事から断末魔と呼ばれるようになったと言う物がある。

また1説によると、『断末魔』と呼ばれるオリジナル魔法を使用する事からそう呼ばれるようになったと言う物もある。

本人は自分が何と呼ばれようが気にしないのか、その事について

何も指摘しない。それが、またいろんな説を生む。

「申し訳ございません、じゃすまなんだよオ。まったく、この俺をあまりガツカリさせるんじゃないよ。……ちつ、次はヘマするんじゃないエぞ。わかったなア！」

そう言い捨てて片開き扉を開き、この部屋を後にする。

その扉の先に、女子の平均身長より小さな童顔の女の子が、後ろで手を組みながら断末魔の癪に障る様な笑顔を浮かべていた。ニコニコと言つよりはニタニタと言つ感じの笑みだ。

「あア？　なんだア、その笑顔はア？」

「何だかんだ言つてやつぱり優しいんだね。って思っていたら自然と笑顔が……ふふふふふ……」

「気持ち悪い笑みしてんじゃないエ。ぶつ殺すぞ、新入りが」

断末魔は半ば無視するようにそう言い捨てると、寮の細く長い廊下を堂々と歩いて行く。

殺害宣告された女の子は断末魔と出会って間もないのに、その宣告が冗談だと分かっているのか、その堂々とした背中に笑顔のまま、ひよこの様について行く。

断末魔プロローグ『断末魔』（後書き）

今回はいきなり新キャラが2人も登場しました。

あまり登場人物が増えるとわかりにくくなるので控えたのですが、

サブタイトルに学園が入ってますよね^^；

私の中では学園系は登場キャラクターが多いイメージがあるんですよね^^；

と言うより、未だに学園でていない……

非禁禁忌プロローグ『目的』

全ての光を遮断する不可解な館が存在する。その館は外からの光はもちろん、中からの光をも拒絶し、常闇に包まれていた。具体的には外からの光は絶対に中には通さず、館内で発行する物を用意しても光は生じない。実際の所、光は発生していいのだが発生した直後、闇へと帰される。

そんな闇の中で非禁禁忌と称される青年はまた、戦闘を行っていた。

「また、偉大なる神殿を襲いに来たか。良い加減にしたらどうだ、非禁禁忌よ」

青年に話しかける人物。暗闇でよく見えないが声で誰なのかが分かる。以前、ステンドグラスだけで出来た建物に居た老人だ。やはり暗闇で見えないが、恐らく黒きローブに身を包んでいるのだろう。そして、またもや青年は老人の問いには答えない。ただ黙って老人に近づき、機がきたら魔法名を唱えるだけだった。

非禁禁忌は、今までそんな事を数回、繰り返してきた。

ある時は、大きな鏡が保存されていたとある神殿。

またある時は、ステンドグラスだけで来た神秘的な神殿。

そして、あらゆる光を遮断する不可解な神殿。

どうやら青年の目的は神殿ではなく、この老人らしい。

「非禁禁忌……お前の目的は未だ分からぬが、世間がお前を何と呼ぶんだるか、知つとるか？」

やはり青年はその問いに答えない。どこを見ているか分からない

虚ろな紅い瞳で暗闇にも関わらず、しっかりと老人を睨み、ただ老人へ近づいて行く。そして、

「……Fortuna『エターナルライフ』」

静かに魔法を唱え、光を発さない黒き雷を纏う漆黒の剣を老人へ振りかざす。

それを老人は老体とは思えない脚力で後ろに4m程飛び、回避する。が、老人は唐突に崩れ落ち、跪く。

「ふ、地形の利を上手く使いおったか。さすがは『非禁禁忌』と称されだけはある。」

老人が跪いた理由、それは光を発さない黒き雷による物だ。剣の直線状に光を発さない黒き雷が放たれ、目に見えぬ雷は老人を追い掛けて行く。それ故、老人は攻撃を回避する事が出来なかったのだ。だが老人は立ち上がり、余裕のある声で、唐突に青年に別れを告ぐ。

「さらばの。『裏切り者』」

それと同時に青年が追いうちを掛けようと駆けだす。

しかしその途端、老人だけが消えたのか黒きローブだけがふわりと地に落ちて行く。

非禁禁忌プロローグ『目的』（後書き）

あとがき、

今回はとうとう少年の目的の標的に付いて書かせて頂きました。

そして、謎の老人。

二人には一体どんな関係があるのでしょうか。

そして未だ、学園は形を見せない^^；

次回からはしばらく断末魔様について書こうかと思っています。

そして、念願の学園が！ 出るといいですね^^；

いや、むしろ強引に出すっても有りか……

まあ、断末魔様もストーリーに大きく関わってくるので、

次回からは大活躍して貰いましょう^^；

断末魔短編『学園』

想像を絶する様な大きな学園が存在する。

大きな学園と言っても本当に大きな校舎が一つだけ存在している訳ではない。大きな土地に、たくさんの学び舎が建っている事からそう呼ばれるのだ。

この世界の住民は生まれ時から1人前の魔法使いを目指し、定められた年齢になると、ただ一つしかないその大きな学園に通うのだ。これは権利ではない。義務付けられている。

そして、1人前の魔法使いとして認められた時、初めて卒業を許される。

もう一度言うが、卒業できるのはあくまでも魔法使いとしての力が認められたらだ。逆に言うとな力を認めて貰えないと卒業する事は決して許されない。

それはこの世界には学齢と言う物は存在しない、と言う事を表していた。

そんな学園に断末魔は通っていた。

学園での成績が悪いと言う訳ではない。何か大きな問題を起こしたと言う訳でもない。むしろ成績は良く、不良達が招く問題を片付ける立場で『誰もが憧れる優等生』なぐらいだ。

そんな断末魔が学園に通っている理由……

それはこの世界の住民全員にも言える事なのだが、学園の卒業条件があまりにも厳しいのだ。その条件の厳しさのあまり、『卒業できた者は数えるほどしか居ない』位だ。

そして学園を卒業できた者は個人個人に合った称号を与えられ、『卒業者』と呼ばれる。

『卒業生』と呼ばれるには学園を卒業するしかないが、称号を得る為には別に学園を卒業しなくても良い。

だからと言って称号を得るのは簡単な事ではない。

称号を得る為の条件の一つにまず『誰もが憧れる優等生』程の実力は持つていなくてはならない。そして、世界の治安維持を目的とした組織に所属し、功績を残さなければならない。

そうして、やっと名誉ある称号を得られるのだが、断末魔は違った。

前にも言った様に、断末魔が『断末魔』と言う称号を得たのには様々な説がある。しかし有説な物は特に無く、その実態は謎に包まれている。にも関わらずこの称号は世間に浸透している。

まあ、断末魔はたくさんの功績を上げて来ているので今さら不思議ではないのだが。

だが、こんなケースは本当に稀なのだ。

そして、そんな断末魔を呼ぶ女の子の声が聞こえる。

「断末魔様」

情けない声でそう呼ぶのは以前、断末魔に殺害宣言をされた童顔の少女だ。

校舎の数だけ存在する屋上に、一つだけ置いてあるベンチに横たわっている断末魔を見つけると、どうやら暑がりの様で春にも関わらず、夏の暑さに負けたような声を上げ、ひよこひよこ断末魔に近づいて行く。

それに対して断末魔は、横向きの状態から起き上がりベンチに思い切り腰掛けるとうんざりした様な声で返答する。

「あんのンなア。様も無いくせに、いちいち呼んでエンじゃねエよ。何か恨みでもあンのかア？」

「ここで聞き捨てならぬ耳寄り情報があります。
男女問わず誰にでもフレンドリーな私ですが、残念ながら私の憧れ
は非禁禁忌だけです」

「聞いてねエよ。そしてそれを俺に言つてどオする？」

まさか、恋のキューピット役でも演じるとでも言っんじゃねエよな
？」

「ふふふふふふ……断末魔様のキューピットのコスプレ……ふふふ
ふふふ……」

「殺す」

殺害宣言こそするが実際はそんな気など無く、その証拠に魔法名
を唱えたりなどしない。

女の子の方もそれが冗談だと通じているのか、ニタニタと言う感
じの笑みを浮かべては追い掛けて来る断末魔から、楽しそうに逃げ
ている。

しかしその時、楽しそうに逃げている女の子が唐突にも倒れてし
まう。わざとでは無いらしく、顔面を強打した痛々しくも生々しい
音が、コンクリートから空気へと伝わり周囲に鳴り響く。

そして屋上にも関わらず、さらに上から、空から男の野太い声が
聞こえる。

「な」に、少しの間、気を失って貰っただけだよ。俺の魔法によっ
てな。それにしても、あの断末魔が屋上で幼い少女と追いかけつこ
とはな。笑わせるぜ」

それに対して断末魔は上を見ずに無気味な笑みを浮かべると、女

の子と話していた時とは別のトーンで、半ば男の話を無視するよう
に呟く。

「……俺の癪に障ってンじゃねエよ。ゴミクズが」

断末魔短編『学園』（後書き）

断末魔様の事について、今回から少しずつ明かして行きたいと思います。

断末魔短編『墮落者』

『墮落者』、そう呼ばれる魔法使いがいる。

平たく言うと、思うように成績が伸びせず、卒業を諦めた不良達の事だ。彼らは集団を作っては度々悪さをする為、最近大きな話題を呼んでいる。

唐突だが断末魔はそんな彼らが嫌いだった。

断末魔の様な強き力を妬み奇襲を仕掛けて来る奴が嫌いだった。何の努力もしないで、『上の奴らは認めてくれない』などと抜かす彼らが嫌いだった。

努力をしている者を簡単に傷付け、踏みにじる彼らが嫌いだった。しかし断末魔はそんな彼らを救いたいと願う。

その為、断末魔は努力し、人の上に立つ立場まで這いあがってきた、『墮落者』から。

「……俺の癪に障ってンじゃねエよ。ゴミクズが」

静かに呟くとようやく、宙に浮いているゴリラの様な体格の男を睨む。

その男は体格に似合わず、優雅に宙に浮いていた。『墮落者』と呼ばれる者だ、自分の力では無いだろう。どうやって手に入れたかは分からないが恐らく、科学の力を駆使しているのだろう。

宙に浮かぶ男は必死に睨む断末魔を不快に笑うと、手先を大きく広げ、手の直線状と断末魔を合わせる。そして、何の予備動作も無しに手から風により出来た、激しく回転する空気を断末魔、目掛け放つ。

断末魔はとつさに女の子を抱き抱えると、落下防止の為の手すり

目掛けて走り出す。さつき自分が居た場所で何かが碎ける音がする。走りながらも後ろを向きそれを確認すると、コンクリートで出来た地面が10?ほど抉られていて、その無数の破片が宙に浮き、灰色の霧を作り出していた。

慌てて前を向くと、鉄で出来た落下防止用の手すりが無理矢理、放物線状に曲げられていた。

しかし、止まる事は出来ない。元より止まる予定など無い。そして断末魔はハードルを飛び越える様に綺麗なフォームで曲げられた手すりを飛び越える。

屋上の高さは校舎によって違って来るが、ここは4階位はある。普通の人間なら運が悪ければ死に、運が良くても骨折は免れないだろう。

しかし、断末魔は普通の人間とは違う。空中でバランスを取りながら、何とも無かったように地面に綺麗に着地する。4階から落ちたと言うのに、あまりにもケロッとしているので逆に男の方が面喰っていたくらいだ。

そして窓を突き破り、校舎内へと逃亡する。自分の為では無い。今も突き破ったガラスの破片が当たらない様に覆い被さる様に抱きかかえている女の子の身の為だ。

そして突入した部屋から廊下へと再び走り出す。

他の生徒が各々で驚き、中には悲鳴を上げ、廊下を走って行く断末魔を不思議そうな顔で見つめる。無理も無いだろう、いきなり窓が割れる音がしたと思ったら、あの断末魔が見知らぬ少女を抱えて走って行くのだから。

そして何よりも断末魔のあの焦った顔など今まで誰も見た事が無いのだから。

「ここで隠れていたら、ちったア時間も稼げるだろう。こいつ本当

に無事なんだろうオナ」

以前はたくさん生徒で賑わっていただろう、元生徒会室。
今はその明るさは消え、細長い机や大きな本棚とあちらこちらに埃が被っている。

その暗い静かな部屋で断末魔は必要以上に焦っていた。最初こそ何とも無かったが、この女の子が目覚まさない内にどんどん不安になって行く。

今まで、孤独な事にも1人で過ごしてきた断末魔にはこの事態があまりにも過酷過ぎた。初めて体感する、自分のせいで仲間が傷付けられると言う状況、そしてそれにより沸く不安と言う感情。

これはプレッシャーとなり断末魔に重く押し掛かる。

その時、床に寝そべる女の子の、か細い声が静かな元生徒会室に響き渡る。

「断末魔様……私は一体……」

「ちっ、足引つ張ってンじゃねエよ。新入りが。ぶっ殺すぞ……」

話は出来るがやはり体調は優れないらしく、立ち上がろうとしない。

さっきよりは、ましになったとは言え、やはり不安と言う感情が断末魔の体から抜けなかった。

そんな時、断末魔は部屋が若干暗くなった事に気付く。太陽の光が雲に隠される様な、しんみりとした淡い暗闇に覆われた事に。

恐る恐る窓の方を見ると、静止したカーテンに何かシルエットが映っている。そしてそのシルエットに気付くと同時に、窓を粉々にしながら突き破り、カーテンを微塵に裂く風の刃が断末魔に襲いかかる。

それを断末魔は女の子の盾になる様に全身で受け止める。

そして攻撃が止んだ後、服の所々が裂かれた断末魔は突き抜けに
なった窓越しの相手に重い声で囁く。

「てめエ。本気で俺をキレさせたい様だなア？」

断末魔短編『墮落者』（後書き）

今回は断末魔様とゴリラ男との戦闘です。

まあ、逃げてばかりでしたが、それは彼の優しさ故です。

断末魔短編『THOD』

「もう加減はしねエ。俺の本気をぶち込んでやる。そして俺が断末魔と呼ばれる、真の理由をその体に刻み込んでやるよ。なアに、遠慮はいらねエよ。俺を本気にさせた褒美だ、受け取れ。」

断末魔がそう言い終わると校舎の外で優雅に浮いているゴリラの様な体格をした男は再び手の直線状と元生徒会室に居る断末魔を合わせる。

そして再び、何の予備動作もなしに手から強烈に回転する空気の刃が放たれる。

しかし今までと違い速度がかなり遅い、恐らく断末魔も何かの攻撃を仕掛けて来ると踏んで、速度を捨て威力を格段に上げたのだろう。そしてそれに対して断末魔は、

「THOD『断末魔』アアアア」

狂気のような声を上げ、両手を前に突き出す。その反動で、体が前へ反れる。

すると次の瞬間、断末魔の前に黒き門が現れる。恐らくこれも魔法陣だろうが、普通の魔法陣と容姿がかけ離れていて、どう見ても黒い門にしか見えない。

その黒き門は無数の鎖に縛られていて、中から何かが抜け出そうとしているのか、ガタガタと大きく震え、鎖同時がぶつかり鉄の音が鳴り響く。

そして、空気の刃がその門に触れると両開きの門が唐突に開き、中からムンクの様に悲鳴を上げる黒い髑髏が飛び出す。門に触れた空気の刃を真つ二つにし、その勢いを落とす事無く、叫びを上げながらひたすら前へ進んで行く。

そしてその先にはゴリラの様な体格をした男が、この髑髏を防げるとでも思ったのか腕を交差し待ち構えていた。

「じゃアな。次、会う時は『墮落者』からは卒業しとけよ」

黒き髑髏が大きな口を開け男に噛り付き、形を崩した髑髏が黒き霧となり男を包みこむ。その黒き霧は男を包み込んだまま、ゆつくりと地と降りて行き、完全に地に着いた時、その霧は風に流されて行く。

その様子をガラスが割れた粹しかない窓から見届けた断末魔は、衰弱した女の子を抱え、この部屋を後にした。

後、気を失った無傷の男は他の生徒に見つけられ、病院へと運ばれて行った。

～事後談～

「断末魔様」

校舎の数だけ存在する屋上に、一つだけ置いてあるベンチに相も変わらず横たわっている断末魔。

そんな彼を見つけると相も変わらず暑さに負けた様な情けない声をあげ、ひよこひよここと近づく女の子。それに対して、断末魔は相も変わらずうんざりとしたような声で返事する。

「あんのンなア。やっぱりお前、俺に恨みであンのかア？」

「ここで聞き捨てならぬ耳寄り情報があります。断末魔様の倒した

男ですが、どうやら記憶を失っており、真面目に勉強に励んでいるようです」

「そオかい。それを俺に言っただけでどうするつもりなんだア？ まさか、俺がそれを聞いて喜ぶとでも思っただけのかア？」

「はい。そんな態度を取りながらも心の中では喜んでるんですよ。断末魔様はツンデレですから。……ツンデレ断末魔様……ふふふふふふ……」

「殺す」

そんななかで、追いかけてこのラウンド2を始めてしまった2人。そして走り出して早々、ニタニタとした笑みを浮かべながら楽しそうに走っている女の子がまたもや、唐突に倒れてしまった。

今度も特にわざとでは無いらしく、顔面から衝突した痛みを和らげるためにうつ伏せの状態顔で顔を猛烈に擦りまくっている。

そんな女の子の前で断末魔は屈むと、手を差し伸べ、

「そオいや、お前エなんて名前なんだア？」

女の子はその手を取り、細い身体つきしている割には男らしい力で起こして貰うと、改めて名前を聞かれたせいか少し頬を染め、数秒躊躇った後、吹っ切れた様に

「ここで聞き捨てならぬ耳寄り情報があります。男女問わず誰にでもフレンドリーな私、なゆた・メーイー那由他Manyですが、残念ながら私の憧れは非禁禁忌と断末魔様だけです。」

自分で言っときながら顔を真っ赤に染めると断末魔をポカポカと

数回叩いた後、どこかへ走り去ってしまった。

取り残された断末魔は誰も居ない屋上で独り言を呟く。

「なんだア、あいつはア。……憧れかア。まア、努力しただけはあ
るってエこったア」

断末魔短編『THOD』（後書き）

これで断末魔短編は終了です。

一応主人公は、あの青年であり、

断末魔であるので良い紹介になったと思います^^

次回からは両主人公が出る話を書きたいなと思います。

断末魔様はツンデレですね……ふふふふふ

キャラ紹介

なゆた

スニィー

那由他 Many

性別：女

年齢：秘密

性格：自称個性的・他称変態

備考：那由他の入学の時、遅刻して走っていたら誰かにぶつかる。

それが断末魔でそれが断末魔との初めての出会い。

断末魔との関係は学園では先輩と後輩で、

組織では上司と部下。という関係。

代表台詞：「ここで聞き捨てならぬ耳寄り情報があります。」

代表魔法：不明

魔女魔人編「七不思議」

学園には七不思議が付きものだ。そして、その七不思議にはつまらないオチが付いてくる。それが那由他の考え方だ。

しかし残念な事にこの学園にはそんな物は無かった。那由他はそれが納得がいかなかった。そして納得がいかないあまり、唐突に廊下の真ん中で、大勢の生徒がいる中、それも大声で、こんな事を言い出した。

「七不思議が無いのなら作れば良いのでは！」

その結果、散々悩んだ果て、七不思議を作る事が……出来なかった。本当にネタが何も無かったのだ。

しかし、諦め切れない那由他はある人物に助力を求める事にする。「善は急げ。」などと意味のわからない事を呟きながら、ある人物の居る部屋へ駆け出し、その部屋の片開き扉を恐る恐る開ける。そしてその扉に隠れる様な姿勢で小さな顔だけをそつと出すと、

「断末魔様……。実はですね」

「却下」

「ひ、ひどい……。おいおい、ああひどい。私まだ何も言っただけなのに。迷える乙女がこんなにも悩んでいるのに……。上司ならば話ぐらい聞いてくれても良いのに……。ああ、私の憧れた断末魔様はどこに行ったの……？」

いきなり女座りしながら片手を口元に当て嘔泣きを始める那由他。しかし、それに対して断末魔は興味を見せるところか全然相手に

してくれない。

しつこく嘘泣きを続けるがいい加減、那由他も飽きたのか、超上目使いで誘惑する作戦へと変更する。

「断末魔様」

「きもい。却下」

自分の全力を軽々しく否定され、本気で傷つく那由他。四つん這いになり、周りの空気を青色に染め上げていた。

断末魔もさすがにそれには同情したのか、話ぐらいは聞いてあげる事にする。

「えへへ。ありがとうございます、断末魔様。やっぱりツンデレですね……ふふふふふ……」

「死にてエのか？」

「嘘ですよ、多分。ってそんな事より聞いてくださいよ。そういやこの学園って七不思議と呼ばれる物が無いですよね。でしたら私と一緒に探しませんか？」

「お前……どうせ、変なメディアの影響だろうオ？　ここ最近、学園の七不思議を追う探偵物のドラマが放送されたって聞いた事があるんだけどオ」

「ち、違いますよ！　わ、私がそんな物に影響されるはずがありません！　あ、もし断末魔様のその話が本当なら、他の生徒たちが喜ぶかも知れませんよ。ね、だから、探しましょうよ。これも人の上に立つ者の仕事ですよ」

那由他に腕を引つ張られ半ば強引に部屋から連れ出される断末魔。彼は仕方なく、協力してあげる事にした。

そして学園寮の廊下を、無理矢理、腕を引つ張られながら歩いていると、那由他より1サイズ大きい少女と鉢合わせる。

非禁禁忌を捕まえる危険な任務に自らつき、それに失敗し断末魔にひどく説教されたあの少女だ。そしてその少女はぶつかりそうになつた那由他を見ると、気が抜けたような声で、

「あ、あなたは……那由他ちゃん？ あ、断末魔様、おはよう。子守り？」

「子守りじゃねエよ。あとお前、最近、全然敬語使わなくなつたなア？ 敬意はねエのか？」

「え？ だってこの子も会話の半分くらいしか敬語、使つて無い訳だし、私も良いかなゝって。それに私だけ敬語ってなんだか納得いかないし。あ、もちろん敬意はありますよ、多分」

「何で俺は部下に恵まれないンだよオオオオオ！！」

断末魔が『断末魔』の様な叫び声を上げ、撃沈していると那由他はそれを半ば無視するように少女に話しかける。

「あ、葉乃愛^{はのあ}さん。今から私達、七不思議探しに行くんですけどよかったですか？」

「七不思議？ そんなの、昨日あたりからブームを呼んでるわよ。まあ、どこぞの変なメディアに影響されたどこぞの変態どもの仕業でしょ」

「そうなんですか！ もうすでに私以外の人が七不思議を作っていたんですね。ってどこぞの変態どもって……。ま、まあ気を取り直してその七不思議を説明していきましょう。ね、断末魔様」

それに対して断末魔の答えは、

「何で俺は部下に恵まれないんだよ……」

魔女魔人編「七不思議」(後書き)

今回からは非禁禁忌と断末魔様、二人の主人公が登場します。
ちよつと長めになるかも……

それにしても魔法名考えるのが楽しいが疲れる……

魔女魔人編「ドジっ子」

断末魔の通う学園には旧校舎と呼ばれる、今はもう使われていない、古い学び舎が存在する。

科学の発展により近未来的な力を備えた校舎が次々に建てられて行く中、ポツンと取り残された様に佇む木で出来た校舎だ。

その校舎は侵入する事を特に禁じていないとは言え、人気は少な^{ひんけ}く、たまに掃除係が訪れるくらいで、好き好んで中に入ろうとする者は少ない。

しかしそんな薄汚い旧校舎に三人の生徒が訪れる。

「第一の七不思議、今はもう使われていない旧校舎の大図書室にナンバー持ちの正体不明の少女が現れる。」

メモ帳に目を通しながら説明する様に話すのは、葉乃愛と呼ばれた少女だ。

葉乃愛はメモ帳はもう必要無いと判断したのか、グシャグシャに丸めてポケットにしまう。それに疑問を抱いた那由他はすかさず葉乃愛に問いかける。

「その紙には七不思議の内のひとつしか書いて無いのです？」

「まあね。私も七不思議を考えた奴の変態面を拝んでやろうと思って、七不思議の事を調べ始めたのは、ついさっきの事なのよ」

そこへ断末魔が間髪入れずに問いかける。

「ほんとにナンバー持ちが現れるのかア？」

ナンバー持ちと言うのは学園の中で実力が百位まで与えられる力の序列を表す数字の事で、単純に数字が小さければ小さいほど強いと言う事だ。ちなみに断末魔はナンバー持ちだったりする。

「それを確かめる為にここに来たのよ」

「それはいいが……何でお前が居ンだよオ？」

「いいじゃない。私が居たって、減るもんじゃないでしょ！」

葉乃愛は切り捨てる様にそう言うのと半分腐食した木で出来た両開き扉を蹴り飛ばして開け放つ。

『ギイー！！』と言う猛烈な摩擦音が『ひいひい！』と言う扉の可哀想な悲鳴に聞こえる。暗い旧校舎内に光が差し込み、扉を蹴り飛ばした事により浮かび上がった埃を鮮明に映し出す。

そこへ葉乃愛が顔だけを覗かせると、両開き扉の片方だけが跳ね返ってきて、葉乃愛の顔面へクリーンヒットした。葉乃愛はあまりの衝撃で後ろへ倒れ込み、痛みあまり顔を両手で押さえ体を激しく擦じらせている。

ぶつかった後の扉の『ギ、ギ、ギ、ギ』と言う摩擦音が『ひっひっひっ』と言う扉の皮肉な笑い声に聞こえて仕方が無い。

その様子を断末魔は呆れ顔で見届け、那由他は何か無気味な笑顔をこぼしていた。

「（ここまで天然なドジっ子さんは珍しいです……ふふふふふ……）」

なんとか痛みが引いて来た葉乃愛はそこから立ち上がり、中途半端に開いている扉を完全に開けようとドアノブに手を伸ばす。

そして、腹いせにそのドアノブを思い切り強く握ると、手の平に

木以外のグニョとした感覚がある事に気付く。

顔を真っ青にしながら恐る恐る手の平とドアノブを確認すると、何かの虫が潰されたのか、ドアノブと手の平に変な色の体液を撒き散らしていた。

「い……い……いやああああ~~~~~~~~!!!!!!」

あまりの衝撃（精神的な意味で）に全力で跳ね上がると、真上にあった扉の枠に頭を強打してしまう。

その勢いは凄く、木で出来た枠を簡単に折り曲げてしまった。そして葉乃愛はまだ理性はあったのか、虫の死骸が付いていない方の手で頭を押さえると、枠を潰された事で不安定になった扉が大きく揺れ葉乃愛を旧校舎から跳ね飛ばす。跳ね飛ばされた葉乃愛は仰向けで地面に転がり、半泣き状態で放心していた。

その様子を見た那由他はさすがに同情したのか笑顔は無く、断末魔は、もはや引き気味で数歩後退していた。

「お、おい。お前……良い所のお嬢様なンだろオ……？ 何て様してンだよオ……」

それに対して葉乃愛はすでに泣きべそをかいていて、震える声で質問に答える。

「う、うるさい。そんな事、私が聞きたいよぉ」

「ダメだア、こいつ……」

そんなかんだしている内に時は過ぎて行く。

もうすぐ授業が始まる時刻なのだが、この学園は好きな授業に好

きな時に参加する。
ったりする。

と言っ制度なので、問題にすべき事では無か

魔女魔人編「ドジっ子」(後書き)

あとがき、

葉乃愛ちゃん……

以前は非禁禁忌へ立ち向かうかつこいい少女だったのですが……
今はただのドジっ子扱いですね……

好きな授業に好きな時に参加する。

なんて素晴らしい制度なんだ……私の学校でも採用するべきだと思
う。うん。

それにして断末魔様の周りには常に女の子がいますね。

実はたらしだったり……おや、誰かが来たようだ。

魔女魔人編「正体不明」

薄暗い旧校舎の中を3人はその薄暗さに無気味さを覚えながらも
淡々と歩いていった。

3人と言うのは、断末魔と那由他と葉乃愛の事だ。

旧校舎は窓以外の物ほとんどが木で出来ていて、かなり腐食して
いるせいか、ものすごくカビ臭い。その上、足場は安定してはなく、
時々足が床に沈んだりする。

何と言うか、辺境の地に立つ古臭い無人の館に置き去りにされた
気分になる。

今も木で出来た床からはキシツキシツと乾いたような湿った音が
鳴り、その音が3人を余計緊張させる。

「ンで、結局何でお前がここにインだよ？ あんだけの事があつ
たンだア、大人しく保健室にでも言ってるよオ」

「う、うるさいわね！ あれくらいの事、平気よ！ 私の魔法は主
に水系だから虫の汚れもすぐ落とせるし問題無いわよ！」

そんなかんだも話をしながらも3人は例の大図書室へと到達する。
ただでさえこの状況に緊張しているのに、3人に更なる緊張が走
る。なぜなら、例の大図書館の両開き引戸の隙間から光が漏れてい
るからだ。

旧校舎は特別、電気が止められては無いが、大図書室だけ明りが
付いている事自体が不自然だ。そして、葉乃愛は切羽詰まった様な
声で2人に話しかける。

「だ、誰がいる……それにほんとにナンバー持ちだと、危ないわよ
……」

「な、なぜです!？」

「七不思議の続きに『もし中に入ったら襲われる』って……」

「だ、だいじょうぶですよ。もしそれが本当でもこっちには断末魔様がいるもん」

「オイオイ。人任せかよオ、お前ら」

そして意を決した那由他と葉乃愛は、大図書室に断末魔を蹴り入れる事にする。

まず、断末魔を引戸前まで連れて行くと、那由他がいきなり引戸開け、後ろで待ち構えていた葉乃愛が断末魔の背中を蹴る。

すると断末魔は「グエツ」と、らしくない声を上げながら大図書館へ転がり入り、その後、那由他が引戸を勢い良く閉めると僅かに隙間を開けそこから中の様子をうかがう。

その早技に反応が遅れた断末魔は綺麗に閉まった引戸に向かって抗議する。

「お、お前ら俺を凹に使うなんて、いい度胸じゃねエか、ゴラァ!」

しかし、断末魔はそこまで言う口を閉じてしまう。ただならぬ視線を背中の方から感じたからだ。

そして恐る恐る、後ろを振り向くとテーブルの上でなぜか下着とタンクトップしか着ていない少女が、小さな手の平の先に魔法陣を何重にも浮かべながら断末魔を睨んでいた。

そして少女は高らかに宣言する、魔法名を。

「『en:Mirror matter』」

少女の手の平の先の魔法陣が一瞬で波の様に端から黒ずんで行き、そして、黒ずんだ魔法陣から何かが断末魔に向かって猛スピードで溢れ出る。

それに対して断末魔は勘で宙に浮かび上がり、何か解らないそれを回避する。

幸いな事に大図書室は天井が高く、4階ほどもある。そして、壁には隙間なく大量の本が並べられた棚が存在し、壁の無い所はとも大きな本棚に大量の本が納められている。

そして断末魔はその本棚の上へと綺麗に着地し、その衝撃で収納されている本が地震があつたかのように揺らめく。

本棚の高さは各々に違い、3階ほどの高さの本棚もあれば、腰辺りまでしか無い本棚も存在する。断末魔が乗ったのは丁度2階ほどの高さの本棚で、良い感じに少女を見下ろせる。

「オイオイ……オリジナル魔法って事はマジでナンバー持ちかよ……」

上位の魔法使いとなれば自分で創造したオリジナルの魔法を使いこなす。

理由としてはまず、学園で教わる魔法は基本的に威力が弱い。そして、敵がその魔法を知っていると、どんな攻撃なのかを見切られるからだ。

これだと魔法を使う意味が無い。簡潔に言うと、じゃんけんで何を出すかがばれている状態なのだから。

となると、ほとんど魔法使いがオリジナル魔法を使うのでは？と考えるが、そもそもオリジナル魔法を創造する事自体が難しいかたりする。

と言う事を踏まえてオリジナル魔法を使えるのは、『卒業者』か上位の『ナンバー持ち』くらいなのだ。（例外もあるが。）

これだけで少女がどれほどの実力の持ち主かが窺える。

そんな様子を引戸の隙間から覗く少女2人がひそひそ話を始める。

「あいつ……かなり強いわね……その証拠にあの攻撃、私の最高魔法を使っても防げるかどうか……断末魔様を蹴り飛ばして正解だったわ」

「だ、断末魔様はだいじょぶかな……」

「何言ってるの。断末魔様は私達の先輩であり、上司なのよ。負けるはず無いじゃない！」

魔女魔人編「正体不明」(後書き)

あとがき

3人は中に入って行きましたね。

そして謎の少女……

それにしても謎の少女多いですね……

魔女魔人編「誤解」

2階位の高さのある本棚の上から少女を睨む断末魔。
本を読む為のテーブルの上から断末魔を睨む少女。

「（ちつ、なんだってんだア、アイツ！ ナンバー持ちがこんな所で何してんだよオ。それにあの格好……下着にタンクトップ一枚。変態じゃねエか）」

断末魔はそんな事を考えながら、さつき少女が放った魔法の向かった先を見る。

そこには当然だが本棚があり、特に変わった様子は無かった。しかし良く見るとその本棚の周辺だけ空間がねじ曲がっていて、空間が渦を巻くようにゆっくりと回転している。

「（なんだア？ あの現象……今までに見た事が無エ。そして原理が見事にわかンねエ。オリジナル魔法とは言え、ベースは基本魔法……にも関わらず解らない。まったく、この俺にすら解らない魔法を使っつて、どんな奴なんだア？ やはりナンバーは一桁台が妥当かア）」

断末魔が次々に思考を張り巡らせていると、少女が動き出す。

長い前髪の為、口元しか見えないが断末魔は確かに見る。無気味な笑みを浮かべ、魔法名を唱えているのを。

「 y o n 『ザ・ファステスト』」

少女が空間に滲んで行く。まるで、水分の多すぎた絵の具で絵を描くように。

そして次の瞬間、少女の声が聞こえる。それも、背後で……

「2008/95%23%『dark matter』」

断末魔が慌てて後ろを振り向くと、少女が目を光らせながら断末魔の目の前に黒く光る右手の平を向けていた。

そして間髪入れずに、何かが放たれる。今度は色があり、とても太い黒色のレーザーの様に見える。そのレーザーの太さは尋常で無く、断末魔を簡単に飲み込んでしまうほどだ。

そしてレーザに吹き飛ばされ、次々に本棚を貫通して行く断末魔。バラバラになった本のページが舞い上がり、断末魔の衝突による衝撃で関係無い本棚の本が滝の様に次々に落ちて行く。

やがて断末魔は七架目の本棚で勢いを止め、倒れてきた本棚に埋められる。

その様子を見た少女は安心したようにゆっくりと空中から地に足を着く。そして引戸の外に2人が居る事に気付いているのか、そちらに向かってそつと歩き出す。

その恐怖に怯えたのか、断末魔に罪悪感なのか、那由他は涙を流して震える声で葉乃愛に話しかける。

「あ、うう……ど、どうしょ……う。だ、断末魔様がま、負けちゃっ、ちやたよお！ わ、私達のせいだよね、……わ、私達があんなイタズラしたからあ……あ」

「そんな……そんな事って……くッ！ ここは私が戦うしかない！ 私の最高魔法で！」

葉乃愛に緊張が走る。少女を隙間からじっと観察する。そして謎の少女が引戸に触れると同時に、葉乃愛は魔法を唱える。

「轟々豪雨『ウォーターマニピュレ』」

が、葉乃愛が発した魔法名をかき消すような大きな音が大図書室に鳴り響く。何かが爆発したような音の後に、大量の本が落ちて行く音。

少女は慌てて後ろを振り向くと案の定、大量の本が宙から落ちて来ていた。そしてさらに上、その上で顔の半分が血で赤く染まった断末魔が、上を向き胸を前に出すように両腕を開いていた。そしてその姿勢で『断末魔』の様な声で叫ぶ。

「くそツたれがッ！ 誰がそいつらに手エ出して良いって言ったア！ ゴラアアアアア！！」

前を向き、血に染まった紅い瞳で少女を睨む。そして魔法名を吠える。

「THOD『断末魔』アアアア！！」

鎖に縛られた黒き門が現れ、何かが抜け出そうとしているのか、激しく揺れている。その振動で鎖が大きく揺れ、軽い金属音が不協和音を奏でる。

そして、門をこじ開け、黒き髑髏がムンクの様な叫びを上げ飛び出してくる。そのまま少女に噛みつこうと、大口を開け、ひたすら少女に向かって突き進む。そして、少女を一口で、飲み……………込め無かった。

少女が髑髏の上顎を両手で、下顎を片足で喰い止めたのだ。しかし髑髏は遠慮なく、顎を振り下ろす。少女の両腕からミシミシと嫌な音を立てる。

さすがに少女もこの状況は望ましくないのか、冷や汗を垂らし、

苦しみを露わにしていた。

そして、苦し紛れにこんな事を言い出す。

「な、何で君たちは泥棒なんてするんだよお！」

魔女魔人編「誤解」(後書き)

あとがき

最近疲れて、書き方が安っぽくなってきたかも……

はい、と言う事で今回は断末魔様が切れました。

彼を怒らせると怖そうですね……、元不良だし……

魔女魔人編「緊急集会」

「な、何で君たちは泥棒なんてするんだよお！」

その一言に断末魔の動きが止まる。

「泥棒だとオ？」

髑髏が霧の様に消え去り、力を使い果たした少女はぺたんと座りこんでしまい、そのまま倒れ込む。

断末魔は地に綺麗に着地すると、少女に駆け寄る。そしてその様子を引戸の隙間から覗いていた2人も断末魔に駆け寄る。

那由他は泣いていた事を必死に隠そうとしているのか、走りながら目の周りを擦り涙を拭くが、目の周りが赤く腫れているので泣いていた事が一目でわかる。

断末魔はその事を指摘はしなかったし、自分を蹴り飛ばした事も話題に出さなかった。恐らくその事で一番傷ついているのは、断末魔では無く2人でだし、那由他に至っては、再び罪悪感でいつ泣き出してもおかしくない状態だ。

断末魔はその事を踏まえ、今にも殴り飛ばしてやりたい所だがその拳を必死に抑えている。

これが彼なりの優しさなのだろう。

その時、断末魔の携帯電話に一通のメールが届き、初期設定の呼び出し音が周囲に鳴り響く。

断末魔は普段鳴らない携帯電話に疑心を抱きながら、折り畳み式携帯電話を開ける。そこには断末魔が所属している世界の平和と治安維持を目的とした組織からの緊急メールが届いていた。

内容は緊急の集会が開かれ、そこに断末魔を招待すると言った物

だ。

「あン？ 緊急集会のお知らせだとオ？ ちっ、こんな時に……お前達には来ていないのかア？」

「なにも……」

組織の上層部である断末魔にしかメールが届いていないと言う事は、かなり大きな問題らしい。少なくとも、下層部には言えない様な危険な事には違いない。

断末魔は2人に気を失っている少女を保健室に連れて行く様に命じると、しぶしぶ集会を行う教室へと向かう。

組織の話なのに集会の場所がなぜ、教室なのかと言うと、この組織の主催が学園だからだ。そして組織と言っても、そのほとんどは生徒で構成されていると言うのも理由だろう。

そんな集会へ向かっているその途中、廊下を歩いていると生徒達が断末魔の顔を異様に凝視している事に気付く。

「（あア？ 顔になンかついてンのかア？）」

そんな事を思い、手を顔に当ててみると普段の生活では味わえそうにない感触がする。

手を確認してみると、そこには黒くなりかけた血がべつとりと付着していた。

「あア。これかア。ちっ、たかが血くらいで騒ぐなっの」

そんな事を思いながら、断末魔は現生徒会室へと到達する。
しかしその部屋には誰も居なく、とても今から緊急の会議が行われる様には見えない。

だが、断末魔はその事には何一つうろたえずに、部屋の端にある、一人ぐらいは簡単に入りそうな大きな暖炉の前へ向かう。
実は昨日作られたばかりの七不思議の1つであったりする。

そんな暖炉に断末魔は足を踏み込み、携帯電話を閉まっているポケットと、同じポケットからマッチを取り出す。

「ちっ、わざわざ、面倒くさい仕掛けしやがってエ」

そう言っただけで着火する。しかしマッチから放たれたのは、赤ではなく無気味な緑の炎。

しばらくそれを虚ろな瞳で眺めると、マッチを足下へ落とす。ゆっくりと回転しながら高速で落ちて行き、足下にある薪へと火が触れた瞬間、爆発の様な無気味な緑の火柱が出来あがる。

その異常の様な火力は瞬く間に断末魔の姿を隠し、燃え盛っているかと思えば一瞬で鎮火する。

しかし、そこに断末魔の姿は無かった。

魔女魔人編「緊急集会」（後書き）

あとがき

今回は謎の少女との闘いの後を書かせて貰いました。

それにしても断末魔様……

優しいですね……

予定では断末魔様は悪逆非道！　って感じのキャラにするつもりでしたが

いつの間にか素直になれない照れ屋のツンデレになっていますね^

^；

まあ、私的にはこっちの方がいいかなっと思いつつある今日この頃です。

過去は落ちこぼれの不良だったらいいんですが、その話もいつか、書けるといいな〜と思います。

それにしても後半の、暖炉と緑の炎……理解して頂けたでしょうか？

ちよつと魔法世界っぽい事を書きたくなりまして、

暖炉と緑の炎を出すマッチを出したのですが、

まだまだ未熟だったため、上手に書けませんでした。

断末魔様がどこかへワープしたのと、雰囲気を感じていただければ幸いです。

あと、備考ですが、暖炉の仕掛けは魔法ではなく科学です^^；

このあたりはまた小説で明かせていけばいいな、と思います。

珍しく大変長くなりましたが、ここら辺で筆をおきたいと思います。

では、次のお話で^^

断末魔 The Hour Of Death（だんまつま・ジ
アワー オブ デス）

性別：男

年齢：16歳

性格：自称なし・他称ツンデレ

備考：学園のナンバー4。元墮落者で落ちこぼれの道を歩んでいた。

代表台詞：「くそツたれがッ！ 誰がそいつらに手エ出して良いつ
て言ったア！ ゴラアアアアア！！」

代表魔法：THOD『断末魔』

魔女魔人編「緊急会議」

突如開かれた、特別な緊急集会。世界の平和と治安維持を目的とした組織の上層部だけで行われるこの会議は、学園にいくつか存在する隠された部屋にて行われる。

やはり隠された部屋だけはあるのか、一般の生徒は立ち入る事が許されず、また、その存在すら知らない者も多い。そして何よりもその部屋への扉が、たくさんある生徒会室に設置されている暖炉だとは誰も思わないだろう。

万が一、それを見つけたとしても鍵となる緑の炎を放つマッチを持っていないてはならない。

そんな隠し部屋に断末魔は居た。なぜなら彼は組織の上層部だからだ。

「オイ。いきなり集会ってどういう事だ？　それも、一桁台のナンバー持ちだけでよ」

天井が限りなく高い、円柱型の純白の部屋がある。

部屋の片隅には生徒会室に設置されている暖炉とは、比べ物にならないほどの大きな暖炉が設置されており、部屋の中心には椅子取りゲームの様に、純白の椅子が円の様にならべられている。

そしてそれぞれ背もたれには数字が書いてあり、数字と比例して椅子の高さが違う事だ。簡潔に言くと、数字が小さければ小さいほど、背もたれと脚が長いと言う事だ。

そして断末魔は『4』と書かれた椅子に飛び跳ねた後のち座り、その椅子が極端に高い為、当然足を宙に浮かせている。

全部で9脚ほど椅子が並べられているが、ほとんどの席の人は座って居ない。

居るのは断末魔と『2』と書かれた椅子に座っている男、それと『7』と書かれた椅子に座っている女、わずか3名だ。

しかしこれはいつもの事で、全員そろって会議をした事などほとんど無い。いつもは4名ほどで会議を進め、会議に出席しなかった者は後で結果のメールが届く。

そんな感じに以外と適当に進めていた。

「なに、私としてはそれほど一大事にする様な事ではないのだが、一応上から報告する事があってな。それにしても、大事な会議に血まみれで来るとはな」

上の方から声がする。どうやら声の元は『2』の椅子に座る男のようだ。

断末魔はそれを無視し、『7』の椅子に座る女は男の台詞に対して鼻で笑い、手の上でサイコロを投げてはキャッチしている。

その時、暖炉に緑の炎が燃え盛り、一瞬で鎮火する。

そしてその暖炉から部屋を中心へと足を運ぶ1人の少女。その少女が『9』の椅子に座ると男が口を開く。

「これで4名だ。緊急集会及び会議を開始する。なんて堅苦しい事は言わぬ、要は私の話を聞き、その問いに答えれば良い。さて、単刀直入に言う。旧校舎でナンバー8が討たれた、心当たりのある奴は居るか」

そこに『7』に座る女が抗議する。

「私は知らないわ。しかし仮にもナンバー8、これを打ち破る事が出来るのはそれ以上のナンバー持ちか、『卒業生』または最近、噂に良く聞く魔女または魔人の仕業か」

そこへ断末魔が抗議する。

「お前ら人が悪リイなア。ナンバー8を討ったのは俺だア、とつくに気付いてんだろオ。だが、それにしても魔女、魔人ってのはどう言う事だア？ 奴らはとつくの昔に滅びてんだろオ？」

それに『9』の少女が答える。

「断末魔さん、知らないのですか？ 最近、魔女、魔人が蘇ったと言う噂。だけでも断末魔さんが言うように過去に彼らは我々、人間に戦争を仕掛け、激闘の末、敗れて行きました。今の私達はそんな彼らが残した技術を使い、魔法を作り、科学を作り、今があるので。しかし、彼らの技術で説明されていない事はまだ多い。その証拠にステンドグラスだけで出来た神殿、光を完全に遮断する神殿などが当てはまります。だから彼らの死の間際、私達では理解できない魔法、または科学を仕掛け、蘇った可能性があるのです」

次に『2』の男が講義する。

「長い説明をありがとう。しかし話の論点がずれている。私が言いたいのはそう言う事ではない。要はナンバー4が本当にナンバー8を打ち破ったのかを確認したかったただけだ。」

続けて断末魔が再び講義する。

「あア？ なぜ、そんな念入りにチェックする必要があるんだよ？ まさか、俺があいつ如きに負けるとでも思ってるのかア！？」

最後に『2』の男が閉める。

「まさか、数字の序列的にもそれは無いだろう。ナンバー8は旧校舎に度々現れると言う魔女、もしくは魔人の確認と、もし、それが本当ならば、大図書室に保管されている本の保護の任務に就いて貰ってただけだ。仮にナンバー8が知らない者に倒されていたりでもすれば、そいつが魔女、魔人の可能性が高いからな。念入りに確認しただけだ。さて、話は以上だ、これにて緊急集会及び会議を終了する」

魔女魔人編「緊急会議」(後書き)

新たなキャラクターが多数出ましたが、一部の数字と性別だけです。

今は出番が少ないのであまり深く考えないでください。

彼らもいつかは活躍すると思いますが^^;

彼らの数字は何を表しているか、理解してもらえたでしょうか？
うゝん……私なりに精一杯、表現してみたのですが^^;

それにしても『9』の少女……

一見は若そうに見えるのですか、

そんな若さで『9』に居ていいのだろうか^^;

あ、みんな若いかな。

魔女魔人編「不明瞭Unknown」

清潔感をイメージした白い保健室の片隅にベットが置いてある。その上には前髪の長い少女が座っており、その周囲の座りにくい椅子に座る少女2人。

葉乃愛と那由他だ。彼女らは何やら、もめ合っているようだ。

「それであんたは、何者なの？ 負けたとは言えあの断末魔様をそんなに苦しめるなんて只者じゃ無いよね」

「私は不明瞭^{ふめいりょう}Unknown一応、学園のナンバー8だよ」

「なんで、いきなり攻撃を仕掛けたの？」

「あゝうゝ。それは私の勘違いでえ……悪気は無かったんだよお、ほんとだよ？ 私は魔女、魔人の撃破の任務に……あ！」

アンノウンはそこまで言って、口を両手で押さえ黙り込んでしまった。

それに対して頭の上に疑問符を浮かべる葉乃愛と那由他。しかし、葉乃愛だけはそくざに感嘆符を浮かべ直し、楽しそうな声で

「魔女？ 魔人？ それ何の話？？ 詳しく聞かせてほしいな」

「む、だめだよ。これは企業秘密なんだから！」

迫る葉乃愛とは正反対の方を向き、口を固く閉ざしてしまったアンノウン。葉乃愛はアンノウンの向いている方に素早く回り込むとしつこく問い詰める。しかしアンノウンはまた正反対の方を向き一

向に口を開こうとしない。

そんな事を何回か繰り返していると葉乃愛は何かが閃いたのか、頭の上に電球を浮かべ、右手にグーを作り、左手にリパーを作って手を打つ。そしてニヤニヤとしながら、

「そういや、あんた……下着姿だよね……なんでつかなく？ ひよっとして露出魔？」

「あ、うう……。そ、それは……な、何て言うか……そ、その……ええ」と……。色々あつてえ……と、特に胸が……」

「魔人と魔女の事と下着姿だった理由、言わないと学園中にその噂ばら撒くわよ？」

「むう……。私何もしないのにい」。――

葉乃愛に脅され、渋々口を開き始めるアンノウン。

そして下着姿だった理由とここまでの経緯、それは組織の上層部から魔人、魔女と呼ばれる人物の待ち伏せ、そして捕獲する。

と言う任務を受け、大図書館で待機していたが誰も現れず、暇になったので、適当に本を漁っていたら、胸を大きくする本を見つけ、それを試してみようと胸を躍らせながら服を脱ぎ、いざ、それを開始しようとした時、誰かが現れてしまったので、やむを得ず、攻撃をした。が、結局敗れてしまい現状、と言う事だ。

「け、決して下着姿が目撃されたとかそんなんじゃないからね！ ほ、ほんとだよお！？」

アンノウンは顔を真っ赤に染め、手を横に思いつき振り必死に補足説明する。

しかしアンノウンは普通の女の子より色が白く顔が赤くなると、とても目立つ。逆に言えば、顔を赤く染めると色が白いと言う事が再確認される、と言う事だ。

そしてそれが、同じ女子である葉乃愛と那由他を苛立たせ、話をもつて行く。

魔女魔人編「不明瞭U n k n o w」（後書き）

あとがき

今回は少しネタに走ったと思います。はい。

それにしてもアンノウちゃん……

私は個人的に気に入っているのですが……

直訳で『不明不明』……

まあ何かの伏線だと思って頂ければ幸いです。

あと、前回のナンバー持ち達も何かの伏線だと思います。

あとアンノウは貧乳キャラです。

おや？ また誰かが来たようだ……

ふめいりょう・アンノウ
不明瞭U n k n o w

性別：女

年齢：14歳

性格：自称貧乳・他称貧乳

備考：学園のナンバー8。影が薄い……しかし、薄くない。

そして暗い、しかし明るい。

アンノウの使う魔法はオリジナリティーが強すぎて

本人以外に見切られる事は無いだろう。

容姿：下着にタンクトップ一枚で登場。

髪は茶色で前髪が長く、左右にメッシュを入れている。

代表台詞：「あーっ」

代表魔法：『en:Mirror matter』

yon『ザ・ファステスト』

魔女魔人編「裏切り者」

滝の様な豪雨の中、今は人が居ない廃墟ビルが存在する。

そのビルはやはり人が使ってないおかげで、汚れがひどく、ガラスは透明感を失い黒ずみ、場所によっては割れ、雨水などがたやすく侵入していた。

そして、非禁禁忌と呼ばれる青年と黒きローブを身に纏う老人は、そんなビルが永遠と平行に並び、出来上がった道のド真ん中で会話をしていた。

「しつこいのお。まだ、わしを追って来るか……『裏切り者』しかしお前も可哀想な奴じゃな。なぜかは解らないが、わしを倒す為に悪に成りすまし、世間から罵倒されておるのだからな。そろそろ、教えてくれまいか？ そうまでして、わしを追いかけて来る理由を」

「……しらばくれるのも、いい加減にしたらどうだ、『卒業者』同じ『卒業者』である俺が気付かないとでも思っているのか？ 魔女、魔人の件だ。例え、世界の全てが俺の敵になろうとも俺はその世界を救って見せる」

「気付いていおったのか……じゃったら、話は早い。フオフオフオ……その生き残りはな、学園に向かわせたわ。しかしそこへ向かうのは、このわしを倒してからにするんじゃない。新・古代魔法『ライトレイディエーション』」

老人はそう言っつて、今までローブで隠れていた手を出すと、空に向けて指差す。そこから直径1mほどのレーザーが魔法陣に囲まれながら放出され、空高く上がって行く。そして重力を受けるのか徐々に減速して行き、やがて放物線を描き徐々に加速しながら非禁禁

忌の元へと向かって行く。

それに対して非禁禁忌はレーザーを受け止める為、左手を頭の上へ持って行くがレーザーがその手に当たる瞬間、何本もの小さなレーザーへとなって四方八方へと散って行き、周囲のビルを破壊して行く。

その結果、その襲撃に耐えられなかったビルは次々に転倒して行き、非禁禁忌へと覆い被さる。

日常生活では聞けそうにも無いビルが転倒する強烈な音と共にガラスが割れ、アスファルトが割れ、瓦礫混じりの砂埃が上がって行く中、何とか転倒は免れたビルの屋上からその様子を楽しそうに眺めていた。

「まだ終わりではあるまい。古今魔法『ダークレイディーエーション』」

老人の手に黒い弓が握られる。そして矢を装着されていない弓の弦を力強く引くと、砂埃が晴れかけてきたビルの山に向かって、弦を離す。

すると、矢が装着されていないにも関わらず何かが放たれ、ビルの山を粉々に吹き飛ばす。

老人はそれを満足げに眺めていると、後ろから聞き慣れた声が聞こえる。

「……C i d e『ジエノサイド』」

慌てて後ろを振り向くと、そこには半透明の武器を今、まさに手に取るうとしている非禁禁忌が傷はおるか埃一つ付けずに老人を睨んでいた。

そして非禁禁忌の手に掴まれた斧は色を得、その実態を明らかにする。

テニスラケットを振る様な動作で斧を掴んだ非禁禁忌はその勢いを殺さず、斧を投げる。

風を切るような音を周囲に鳴り響かせながら激しく回転する斧、その回転数は凄まじく、その回転によって生み出された衝撃は屋上のコンクリートを小刻みに刻み、遠く離れた老人の黒いローブをもちり裂きながらひたすら直進する。

老人はその斧をご老体とは思えない様な脚力で跳ね上がり斧を回避するが、すでにその上には非禁禁忌が巨大な大剣を持って先回りしていた。

老人はその事に気付くも空中では身動き取れない為、無情にもただひたすら非禁禁忌へと近づいて行く。

「……もう、終りにしよう。」

非禁禁忌はそう言い、目の前に迫った老人を大剣のみねで叩き落とす。屋上を貫き、次々に床を貫通しながら最下層へ叩きつけられ、不安定になったビルが覆い被さる。

非禁禁忌は別のビルの上から、埃が晴れるまでそれを見届けると独り言を残しこの場を去る。

「……学園か。久しぶりだな……」

魔女魔人編「裏切り者」（後書き）

あとがき

久しぶりの主人公の登場！

まあ断末魔様も主人公なので、出番が偏ってしまうの仕方が無い事です。うん。

さて、今回は非禁禁忌と老人との戦闘を書かせてもらいました。かなりカットしたんですよね……異様に長くなったから……

そして戦闘に勝った非禁禁忌が学園へ向かう伏線も残しています。やっと主人公2人が活躍するシーンが書けそうです。

そして非禁禁忌には悪いが、私は断然断末魔様の方がお気に入り。（作者がこんなこと言っているのですかね^^;）

そして一件落着くまで長い^^; ;
物語はこれからって感じでもんね……かなりの長編です……

ひきんきんき
非禁禁忌

性別：男

年齢：16歳？

性格：無口

備考：学園を守るため、自ら悪役を演じる主人公。詳細は不明。

代表台詞：「……もう、終りにしよう」

代表魔法：Fortuna『エターナルライフ』
Cide『ジエノサイド』

魔女魔人編「迷子」

会議が終わり断末魔は部下たちに予め（あらかじめ）向かわせておいた保健室へ向かっていた。

会議が終わってすぐ顔を洗ったのか断末魔の顔に付着していた血は綺麗に拭き取られており、他の生徒たちも断末魔を特に凝視する事は無かった。

しかしそれでも断末魔は視線を集めてしまう。なぜなら、かの有名な断末魔が身近を歩いているからだ。誰だって有名人を視界の端に捕らえてしまうと、どうしてもそちらに振り向いてしまうものだ。だが断末魔はもうそんな状況は慣れてしまったのか、周りの生徒にまったく興味を見せずただ保健室を目指して歩いている。それもただ闇雲に。

「あア？ どこだア、ここ……」

この学園には無数の学び舎が存在する。

その中で自分の気に入った授業を開催する学び舎を見つけると、そこへ授業を受けに行くのだが、そうなると授業を受ける学び舎が毎回、変わってくる。

その結果、断末魔のように迷子になる生徒が続出する訳だが学園もそれに対する対処はちゃんとしてある。

そしてその対処なのだが、あろう事か校舎内にデパートに有りそうな巨大な地図と、その地図を見ても分からない人の為に『ご案内センター』と言う物が設置されている。

しかし『ご案内センター』の世話になるのは恥ずかしいと言う人が多い為、その肝心の『ご案内センター』はほとんど利用されて無かったりする。

その結果『ご案内センター』の係員は何もすること無く、冷房の利いた部屋で、仕事を終わらせる事が出来るので、最近、若者に人気のアルバイトであつたりもした。

そんなあからさまに、らくして稼ぎたいと言う欲望だけの人が担当する『ご案内センター』に断末魔は地図すら見ずに何の躊躇^{ちゆうちゆう}も無く、向かい、係員に問いかける。

「保健室を探しているんだがア？」

若い係員がフロント越しにめんどくさそうな顔をしている。

断末魔がその事に少しイラつき始めた時、後ろから良く聞き慣れた声が聞こえる。

「断末魔様。こんな所に居たんですかあ。遅かったんで探しに来たんですよ。ん？ ご案内センター？ …… ふふふふふ…もしかして迷子になったんですか？ ふふふふふ…」

声の主は那由他だった。そして台詞の内容が見事に腹が立つ。しかし正論なので何も言い返せない断末魔。彼は体をわなわなと震えさせると拳を強く握り、

「ちつ、こんなタイミングで来やがって……行くぞオ！」

「はーい！ ふふふふふ……」

軽く顔を赤く染めながら歩き出す。

那由他はその後ろでニタニタとした笑みを浮かべながらヒヨコの様について行く。

魔女魔人編「迷子」(後書き)

あとがき

断末魔様のイメージが崩れていくウウア！(中。
。
)中
しかしそれも有りだな、と思う今日この頃。

魔女魔人編「エアブレイカー」

保健室の引き込み扉を勢い良く開け、断末魔が入ってくる。
しかし態度が普通では無く、少し苛立っているようだ。そしてそれを裏付けるように、言動が人に恐怖を与える様に冷たい。

「あの女は目エ覚ましたかア？」

気迫あるその態度にアンノウンと共に居た葉乃愛が体を強張らせる。

やはり力の差が葉乃愛を本能的に緊張させたのだろう。

葉乃愛は道を譲る様に部屋の端へと寄ると葉乃愛の影に隠れていたアンノウンが姿を表す。

「何だア？ すっかり元気そうじゃねエか？」

冷たい視線を送られ、今度はアンノウンが硬直する。

そして見せ付けられた力の差と罪がアンノウンを束縛し何の抵抗も出来なくする。その結果、アンノウンはベットの隅でカタカタと体を揺らす事しかできなかった。

「なにビビってんだア？ 自分のした事くらい分かってんだろオ？」

「あ……う……」

冷たい仕草に冷たい言動。

これらがアンノウンと葉乃愛だけでなく、断末魔の後ろについて来た那由他や保健室の空間までも凍り付ける。

さすがにこの空気はヤバイ、と感じ取った葉乃愛や那由他が断末

魔を落ち着かせようとこの冷たい場に入ろうとするのだが、断末魔から放たれる威圧で上手に思考が回らず、体の前で両手をふらふらと揺らしながら、おろろおろろと、動揺するしかなかった。
しかしそんな中、その断末魔から意外な言葉が溢れ出る。

「お前はお前に任された任務を遂行しただけだろ？ なにビビってんだあ？ して当たり前の事をしただけだろ？ もっと堂々と胸を張ったらどうだ？ 俺は別に怒ってねえよ。だから、ビビンなっつってんだよ」

目到大粒の涙を浮かべるアンノウン。

当然この涙は恐怖からではなく、勘違いで無実の人間を傷付けた自分を、あっさりと許してくれた断末魔の優しさに対してだろう。

その様子から察するとアンノウンは勘違いとは言え、断末魔を攻撃した事をよほど悔やんでいたようだ。

「なに、泣いてんだア？ 人が快く許してるって言ってるんだからもつと喜んだらどうだア？」

「あゝううゝ、けど何であんな苛立っていたの？ てっきり私の事をすごく怒っていると思ったの……」

「あア？ その事がア……あア……」

断末魔はそこまで言って口を閉じてしまふ。そして断末魔は言えなかった。

迷子になった自分を那由他に目撃された、などと言う事を。そんな状態の断末魔を良い事に那由他が調子乗り始める。

「断末魔様…… あゝ断末魔様。私は…… 那由他は、今すごく感動

しています！ その断末魔様の男気溢れるツンデレに！ 任務と言う理由でさりげなく許す。ああ……いい！！ 私はあなたのおそばに生まれる事が出来て、本当に幸せだと思います。……ふふふふ…… ああ、いい！ ふふふふ……」

無気味な笑みを浮かべる那由他。

これのせいで保健室の空気がさらに冷たくなったと言う事は言うまでも無い。

魔女魔人編「エアブレイカー」(後書き)

あとがき

断末魔様……最初はこんなキャラじゃ無かったのに……

そしてこうなる予定も無かったのに……

悪逆非道となるはずだった断末魔様は何処に……

でもそれがいい！ ふふふふふ……

魔女魔人編「卒業確定者」

学園と言う名の土地内に、たくさんある学び舎の内の一つに非禁禁忌は居た。

何かを探しているらしく、視線は一定のものを見つめていない。たえずキョロキョロと、眼球を忙しく動かし、手当たり次第に何かを見つめて行く。

そして目当ての、ものを見つける事が出来ないと校舎を移動すると言う事を繰り返していた。

「……ここもはずれか……」

尋常では無い速度で次々に校舎を変えて行く非禁禁忌。

その速度からは非禁禁忌がただ者では無いと言う事が読みとれる。そしてもっと不思議な事に非禁禁忌は誰とも出会って居なかった。つい今までは。

「学園内をこそこ這い回る不法侵入者が居るかと思えば、お前だったのか」

何気ない渡り廊下を歩いていると突然、後ろから声を掛けられる。その渡り廊下には、なぜか生徒の姿は全く見えず、非禁禁忌と声の主の2人しか居ない。恐らく非禁禁忌の力だろう。

そんな不思議な空間で2人だけの会話が進められていく。

「……お前は？ なぜ俺と出会う事が出来た？ ただの魔法使いが俺と出会う事が出来るとも思えない。何者だ？」

「ああ、説明がいちいちめんどくせえ。卒業確定者、学園のナンバ

「1。こんだけ言つてわからねんだつたら勝手に推理してる。んでえ、俺が言いたい事はそんな事じゃないって話。……お前、非禁禁忌だろ？ 世間を騒がす裏切り者として有名だからな、間違えるはずが無い。んでえ、肝心なのがそんなお方がなぜこんな所に居らつしやるんだつて事。あ、一応言つとくが逃げようなんて思ふなよ？ 俺も一応仕事でやってるんでねえ。さあ、答えて貰おうか？」

自らをナンバー1、そして卒業確定者を名乗った男は話しながら渡り廊下の窓に近づき、窓を全開に開ける。外から涼しげな風が吹きナンバー1と非禁禁忌を優しく包み込む。

ちなみに卒業確定者とは、すでに卒業に必要な条件を満たした者の事である。つまりあとは卒業式が訪れるのを待つだけで卒業が出来る魔法使いと言う事だ。

「……魔女、魔人を追いかけている。それだけだ。あと一応言つとくが、邪魔しようと言うのなら容赦はしない」

「こええ回答だな。まあ、お前の目的を邪魔しようつて気は微塵も無い。魔人、魔女の事については興味が無いんでね。仕事つてのも適当にやってりゃあいい。けどなあ、お前には興味がある。あ、別に変な意味じゃねえぞ？ んまあ、簡単な話、俺はお前に攻撃を仕掛ける事にした。一応、理由を述べるとしたら、暇だからか？ 自慢じゃねえが俺の力はこの学園内では断トツでねえ、ろくに戦える奴がいねえって訳。んじゃ、行くぜ？」

そう言つてすぐ、ナンバー1が窓から仰向けで落ちて行く。もし他に生徒がいたなら数名の生徒が窓に近づき下の様子を窺つただろう。

しかしこの空間には非禁禁忌とナンバー1の2人だけしか居ない。

つまり窓から下の様子を窺う者など居ないと言う事だ。
今も誰も居ない窓からは優しい風が吹いている。
そんな中、非禁禁忌は廊下に中心でただ立っていた。

「少しくらい心配してくれても、良いじゃねえか」

またもや非禁禁忌の背後からナンバー1の声が囁くように聞こえる。

それと同時に非禁禁忌は背中を蹴られたらしく、窓は愚か、コンクリートで作られた壁をも、破壊しながら外へと放出される。

「悪いなあ。俺は空間を操る魔法を得意としてるから、こんな事も出来てしまう訳よ」

ズボンのポケットに手を入れながら余裕をかましてるナンバー1。
次の瞬間、校舎全体が揺れ、校舎のあちこちからコンクリートにヒビがいく嫌な音と共に天井や壁から埃が落ちてくる。

「まさかな……」

魔女魔人編「卒業確定者」(後書き)

あとがき

久しぶりの主人公の登場です。

そして、学園のナンバー1のお出ましです。

何しに出てきたんでしょね^^;

まあ、一応暇つぶしと言う事になっていますが……

と言うより、ナンバー1なのに損な役ですね^^;

まあ、可哀想なので彼はちよくちよく登場させたいなと思います。

魔女魔人編「差」

校舎全体から崩壊を予想させる、嫌な音が鳴り響いた途端、予想通りにナンバー１が居た渡り廊下が崩れて行く。綺麗に渡り廊下のみが崩れて行き、ナンバー１が空中に放り捨てられる。

「おいおい、マジかよ。あいつは誰にも見つからない様に隠密行動して来たんじゃないのかよ？ 何でこんな派手な攻撃を？」

ナンバー１は空中で、呆然とそんな事をばやきながらも、綺麗に体制を整え中庭に着地する。

周りは校舎に囲まれていて、外からは辛うじて中の様子が見えない。しかしその校舎からは丸見えで、今にもその騒ぎを目の辺りにした生徒が、中庭に飛び出して来てもおかしくない状況だ。

しかし、誰も中庭に飛び出して来る気配など感じられない。それどころか、校舎からも人の気配が感じ取れない。

この状況にナンバー１が珍しくうろたえ始める。

「これもあいつの力か？ 人を操るって尋常じゃねえぞ」

「……何をそんなに動揺している？」

非禁禁忌が背後に居た。それだけでナンバー１は軽く恐怖を覚えるのだが、さつき自分がした事をそのままそっくりに、やり返される事で更なる恐怖がナンバー１を襲う。

その恐怖と言う感情に対してナンバー１は舌打ちをすると、空間を捻じ曲げ、歪んだ空間に身を隠す。非禁禁忌は特に追い打ちを掛けようとはせず、もはや脅しとも言える敵の戦闘分析を報告する。

「……ほんとに卒業確定者の様だな。魔力による、特殊能力の取得。お前は魔力を周りに散乱させる事により空間に歪みを発生させる。その結果、空間移動、平たく言うところではワープが可能と言う訳か。この特殊能力のメリットは魔法名を唱える事無く、瞬間移動を可能にすると言った所か」

ナンバー１は姿を現さず、どこからともなく非禁禁忌の発言に返答する。

「やれやれ、こんな一瞬で俺の力を看破するとはな。とんでもない奴にケンカを売ってしまったぜ。これでは退屈しのぎにならないな、殺されてしまいたいそう。……もう行って良いぞ、俺はお前に興味が無くなった。それと結果的にお前の邪魔になった事は謝罪する。その詫びとしてこの校舎は俺が修理しといてやるよ」

非禁禁忌は自分以外、誰も居ない中庭で笑みを浮かべると次の校舎へ向かう。

そうして誰も居なくなつた中庭で渡り廊下がひとりで、修復されていく。

魔女魔人編「差」(後書き)

あとがき

あっさりと負けてしまったナンバー1。

ナンバー1も弱くは無いんですが、相手が悪かったと言っべきですね……

魔女魔人編「不意打ち」

「まったく、何でナンバー1のこの俺が1人で、それも地道に渡り廊下の修理をしなくちゃならねえんだ。……少しカツコつけすぎたか……はあ、めんどくせ。こんな事になるんなら本気で戦えばよかったなあ」

空間の歪みに身を隠していたナンバー1は中庭に姿を現していた。空間に隠れながら修理をすれば良いものを、わざわざ外に出てきた理由……恐らく、魔力の無駄な消費を抑える為か、空間の歪みが心地よくないからだろう。どっちにしろ空間から姿を表すのには十分な理由だ。

その時、校舎から中庭に入る為の扉が開く音がする。

「っと、客人か。そうか、あいつが居なくなっただけから人が集まる様になったんだな……まあいい、少しの間、眠って貰うとするか」

そう言つて姿を空間の歪みの中に隠す。

客人は1人では無く数名居るようだ。

もちろん客人はこの場にナンバー1が潜んでいる事など知らない。ただ、大きな音がしたから様子が気になって野次馬に來ただけだ。ただそれだけなのに、理不尽な事にもナンバー1の不意打ちを受ける事となる。

「すまねえな」

ナンバー1がそう言つて空間から数名の客人の中の、少女の後頭部を軽く叩こうとする。

人の一部がぶつかり合う嫌な音が周囲に静かに響く。

その結果、叩かれた少女は気を失い、その場に膝をつくように…
…倒れなかった。

「ああ？」

ナンバー１が意外な結果に声を漏らす。

少女はその場で屈むように、ナンバー１の攻撃を回避し、ナンバー１の手首を掴んでいた。

ナンバー１の不意打ちを見事に回避し、ナンバー１の手首までを掴んだ少女。ナンバー１はこの少女に見覚えがあった。

「てめえは……？」

次の瞬間、ナンバー１が少女に放り投げられる。コンクリートで出来た校舎を豪快に破壊しながら。

しかしそんな状況でも、ナンバー１には余裕があった。その証拠に今も校舎の壁を突き破りながら、あの少女が誰なのかを必死に思い出していた。

「確かえーと……そうか……あいつは不明瞭 U n k n o w か……」

魔女魔人編「不意打ち」(後書き)

あとがき

最近は学校の疲れや忙しさでなかなか書けなくなりました。

(文化祭や体育祭でね……)

はい、と言う訳であとがきです。

ここにきてなんか、スランプ気味……orz

グダグダ小説になるかもしれないです><

魔女魔人編「探索気分」

「隣の校舎から大きな音がすると思ったらア……なんだア？ こりやあ？」

断末魔はその隣の校舎の変わり具合に、呆然としながら絶句としていた。

それもそうだろう、自分の気に入った授業が開催される度に足を運んだ、まあまあ愛着のある校舎の渡り廊下が跡形も無く崩れ落ちて居るのだから。しかもそれだけでは無い、大きな音が鳴ってから数分しか経っていないと言うのに、もう修復の跡が見えると言うのだからなおさらだ。

しかし、肝心な事にその修復をして居た人物が見当たらない。その人物に話を聞けば少なからずとも、状況が少しは飲み込めるだろうと判断したのだが、どこを見渡しても一向に見つかる気配がしない。それどころか、誰も見当たらない。

その様子からは、この校舎には誰も居ない孤独な廃墟、と思わせる錯覚を覚えるほどだ。

しかし校舎内は綺麗に掃除されていて、埃なども見当たらない、不思議だ。

「と、とりあえず断末魔様……先頭で奥に行ってくださいよ。私こうゆう雰囲気苦手で……」

珍しく那由他が弱気で、断末魔の影に入ろうとする。

その後ろに葉乃愛がまたもや丸腰で、さらにその後ろでアンノウンがポケーとしながらついて行っている。

アンノウンのその様子を葉乃愛が食い付いたらしく、なぜかこそこそと話しかけている。

「ね、ねえ、あんた……なんでそんな放心状態なのよ……」

「あ〜う〜」

アンノウンの適当な返事に、だめだこりゃ、とため息をつきながら再び、前に集中する。

するとそこには中庭に続く小さな扉があった。その大きさは、人が2人通るのが限界なほどの大きさで、今は特に急いでいる訳では無いので、当然、1人ずつ、扉を通る事になる。

そしてまず、先頭に行く断末魔が扉を通る。

「これはひでエな……」

崩れた渡り廊下は、校舎の外から確認できるくらい被害が大きい。現に外から中の様子を確認した、断末魔達がここに来ている訳だから、相当大規模な事故だ。

「近くで見るとよりひどく見えますね……… いったいどんなレベルの魔法使いが暴れたんだか…… ナンバー持ちは確定ですね」

那由他が客観的に捕らえた感想を、断末魔に述べていると、急に後ろから大きな音がする。

慌てて振り返ると、さっきまで放心状態だったアンノウンが斜め上に何かを放り投げたらしく、上へ上へそれも斜めに大きな穴を開けていた。

「なんだア？」

状況を上手く理解できない断末魔と那由他が、頭の上に疑問符を

並べている。

葉乃愛は辛うじて何が起きたか理解しているらしく、急いで断末魔の後ろへ隠れると、

「だ、断末魔様！ 敵、敵、敵、が来たわよ！ は、早くやつつけちやいなさいよー！」

なんて無茶振りだア……、と心の中で呆れながら呟いていると、不意に後ろから声がする。

葉乃愛や那由他のものではない、明らかに男の声だと認識できるがどこか軽い声が……

「つたく、何で上位のナンバー持ちが2人も居やがるんだあ？」

それと同時に男は断末魔の背中を蹴り飛ばす。

断末魔は何の抵抗も見せずに、この男同様、コンクリートの壁に大きな穴を開けながら、どこかへ飛ばされてしまう。

魔女魔人編「探索気分」（後書き）

あとがき、

体育祭が終わり少し落ち着いてきました。

しかし次は文化祭……

2学期は忙しいですね……

と言う訳で、久しぶりの戦闘シーン？です。

あ、非禁禁忌とナンバー1との闘いを忘れてました。

まあ、少し、しか闘わなかったのであれば、ノーカンと言う事でハ

ハ；；

魔女魔人編「Seraphimarm」

断末魔が蹴り飛ばされ、この場から退場した事により、女の子3人組に戦慄が走る。

その証拠に那由他と葉乃愛は顔を真っ青に染め、冷や汗を流している。しかしアンノウンだけはそこまで追い込まれていないらしく、冷や汗を流しながらも何とか構えていた。

そして女の子達の中で一番余裕のあるアンノウンが、男に問い詰める。

「君は誰？」

「俺か？ 俺は卒業確定者、ナンバー1の涅槃寂静ねはんじゃくじょう Akasha。と言ったら通じるか？ ナンバー8さん。俺がここまで名乗ってやってんだ、感謝しろよ」

「ナンバー1の涅槃……寂静……そ、そんな人がなんでこんな事するの？ 私達、何か悪い事した？」

涅槃寂静がその問いに答えようと、口を開けかけた時、何者かが割って入る。

「おしゃべりはおしまいだア……不意打ちとは良い度胸じゃねエか？ 学園のナンバー1さんよオ？」

そう言つて穴の空いた壁の先から猛スピードで走って近づいて来る。

涅槃寂静は断末魔のその反応に驚いた。なぜなら、力の差が分かっているにも関わらず、臆す事無く立ち向かってきたからだ。そし

て何よりも断末魔のその態度は演技などでは無く、正真正銘の反応と言う事に。

しかしナンバー1もそんな事でいちいち臆すはずも無い。

「今の俺は機嫌がわりいぞ？」

ナンバー1はただそう言つて、断末魔、目掛けて走り出す。
その様子を女の子3人組は見守り続ける。

「Defragmentation『断片化』アアアアア」

「アリストテレス『topos』」

2人の魔法名が交差する。

同時に2人の周りに魔法陣が出現する。

断末魔の魔法陣は相変わらず、黒い門を模様していて、禍々しい。
それに比べてナンバー1の魔法陣は2つの魔法陣が重なっており、
下の魔法陣が赤く、上が茶色い。

その事が断末魔に確認出来た、次の瞬間、ナンバー1の二つの魔法陣が分裂し、断末魔を上下で挟むような位置に移動する。

「何の真似だア？」

断末魔は上に浮いている茶色の魔法陣と、足下の赤の魔法陣を順番に見つめながらも、加速する。そしてナンバー1と、あと数歩と言つ距離まで詰めた時、断末魔の黒き門が開かれる。

乱暴な事にも何かが魔法陣を突き破つたらしく、ガラスのように破片が飛び散っている。

その次の瞬間、断末魔が細い腕でナンバー1を殴りかかると同時に、破られた門から、2本の人の腕を模様した巨大な機械が周りの

壁を破壊しながら飛び出す。

そして機械仕掛けの腕とも、腕を模した機械とも言える、それはナンバー1をがっちり両手で握りしめ、決して逃げられない様に束縛する。

「Seraphim arm、機械天使の腕に握られる気分はどうだア？」

断末魔はそう言っ腕を、後ろへ払う。すると機械天使の腕も釣られるように、校舎を破壊しながら、後ろへと移動する。そして力一杯に腕を振るう。

その結果、ナンバー1はアンノウンに投げられた時とは、比にならない速度でそれも治すはずの校舎を豪快に破壊しながら、校舎の中を無理矢理突き進められる。

魔女魔人編「Seraphimarm」（後書き）

あとがき

機械天使……やっとタイトルが小説内で出てきました。

最初から出す予定で書いていたんですが、なかなか書けずに、ここまで来てしまいました^^；

涅槃寂静 Akasha……

Akashaには空間と言う意味が込められています。

涅槃寂静は、うん、説明長くなるからここでは控えておきます。

魔女魔人編「偽りだった勝利」

「断末魔様……本気出すと恐ろしいんですね……」

ナンバー1を機械天使の腕と呼ばれる魔法で吹き飛ばし、敵が居なくなった事により、静まり返った校舎。そこで那由他が断末魔の実力について恐る恐る尋ねてみる。それに対して断末魔は眉を歪ませ、

「あア？ 俺の本気だとオ？ 俺の本気なンザア、見せたつもりは無いぜエ？ ……あいつ以外はなア」

あいつと言われても心当たりの無い、那由他は頭の上に疑問符を浮かべる事しかできなかった。それに今の断末魔にあいつの事を詳しく聞く勇氣も無い。もしそれで断末魔の機嫌を損ねたら次は自分が危ないからだ。那由他は断末魔はそんな人では無いと分かって居ても、あれだけの力を見せられると、あいつについて聞く勇氣が湧かなかった。

「ちっ、胸糞悪リイな……」

断末魔はそう言っこの場を去ろうとする。しかし1歩、踏み出しただけですぐに立ち止まってしまふ。それも口から赤い液体を吐きながら。

「あア……？」

断末魔が立ち止まってしまった理由……それは急激な痛みを腹部に感じたからだ。

顔を歪めながら痛みの原因を凝視すると、岩を削って造られた様な槍が腹部を綺麗に貫通していた。

しかもそれだけでは無い、大量の血液が殺傷している個所から滝の如く溢れ出ている。

槍は断末魔の背後、上に浮かぶ茶色の魔法陣から飛び出していた。

「意外と、もろいな、お前」

ナンバー１の声が聞こえる。しかし姿は見えない。空間系の魔法を駆使して姿を隠しているのだろうか。

なにせよ、これでは反撃する事は愚か、相手の場所も掴めないまま不意を突かれて大打撃を受けかねない。とても危険な状況だ。

断末魔はナンバー１がなぜ、ナンバー１になれたか、少し理解した様な気がした。

そしてそんな危険な状態に関わらず、そこで断末魔は気を失ってしまう。

魔女魔人編「偽りだった勝利」(後書き)

あとがき

断末魔様、敗北……

断末魔様がお気に入り私の私としてはこの結果はあまり望んでいなかったのですが、

非禁禁忌と断末魔様の実力の差を、ナンバー1を使い、表したかったので、

断末魔様には、泣く泣く、倒れて貰いました。

断末魔様ああああああ

魔女魔人編「恩と恩返し」

次に断末魔が目を覚めたのは、どこか見覚えのある保健室のベットの上がった。

なぜかベットからは、女の子、特有の良い香りがする。断末魔はその香りで目を覚ましたと言っても過言では無いだろう。

「あア？　ここは……不明瞭が寝ていたベットじゃねエか」

まだはつきりしない意識のまま、断末魔はなぜ、ベットからアンノウンの香りがしたか簡潔に推理して見た。

ここは小さい保健室の為、ベットが一つしか置いていない。その結果、アンノウンの使っていたベットを使い回しされたのだろう。そんな事を考えていると、横から聞き慣れた声がする。

「断末魔様……あまり無理しないでくださいませ」

那由他だ……後ろではアンノウンが心配そうな目で見つめている。葉乃愛は居ない。

断末魔は痛む体を起こし、現状に至るまでの説明を求めた。

「ナンバー1さんは断末魔様が倒れてから、人が変わった様に優しくなりました……私達と断末魔様をここまで運んでくださいましたのです」

「なんだってんだ、急に優しくなるって。ところでお前……話し方が変じゃねエか？」

「そ、そんな事はありません！　わ、私はお手洗いに行ってきます」

！
」

慌てて部屋を出て行く那由他。断末魔はそれを首をかしげながら見送った。

アンノウンは那由他が部屋を出て行った事を確認すると、口を開き始める。

「あゝ……うゝ。大丈夫？ 断末魔君。那由他ちゃんはね、食事や睡眠もろくに取らず、断末魔君の看病をしていたんだよ。それも3日間も。それに断末魔君、死にかけ5秒前みたいな状態だったから、那由他ちゃんが本当に焦っていて、それで急に目を覚ますもんだから、慌てて平常を保とうとあんな話し方になったんだよ。だから那由他ちゃんに感謝するんだよ？ あ、それと葉乃愛ちゃんにもね。葉乃愛ちゃん、わざわざお家帰って、ここより良い医療道具、持って来てくれたんだから」

「ちつ、変な所で恩を売られてしまったなア。心配すんなア、俺は売られた恩は必ず返す。例え命が代償でもなア。命を守られたつてんならア、なおさらだア」

アンノウンは優しく微笑む。断末魔はその笑みに対して鬱陶しそうに目を反らす。

その時、校舎全体が激しく揺れ、砂埃が天井からぱらぱらと落ちてくる。

アンノウンと断末魔は奇遇にも目が合うと、断末魔は立ち上がるようにする。

「どこに行くの？ 断末魔君はまだ、病み上がりでしょ！」

「さっき言ったじゃねエか、命に代えても恩は返すって。この騒ぎ

にあいつらが食いつかねエとでも思ってたのか?！」

断末魔は痛む体を起こし、立ち上がる。

少女2人を守る為に。

魔女魔人編「恩と恩返し」(後書き)

あとがき

ますます、スランプが進んでいくorz

と言う訳で、スランプの為、グダグダ状態の25話です。
なんででしょう。

25話って最終回というイメージがあるんですよね^^;

魔女魔人編「思い出させられるトラウマ」

「どうして、あんたがここに居んのよ!？」

「それはこっちの台詞です!」

那由他と葉乃愛、2人は顔を合わせながら、階段を登っていた。

2人が目指している場所は屋上。大きな揺れを感じ、2人はとっさに屋上に向かったのだ。なぜ、屋上を目指すのかはわからないが、直感的に屋上に何かを感じたのだろう。

最近、2人はなぜか崩れた校舎を見た。そしてそこで起きた出来事。その記憶が軽くトラウマとなり、今回の揺れをほとんど嫌な方向へと考えて行く。

「あの崩れた校舎……そしてそこで見たナンバー1……今の揺れと何か関係するのかな……」

「知らないわよ!」

二人が勢い良く、屋上へ続く扉を開け放つ。

直感が的中したのか、屋上には今まで那由他が感じた事も無い、嫌な空気が渦巻いていた。しかし、葉乃愛だけはこの2度と感じたことも無い空気を良く知っている。

この圧迫するような緊張感は、葉乃愛が以前、非禁禁忌と対峙した時と良く似ている。そして葉乃愛は動揺する瞳で、この空気の発端元を見つけてしまう。その事実だけで葉乃愛は崩れ落ちそうになるが、そこは気合で何とか踏み止まる。

「あの人は誰?」

何も知らない那由他が、嫌な空気の発端元について、葉乃愛に問う。

そして葉乃愛の口から思いもしなかった返事が返ってくる。

「非禁禁忌……！」

魔女魔人編「思い出させられるトラウマ」(後書き)

あとがき

最近、寒くなりましたね。

はい、と言うわけで風邪気味の私です。

そんな状態で書かせていただいた作品なので、やはり読みにくい箇所がチラリと……

うん……そういや、葉乃愛ちゃんが非禁禁忌と戦った理由、まだ述べてませんでしたね……

ま、まあいつか語れると思います。

べ、別に考えてないとかそんなんじゃないんだからね！

はあ絶対、私、風引いてる……orz

気分転換にまた、違う作品でも書こうかな……

追記：次回からは違う作品です
続きを希望の方は飛ばしてください。

今までとは大きく内容が変わります。

具体的には、別の主人公による同じ世界で起きている別の事件。と言うことです。2期的な何かと、捕らえていただければ幸いです。詳しくは、あとがきで。

初めての方でも読める様にしたつもりです><

〔第2期〕機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ「プロローグ」

プロローグ

魔法……

それはあらゆる困難も瞬く間に解決させる力も持たない、小さな力。

科学……

それは失敗と成功の重なりによって築かれた、人類の礎。

この世界にはそれらが同時に存在し、今やこの世界の住民には欠かせない文明となった。

そしてその文明を子孫へ受け継がせる為、この世界には大きな学園が存在する。

この世界の住民は生まれると同時に一人前の魔法使いを目指し、その学園へと入学し、魔法の勉強に励む。

そして魔法使いとしての、その力が認められた時、初めて卒業が許され、のちに『卒業生』と呼ばれる存在となる。

そんな学園に1人の少女が幼き力を認めて貰おうと必死に通い続けている。

これはその少女が織りなす、恋愛魔法学園物語。

月や星の形をした金色の金属の装飾品で彩られた白いとんがり帽子を被った少女は

誰も居ない学園の屋上に設置されている落下防止用の手摺に乗りかかる状態のため息をつき、手に持っている物に目を通す。

その紙には大きな赤い字で『0点』と表記されており、誰が見ても良い結果には見えない。

少女はその字を虚ろな瞳で眺め、またもやため息をもらすと独り言を呟く。

「また0点……お父様になんて言い訳をしよう……」

少女は再度ため息をすると、隣に掛けてあった^{ほつき}箒を手に取り、またがる。

そのまま空を見ると、少数の人が普通の箒にまたがり、空を飛んでいた。

それに比べて少女の箒は、箒だと言うのに先にブラシは無く、4つのロケットエンジンの様な物に取り付けられている。

「普通の箒に乗る事の出来ない魔法使いなんて、僕しか居ないよね……」

少女はそう呟き、手元に4つあるブレーカの様なスイッチの1つを入れる。

すると、4つのエンジンの内、地面を向いていた1つのエンジンから強烈な音と共に火の粉が舞い上がり、猛烈な火が噴出され、

その勢いで少女を乗せた箒は少しずつ浮上し、突然吹っ切れたかの様に猛スピードで上空へ浮き上がる。

そしてある程度まで上がると、少女は2つ目のスイッチを入れ、身を屈めると、

少女とは真反対の方を向いたエンジンから、一気に炎が噴出され、その場に『キーン……』と言う擬音語を残し、猛スピードでこの場を移動する。

その様子を他の魔法使いは慣れた様子で眺めていた。

場所は変わり、ここはその少女の家ようだ。

少女はすでに家へ帰宅しており、そのとても大きい静かな豪邸の一角で威厳ある声が部屋に響き渡る。

「やれやれ、お前には……もう……言葉が出んよ……」

その声は壁を反射しエコーの様に何重にもなって少女の耳へで何度もしびる。

それに対して少女は赤い絨毯じゅうたんの上で跪く姿勢で体を震えさせ、必死に頭を下げる。

「申し訳ございません、お父様！」

「……わかった、もう良い……こんな話をしても辛かるう。
ヴィヴィアーシュ

だが、Vivianageの名に恥じぬように行動してくれ。わかったな、喜希きき」

少女は大きく頭を下げると、静かに部屋を出て行き、取り残された父は静かに独り言を呟く。

「あの子には絶大な魔力が流れておる……なぜ、扱えんだ……」

あとがき

はい、『機械天使と魔法と科学と学園と』の外伝ストーリーとなる

『機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ』です。

外伝と言ってもそれほど外伝ではなく、二つ目のメインストーリーと捕えてください。

まあ、例の如く、私の書く小説には二人以上の主人公が出てきます。

一人目はプロローグの最初に出てきた、きき・ヴィヴィアージュ喜希Vivia

二人目はいつの日が登場すると思います。

それにしても私の書く小説の主人公はキャラが濃いですね^^；
僕っ子ですよ……

そして二人目の主人公はすでに作られているんですが、もっと濃くなる予定……

それと「プロローグ」というタイトルですが、7話もあります……
そしてプロローグと言う事もあるのか、全然面白くないです……（
ここで言っても仕方が無いか……）

私の中のプロローグは『作品の説明』というイメージがあるんですよね^^；

だから、理解して貰えないかも……

ああもう良いや、寝ちゃおう。

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ「プロローグ2」

『はい、皆さん今日は魔法と魔力についての復習です。魔法とは私たちの日常生活に欠かせない物です。

ある時は箒で空を飛び、またある時は火を起こす、そんな魔法ですが動力源が私たち魔法使いの体に流れている

魔力だって事はもう知っていますよね。つまり魔力さえあればほとんどの魔法は使う事が出来ると言う事です。

それと豆知識ですが、魔力は体の身体能力と頑丈さと比例すると言う事も覚えてくださいね』

ホールの様などとも大きな円柱の形の空間がある。

そこには広い床を余裕で覆い尽くす大きな赤い絨毯の上に清潔感を表した白い椅子が螺旋状に並べられており、

映画館の席の様に中心から離れれば離れるほど椅子が高くなっている。

椅子の足が長いのでは無くどうやら地面が階段の様になっているのだ。

そしてその中心には先生と思われる人物が授業をしており、

その周りの椅子には当然だが生徒だと思われる人々がぎっしりと座っていた。

『しかし残念な事に魔法と言っても万能って訳ではありません。

魔法にはたくさんの種類があり、役割の応じて名称が与えられています。

例えば全ての魔法の基礎となる基本魔法、他にも何かを呼び出す際に扱われる召喚魔法に、

親から子へと引き継がれる遺伝魔法。そして科学と魔法の見事なコラボレーション、科学魔法とまだまだあります』

先生が予め（あらかじめ）録音したテープを流しているかの様に台詞を何一つ間違えずに話している中、喜希と言う名の少女がたくさんの人々、いや魔法使いの中に混じって退屈そうに授業を受けていた。

喜希はこの授業がよっぽど楽しくないのか、魔法の杖がモチーフの鉛筆を耳に挟み、別の鉛筆を鼻と唇の間に挟み遊んでいる。

『ここでピックアップですが、特に科学魔法は私たち魔法使いの日常生活に一番干渉されている魔法です。

具体的には筭などですね、あれは科学の力により魔力を流しやすくなっています。

他にもまだ実験段階で市販化はされていませんが、瞬間移動の出来る靴など。

これらの便利な所は何と言っても魔力を流すだけで発動されると、魔法名を唱えなくて良いと言う所ですね』

喜希は魔力を流し込むだけで空が飛べるようになる筭すら自由に扱えないのか、

『簡単』と言う言葉にピクツと反応し、鼻と口の間に挟んでいた鉛筆を足下に落としてしまう。

そして『簡単』と言う言葉にイラつきながらも喜希は鉛筆を取ろうと足下に手を伸ばすが、

あろう事か鉛筆は階段だと言う事利用してどんどん先生の方へと転がって行く。

『ここで余談ですが魔法の種類に精霊魔法と言う物があります。

この魔法はとても難易度が高いのですが、使いこなせると、とても役に立ちます。

と言うのもこの魔法、実は動力源は魔力では無く、全ての物に宿ると言う精霊の力を動力源としています。
つまり魔力を使う事無く、魔法を使えると言う事ですね』

先生が魔法と魔力について熱心に話してくれるが、生徒達のほとんどは理解していないようで、頭の上に大量の疑問符を浮かべている。

しかし先生が話している事は実は初歩的な事で魔法使いならば知っていて当然と言うレベルなのだ。

そんな中、鉛筆だけは空気を読まず、加速しながらも椅子の足を華麗にかわしながら先生の方へと近づいて行く。

「後はオリジナル魔法の説明ですが……ん？」

足元へと転がってきた鉛筆が先生の視界に入る。

先生がそれを手に取り、生徒にこの鉛筆の持ち主を聞こうとした瞬間、喜希が立ち上がる。

「あの、それ！ 僕のです……」

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ「プロローグ2」 (後書き)

ああ。すごくつまらない内容になってしまった様な気がする……
ちよつと詰め込みすぎました。

今回、小説内で何が起きたかと言うと、
先生が授業をしている中、鉛筆が転がっただけ、です。

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ「プロローグ3」

「あの、それ！ 僕のです……」

先生はそれを聞き、鉛筆を喜希の方を向けるが何もしない。

それに対して喜希は何もできず、硬直してしまい、この空間に沈黙が生まれる。

しばらく静寂なる空間で見つめ合っていたが先生もとうとう頭の上に疑問符を浮かべ、困り果てた顔で問いかける

「あの……取らないのですか？」

「え」と……どうやってですか？ 椅子を越えてそちらに向かえばいいのですか？」

椅子を越えてと言うのは単純に螺旋状に移動しながら中心部を指すと、とても時間がかかるからだ。

「椅子を……越えて……？ 魔法で引き寄せるとか……」

「あ！ ああ魔法ですか！ ええ」と……引き寄せる魔法名なんでしたっけ……」

「たくさんあるけど簡単なのは、吸引魔法『アトラクション・ドロ』とかかな？」

「あ、はい！ 吸引魔法『アトラクション・ドロ』」

喜希の手が光る、それと同時に先生の持っている鉛筆が宙に浮き、

なんと鉛筆が光り輝き、さらには大きな音をたて爆発する。その衝撃で先生は後ろに吹き飛び、気を失ってしまう。

いくら先生と言えど不意打ちの攻撃は防げなかったようだ。

と言うより、この学園では先生だからと言って強いとは限らない。なぜなら喜希と同じ、生徒が先生を務めているからだ。

一から説明すると学園から卒業生へ授業教育の任務を依頼し、卒業生がそれを受理して初めて授業が行われる。

しかし卒業生の量が生徒と比べ圧倒的に少ない為、別の方法の授業も行われる。

その別の方法と言うのが今回の授業でもそうなのだが比較的成績の良い生徒が学園へ授業教育の要請をし、許可が下りると生徒による授業が行われる。

ちなみに先生が数人のグループでの授業も認められている。

逆にかなり良い成績を残す生徒には学園から要請される事もある。

このような制度の為、時間割やスケジュールと言った物が存在しない、

それ故、生徒は好きな時に好きな授業に参加すると言った自由な生活ができるのだ。

それと授業は予約制だが、飛び入り参加は認められており、（先生側は認められていない）

むしろ飛び入り参加の方が普通であったりする。

しかし卒業生の授業だと、1回で数十万の生徒が予約する為、数千に絞られる。

その故、かなり早めに予約しないと絶対に受ける事が出来ない。

話がそれだが簡潔にまとめると先生は弱かったの一言に尽きる。

「あわわわわわ、し、失礼します！」

逃げ出すように出口に向かう喜希、もちろん椅子を越えてだ。
そしてホールを出て外に出るなり、
傘立て……いや、簾立てに掛けてあった火を吹く簾に跨り、いつも
の屋上に駆けつける。

「ま……またお父様に怒られる……」

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ「プロローグ3」 （後書き）

今回は前回から引き続き、喜希ちゃんの落ちこぼれっぷりを書きたかったので、

魔法の失敗つというよくあるネタを書かせて頂きました。

それにしても鉛筆もつたいない……

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ「プロローグ4」

「またか……ヴィヴィアージュ Viviaの名に恥じぬように行動してくれ、
と言った途端同志である同級生を爆発で攻撃するとは……」

「いいいいや、あの、これは、不可抗力で、決して悪気があった訳では無く、
と、とにかくごめんなさい！」

とても大きい静かな豪邸に威厳ある洪い声と少女らしき若い声が響き渡る。
どうやら、貴族である上級参隊として有名なVivian家の子が親に説教されているらしい。

「致し方ない。お前をあの学院へ入れるか……」

「ッ！？ そんな！ あの学院は……」

「これは人様を傷つけたお前への罰でもある。そこで召喚魔法の一つや二つ出来るようになりなさい。
そうすればすぐにでも自主退学させてやろう。わかったな？ 喜希よ」

少女はしばらく硬直していたが、やがて大きく頭を下げ部屋を後にする。

そして豪華な扉の前で再び硬直すると、突然吹っ切れた様にそれもただ、がむしゃらに走り出す。当然だがその時の少女の顔に笑みは無かった。

それもそのはず、喜希の父が言う学院とは誰もが行きたくない

考える所。

そして何よりも学園と同じような所とは考えてはいけない。

なぜなら学院とは時間をかけ、体をいじり、無理矢理魔法を扱えるようにする所なのだから。

もちろん時間をかければ、かけるほど強力な力が手に入る。

しかし誰だって体を改造されるのはあまり良い気分ではないだろう。例えばそれにより強大な力を手に入れるとしてもだ。

「お父様……なぜ……」

そして何よりも学院を信用してはいけない、

学院は体の改造の仕組み、原理を一切公開していない。

もちろんそんな不信な動きをする学院が世間的に許されるはずが無い、

もしそんな事を一般の方々にしていたら即廃止になるだろう。

しかし学院は確かに存在し、今も力無き体を強力な物へと変化させている。

ではなぜ即廃止されないか、これにもちゃんと理由がある、

そしてそれは簡単な話、一般の方々など相手に改造してないからだ。上級参隊の一部に限って行われている事でその秘密を守っているのだ。

何よりも後遺症や傷跡、そんな物は一切残らない為、公になる事も
おおやけ
まず無い。

それにより学院は密かに信頼を集めているのだ。

「お父様……僕は……」

そしてそんな学院を信頼している上級参隊の一部、Viviage
e 家。

元々貴族には遺伝魔法と言う強力な力が宿る為、学院などのお世話になる事などほとんど無い。

が、喜希のように落ちこぼれの子が生まれて来る事が稀にある。学院はそう言う貴族をターゲットにし巨額の金を手に入れているのだ。

「僕はいらない子なのかな……」

急に立ち止まる喜希。そしてその喜希が実際に立たされている状況。

簡潔に言うと喜希の父は、喜希より世間からの見た目を優先させたいと言う事になる。

あの父親からすれば娘より貴族としての誇りの方が大事なのだ。

「召喚魔法か……一か八か僕の全魔力をかけ、全力で唱えて見ようかな」

少女は拳に力を込めると父親の部屋へダッシュで引き返す。

そして部屋の扉を荒々しく殴り飛ばし開け、

その衝撃で木で出来た扉は外れ、割れ、辺りに散乱する。

この世界では力と魔力が比例している、つまり力が強ければ強いほど魔力が強大と言う事だ。

そして喜希の目に父親が怒りを通り過ぎて、驚いているのが見える。

「お父様！　僕の体は僕の物です！　お父様の命令でも嫌です！」

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ「プロローグ4」 (後書き)

あとがき

ああ、世界の表を書くとか言いながら

いきなり裏の話が……

と言う訳で、今回は学院と言うものを書かせて貰いました。

まあ、この物語では深く語られないんですが……

うう、お腹痛い……

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ「プロローグ5」

「お父様！ 僕の体は僕の物です！ お父様の命令でも嫌です！」

しかし父親は以外にも冷静で、ゆつくりとした動作で近くにあった本物の小さな杖を取り出すと喜希へ向ける。

「ほう……それどうしようと言うのだ？ 喜希よ」

「お父様は僕に召喚魔法を覚えて来いと言いました。だから、今それをしてみせます」

「馬鹿な……お前は魔法使いが最初に教わる火魔法『ファイア』しかできぬのだぞ？

算数で言えば『1+1』、国語で言えば『あいうえお』。そんなレベルのお前に出来るはずが無い」

喜希は冷や汗を流しながらもニコツと笑ってみせると目を瞑り、魔法名を唱える準備を始める。

父親がそれを必死に止めようとするが、もう間に合わない。

喜希の両手に光が溢れ、徐々に蜘蛛の巣の様に広がって行き、父親がそれに邪魔され、喜希に近づく事すら出来なくなる。

そして喜希が両手を天に掲げると光が真上に伸び、豪華な装飾品で彩られた豪邸の天井を突き破り空高く舞い上がって行く。

そんな中、喜希が静かに魔法名を詠唱する。

「召喚魔法『サモン・ファミリアスピリッツ』」

喜希が光と同様、空中へ高速で舞い上がる。

父親がぽつかりと空いた天井からその様子を眺めると、
ここへ何か光り輝く隕石みたいなものが落ちて来ている事が目に取り
れる。

「くそっ！ あの馬鹿娘が！ まさか娘の放った魔法に向けて、遺
伝魔法を使うとはな。

World Heritage『エンジェルフォール』」

父親の手に持っていた小さな杖から隕石目掛けて滝の様な大量の
水が空高く、噴出される。

そしてその水が隕石に触れる瞬間、霧となり隕石の周りに漂う。
そして次々に霧は量を増やし、隕石を優しく覆う大きな水玉になる。
しかし隕石が突然、急降下し水玉を突き破り、庭の方へ落ちて来る。

「くそっ！ 致し方無い！」

父親は庭へと走りだし、隕石の落下場所を予想し、待ち構える。

「来い！ 私が受け止めてやろう！」

こう見えても卒業生、魔力には自信がある。落ちこぼれの娘1人く
らい、たわいもいらん！」

魔力とは力だけならず体の丈夫さ、などにも影響する。

父親はよほど自分の魔力に自信があるのだろう、

大の字になり、娘の帰りを大きな体で受け止めようと逃げも隠れも
しないで、

娘の居るべき場所を教える為、ただひたすらそこで立つ。

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ「プロローグ5」（後書き）

あとがき

ああ。何か今回はグダグダ小説になってしまいました。
ちゃんと伝わったかな……

そして父親をかつこよく描きたかったのだけど、
急に過ぎて違和感が……

機械天使、科学と魔法学園の落ちこぼれ、「プロローグ6」

Vivage家にききが訪れる。

それは危機か、はたまた喜希か、最後は喜々となるのか。親子の想いが交差する。

「来い！ 私が受け止めてやろう！」

こう見えても卒業者、魔力には自信がある。落ちこぼれの娘1人くらい、たわいもいらん！」

光り輝く隕石がゴオオオと重く深い音を鳴らし、父親の元へと瞬
 く間に近づき、堕ちて行く。

そして、衝突……しなかった。隕石は父親と当たる瞬間に静止したのだ。

しかし次の瞬間、父親と隕石の間に更なる光が生まれ

周囲を異常に明るく照らし、ジリジリと父親と距離を縮めて行く。

そしてついには隕石が父親に触れてしまい、父親は隕石を抱えるように踏み止まる。

「おおおおおおお！……！！！」

砂埃が舞い、周りの木々を激しく揺れている中、

父親は声を上げ必死に隕石を止めようと踏ん張っていた。

しかし状況は悪いのか、大量の汗を流し体のあちこちから嫌な音を立て始める。

そして足が地面に埋まり、少しずつ後ろへ押されていく。

「く、万事休すか!？」

その時、何気なしに隕石を睨む。

すると隕石の光は軽く薄れ、中の様子が透けて見えた。

父親は中の様子を驚愕した。なんと中には喜希が気を失い、倒れていたのだ。

「この……馬鹿娘がああああ……!!」

隕石を両手でプレスするように強く圧迫する。

すると怒りと想いの力がきいたのか光の隕石に、ひびがはいる。

そしてひびは徐々に拡大して行き、隕石がメロンの様になる。

その時、隕石は何事も無かったかのように、ただ、割れ、

父親は隕石が急に割れた事により前へ崩れかけると、倒れる直前に踏み止まり、

「妻よ……お前の言っていた事……やり遂げたぞ……」

そう言って隕石の破片がガラスの様に砕け散り散乱している中、
気を失い倒れこむ。

「うゝん……食べきれないよ」

父親が体張って娘を衝突から守った中、その肝心の娘は能天気な夢を見ていた。

しかしその娘の手に謎の紋章が刻まれる。そしてその娘のすぐ横で眠る謎の少年。

次に喜希が目を覚めたのは絶望の中だった。

機械天使、科学と魔法学園の落ちこぼれ、「プロローグ6」（後書き）

あとがき

「うーん……食べきれないよ」

ベッタベッタですね^^;

まあ、学園、魔法、最強のセットですからありでしょう。うん…

…

はい、と言う訳で6話目です。

早いですね。

そして父親カッケエエエ見たいなものを書きたかったんですが、父親カッケエエエ、ってなりましか？

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ「プロローグ7」

「貴族、Viviane家当主、入院。原因は娘とのケンカ!？」

そんな噂があつと言う間に世間へ広がった。

ただでさえ、貴族と言う事もあり目立つ喜希がさらに視線を集め、困り果てている。

今も気を失っている父親の代わりに話を聞こうと、マスコミやパパラッチが

病院の前で待ち伏せしているのが、喜希の病室から見える。

「あの人達は誰？　そしてここはどこ？」

喜希は病室に入ってきた医者に外で待ち伏せしている人の事を聞く。

医者は喜希に刺さってる注射針を抜き、

吊らされている空になった点滴を外しながら、その問いに答える。

「あの人達はね、このようなスキャンダルに興味や興味本体で群がる、君と同じ学園の生徒。

君も薄々気付いていると思うが奴らの目的は君たち、Viviane家だ。

そしてここは貴族専属の病院。

ここの世話になった事の無い君には病院と言う単語は珍しいかも知れないが、

平たく言つと貴族だけを癒す為に作られた、最新医学が置いてある所だよ。

だからここには貴族しか居ない。」

「普通の人たちは怪我をしたらどこに行くの？」

「彼らは学園の保健室にでもお世話になるじゃないかね。

学園の保健室と言えど、ここの医療装置とほとんど変わらないよ。病院の方が丁寧に介護してくれると言っただけの話さ。

そして君がこの病院に居る限り、外に居るハ工達を君に近づけたりはしないよ。

それだけは約束しよう。」

「うん……それと、お父様は……」

「隣の病室で重体で眠りこんでいるよ。彼は君を守る為に使っ
て行けない量の魔力を消費したんだ。

その結果、彼は急激な魔力不足に陥っている。

まあ君も同じような状態で運ばれたのだが、どう言う訳があつさり回復してしまっ
てね……」

「運ばれてきた？」

「ああ……君のお父さんの体には、命の危険を伴う重体になると、こちらに信号が送られてくる装置が埋め込まれているからね。

それと一つ気になる事があるのだが、この病院に運ばれてきたのは、君たち2人だけでは無いんだ。

男の子が君と一緒に運ばれてきたのだが、この子の正体が分からなくてね……」

「え？ 身分証明の紋章は？」

身分証明の紋章とは、この世界の住民が生まれて来ると同時に体に刻まれている紋章の事だ。

その紋章には、刻まれている人の身分証明となる事が表記されている。

つまりそれを見ればどの誰かが分かってしまうと言う事だ。

医者は新しい点滴を吊らすと、困り果てたように言う。

「それがその子には、その紋章が無くてね……さらには魔力も流れていない。」

私たちの先祖は元々、魔力を持たない生き物だったんだが、なんか原始人が蘇った様な気分なんだよ。

そしてその子は無傷でね……今ここに呼んでみるから心当たりないか判断してくれ。」

そう言っ て医者は病室の扉を開ける、そこに居たのは……

機械天使、科学と魔法学園の落ちこぼれ「プロローグ7」（後書き）

あとがき

ラストプロローグの一つ前です。

長いプロローグも幕を閉じようとしています。

ここから物語の本筋が見えてきますね。

しかしこの頃、断末魔様が恋しくなってきた……

と言う訳で今回は謎の少年が少し姿を現しました。

それにしても『謎』が好きですね私は^^;ま、いつか。

断末魔様あああああああああ！（中。）。（中

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ「ラストプロローグ」

「彼だ……」

医者は喜希に少年の正体に心当たりが無いかと思い、その少年を病室へ招き入れる。

そうして、のそのそと部屋に入ってきたのは、どこにでも居そうな少し顔の良い少年。

当然だが、喜希に心当たりは無かった。

「誰……ですか？」

「やはり君でもわからないか……彼は記憶を失っていて……!?」

医者は突然、会話を中断すると少年へ近づき、

少年のさっきまでは無かった右手首に刻まれている紋章を凝視する。

「こ、これは……使い魔の紋章じゃないか……、なぜ……使い魔はもう無き文明……」

魔女、魔人の全滅と共に失われたはず……」

「あの……。すごいんですか、それって？　少なくとも召喚魔法よりすごいんですか？」

「すごいも何も……使い魔を使わす人間など恐らく君が初めてだ」

その時、部屋の扉が勝手に開かれる。

医者と喜希が首を傾げていると、ホストの様な青年が堂々と部屋に入ってくる。

「話は聞かせて貰いました。喜希さん、私達の私立学園へ入園しませんか？」

私立学園とは貴族が勝手に設立した教育機関の事だ。

普通の学園と違う所は、まず貴族しか入園が認められない事、そして、通う学園が変わる事が無いと言う事。

学園側も私立学園の設立を許可しており、少数だがいくつかの私立学園が存在する。

時には、その私立学園同士で共同体育祭や文化祭が開かれる事がある。

平たく言うと私立学園とは、お嬢様学校みたいなものだ。

そして喜希はそれに勧誘されたと言う事だ。

「ぼ、僕がですか!？」

「ええ、喜希さん、あなたです」

私立学園での勧誘はほとんど無い。

その為、勧誘で入園した生徒は他の生徒に比べ優遇される。

「で、でもお父様の許可を頂かないと……」

「では、オープンキャンパスと言う形で体験入学と言うのはいかがですか？」

「オープンキャンパス？」

「はい、私立学園が施設を公開し入学希望者に対して行う説明会、

と言っ意味です。

一応、説明会と言っ形ですので、入学扱いでは無く、ゲストとして迎えられます。」

「うーん……お父様に怒られないなら……」

「わかりました。その使い魔、私達と共に来たまえ」

青年はそう言っと喜希をお姫様抱っこし、病室を後にする。
残された医者は呆然としながらそれを見送った。

機械天使／科学と魔法学園の落ちこぼれ／「ラストプロローグ」 （後書き）

あとがき

今回の内容は割とアニメの世界とかなら、よく見るような光景ではないでしょうか。

そして、学院が空気に……

ま、まあ学院は今回の物語でかなり大きな役割を持っていますので、

空気ではないのですが……（あれ？ 前に言ったことと、矛盾してる……？）

悲しいかな、あまり語られる事が無いと言つか……

そして使い魔が一番、空気。

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ」「私立学園入園!？」

喜希 Vivian (きき・ヴィヴィアージュ) と言う名の少女は、

学園での成績の悪さのあまり、父親と喧嘩をしてしまい、出来もしない召喚魔法を無理矢理に使うとする。

その結果、魔力は暴走してしまい喜希の命に危険が迫る。

父親はそれを必死に阻止しようと奮闘するが、

暴走した喜希の魔力を抑えきれず親子共々、気を失い貴族専属の病院へ入院してしまう。

しかし父親の奮闘だけはあったのか2人とも命だけは助かり、娘の喜希だけが目を覚ます。

そしてそこで開かされる喜希の魔力の暴走の謎。

それは失われたはずの魔法、使い魔召喚魔法だった。

使い魔召喚魔法は以前、大きな力を誇っていた魔女、魔人と呼ばれる種族が使用していた魔法の事だ。

しかし魔女、魔人の消滅と共に使い魔召喚魔法も失われてしまう。

だが喜希のでたらめな魔法が使い魔召喚魔法と同じ効力を持つてしまい、

記憶を持たないどこにでも居そうな少し顔の良い少年が使い魔として召喚されてしまう。

その話を盗み聞きしたホストの様な青年が喜希を私立学園と呼ばれる、

世間に広く知れ渡っている学園とはまた別の学園へ勧誘する。

喜希は最初こそ戸惑っていたが、青年の巧みな話術でやがて勧誘を受け入れる。

そして、そこから喜希と使い魔と学園の仲間達との学園生活が始ま

るのだった。

「ちょっと待って！ 僕はお父様に怒られないなら入園しても良いかな、って思っただけで……」

喜希はお姫様抱っこをされた姿勢で、ホストの様な青年の行動に對して必死に抵抗していた。

しかし何かがおかしい。喜希は異常な魔力のせいで女子の中でも特に怪力のはずだ。

その異常な怪力と言ったら、そこら辺の男子なら太刀打ちも出来ない位だったりする。

そしていつもの喜希なら、こんな細身の男のお姫様抱っこなど一瞬で抜けるはずだ。

しかし逃げる事が出来ない。それはこの男も異常な魔力の持ち主だと言う事を表していた。

今も男は逃げようと必死の喜希に對して余裕の表情で、対処する。

「その事なら心配は要りませんよ。私の名に掛けて約束します。あなたの父親は絶対にあなたを叱る事は無いでしょう」

そこまで自信満々に宣言されると返す言葉が出て来なくなる。

その結果、喜希はただ黙ってお姫様抱っこで、どこかへ連れて行かれる。

「なんで……僕なんかを勧誘するの？」

使える事の出来る魔法だって、火魔法『ファイアー』だけで落ちこぼれだし……」

「落ちこぼれ？ そんな事ありませんよ。現にあなたは使い魔を召

喚して見せたじゃありませんか。

あなたの父親に言われたのでしょうか？ 召喚魔法の一つや二つ出来るようになれ、と。

それを成し遂げたあなたは落ちこぼれなんかじゃありませんよ」

「なんで……その事を……」

「今の時代、情報が全てですよ」

病院の清潔感を表した白い廊下をしばらく歩いていた喜希、青年、使い魔はやがて

趣味や興味本体で喜希に近寄ろうとするマスコミで溢れた病院の入り口へと到達する。

青年は喜希を片手で抱きかかえる様な姿勢に変更すると、

空いたもう片方の手の平を入り口のガラスに纏わりつく人々に向ける。

「邪魔な方々だ。どうかお帰り願おうか。」

そして魔法名を唱える。

機械天使、科学と魔法学園の落ちこぼれ、「私立学園入園!？」
(後書き)

あとがき

やっと、学園が登場しました。

そして父親が入院して眠っていると言っているのに、
なんてのんきな子だ……

そして使える魔法がファイアーだけと言う、よくある設定。
まあ、気にしちや負けですよね。

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ」「私立学園入園！？2」

「暴力主義者」「テロリスト」「そして誰もいなくなった」

しかし何の変化も訪れない。

だが、さっきまでガラスの向こうで騒いでいた人々が急に静かになり、次々にこの場を去って行く。

そして青年はそれを満足げに眺めると、喜希に言う。

「私は人の精神を操る魔法を得意としているので。では参りましょうか、『スピードの12、パラス』」

「スピードの12、パラス……？」

「我が私立学園ではそう名乗ると良いでしょう。それがあなたの力と権利を表すので。」

青年はそう言うつと再び喜希を両手で抱え、病院を出る。

決してポカポカと言えない、そこそこ強い日光が喜希達を照らし、目を眩ませる。

「喜希さん、箒はどちらに？」

「多分、家にあると思うけど……」

青年は優しく微笑むと、近くにあった車と呼ばれる乗り物に向かう。

その車は科学の力で宙に浮いており、摩擦を無くしたおかげで時速400？と言う凄まじい速度で移動する事が出来る。

しかし普通の人間がそんな速度で移動する車をまともに扱う事が出来るはずも無いので、

普段は時速40kmくらいで運転するしかない。

そしてこの世界では免許と言う物が無い。

つまり車を手に入れた瞬間、その車を運転する権利があると言う事だ。

そしてなぜ、この世界には免許が無いか。

それはこの世界には車を利用する者がほとんど居ないからだ。

と言うのも、ほとんどの者は車より、空を移動する為もつと高速で移動できる筈を利用する。

そして何よりも車は値段的な意味で、ものすごく高いのだ。

その証拠に車を利用するのは一部の貴族くらいだったりする。

機械天使、科学と魔法学園の落ちこぼれ、「私立学園入園! ? 2」(後書き)

あとがき

喜希ちゃんの出番はひとまずこれでお終いです。

次回は別の主人公たちの活躍を描きたいと思います。

ちなみに主人公は二人です^^

特に片方は個人的にすごく気に入っているので、

小説内では優遇されていると思います。

その為、しばらく読んでいると、どのキャラか断定できると思います。

(次回はおもに一人しか活躍しない為、判断できないと思います)

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ 「一組の主人公」

世界の中心に設立している大きな学園、

そこから遠く離れた所に小さな神社がポツンと建っている。

その神社は作られてから随分と月日が経過しているらしく、

木造の神社や鳥居はかなり古ぼけている。

しかしだからと言って、汚いと言う訳ではない。ただ、古いだけなのだ。

その証拠に誇りやゴミなどは、ほとんど落ちてなく、今もその神社に1人で住む少女が

暑い暑いと文句を言いながらも、せっせと庭の掃き掃除をしていた。

「あつついわねー、何で太陽は熱いのかしらー」

そしてその少女は神社に住んでいるからか、

自らを巫女と認識しているらしく赤と白だけで彩られた綺麗な巫女服を着ている。

しかし少女は巫女服と言う物を良く知らないのか、

少女の着ている巫女服は普通の巫女服とは少し違う。

と言うのも、白衣と言う名の上半身を保護する為にある着物が赤く、緋袴と言う名の下半身に着用する緋色の袴が白いのだ。

簡潔に言うと、広く一般的に知られている巫女服の赤白が入れ替わっていると言う事だ。

「掃き掃除終わったし、さて次は身だしなみを整えよう」と

しかし少女はその事に微塵も気付いていないらしく、今も神社の中にある鏡の前で

その巫女服を堂々と着ながら、鼻歌混じりで髪を一つに束ねていた。

と、その時、神社の外から少女を呼ぶ声が聞こえる。

「おおゝい、巫女おゝ。いるかあゝ？」

少女は素早く髪を整え、神社の外へ向かう。

するとそこには目が赤い金髪の小柄な少女が制服の原形を留めていない

スカートのポケットに手を入れながら、腰を曲げて立っていた。

機械天使、科学と魔法学園の落ちこぼれ 「一組の主人公」(後書き)

新たな、キャラが登場。

小説と言つこともあり、あまりキャラは増やしたくないんですけど
ね^^;;

今回はももろキャラも多いですし……

機械天使く科学と魔法学園の落ちこぼれく 「一組の主人公2」

「あんだ……その制服……ちゃんと学園行ってるの？」

「当然だぜ。炉心溶融^{ろしんようゆうつ}Melt down^{メルトダウン}って通り名もあるし、学園のナンバー3なんだぜ！」

「そんな事、知ってるってば。ただ、自分の力に溺れて学園サボって無いかなくって思ったのよ。」

けど、まあ、その様子じゃ一応、通ってはいるみたいね」

しかし巫女少女がこの小さなナンバー3を疑うのも仕方が無い。と言つのも、この少女の服装があまりにも酷いのだ。

学園内には無数の学び舎が存在する。

その無数の学び舎の中で自分の気に入った授業を開催する学び舎を見つけると、

そこへ授業を受けに行くのだが、そうすると毎回、授業を受ける校舎が変わってくる。

そしてその学び舎も、教える側として授業を受けにくる生徒に授業を受ける為の必要最低限の条件を与える。

それが一定の魔法を覚えている事、だとか指示する物を準備しておく事とか、

たくさんあるのだが、中には服装に条件を付ける学び舎も存在する。当然だが、炉心溶融の様な服装をしている生徒など断る学び舎も多い。

だから巫女少女は炉心溶融にそのような質問をしたのだろう。

「なんだよお！ お前だって、巫女服じゃないかあ！」

「私はいいの、『卒業生』だから。それに私だって学園に通っていた頃は地味な制服着ていたのよ。」

「これだって、制服だぁ！」

巫女少女はそう言われ、小柄な炉心溶融を凝視する。

炉心溶融は目に見えて身長が低く、着ている服や、

ネックレスと言ったアクセサリーのサイズが一回り小さい。

そして、正常な制服だと主張する炉心溶融の肝心の服装は、

長袖のカッターシャツの上に、赤いネクタイと意図的に小さく作られた黒いベストを着ている。

そして下半身は黒いスカートだ。しかしそれならまだ良い。

と言うのもカッターシャツの襟や手首にはフリルが付いていて、前を止める為のボタンの代わりにチャックが付いている。

しかもチャックが中途半端な個所までしか止められて居なく、へそが丸見えである。

さらに赤いネクタイにはピンクのリボンと、ネックレスの様なアクセサリーが付けられていて、

黒いベストには、鎖がジャラジャラと付いており、絶対に無意味な星やハートといった様々な形をしたボタ

ンが数個、留められていた。

そして黒いスカートだが、大きなベルトに、またもやフリルが満載。さらには様々な装飾品がその黒いスカートを彩っていた。

「可愛いーだろー！」

「はいはい、そうですね。ところで、わざわざこんな所に何の用？」

学園からかなり遠いわよね、ここって。なのに訪れるって事はかな

りの事よね」

「さすがに察しが良いな。やっぱり幼馴染は違うぜ。そんじゃ、単刀直入に言う。

使い魔を召喚させた魔法使いが現れた。情報によると偶然の成功らしいが、まだ詳しい事は分かってない。

だからこれからの方針も未定だ。ひとまず、そいつはバカらしいから、とある私立学園で保護させた。

って所。そんで、お前はおれと一緒に学園へ着て貰う。OK?」

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ 「一組の主人公2」 (後書き)

少し服装を詳しく書きすぎたかも知れませんが、
ちよつとわかりにくいかも……

炉心溶融 M e l t d o w n は (ろしんようゆう・メルトダウン)
こう読めます。

本編にも書いてありますね^^;
あまり良い言葉じゃないのですが、まあ断末魔様も余り良い言葉じゃないし、良いですよね……

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ 「列車内での出来事」

「私が学園にねえ。何しに？」

「うーん……たぶん、そのバカ魔法使いを監視している私立学園に偽名で入園する事になると思うぞ。」

まったく、今は魔女、魔人の話で忙しいってのに……ほんと迷惑な魔法使いだぜ」

2人はリニアモータートレインと呼ばれる科学だけで出来上がった列車に乗っていた。

このリニアモータートレインは磁力により車体が浮いており摩擦が無い、

その上、決まった路線を走る為、かなりの速度で走れるのだ。

しかし大体の魔法使いは筈に乗れる為、ほとんどの者はこの列車を利用しない。

だが一部のマニアや、事情により筈に乗れない者が利用していた。特にこの列車はマニアに人気があり、その証拠にこの列車を利用する乗客のほとんどはマニアである。

その為、事情で筈に乗れない者など、ほとんど居ない。

「おい、見ろよ。魔力を注ぎ込んでいないのに動いてるぞ！

やっぱ、リニアモータートレインは神秘的で何回乗っても飽きないぜ！」

「相変わらず列車マニアなのね……炉心溶融……」

「あつたり前じゃねえか！　なんか、こう、列車って言葉にロマンを感じるんだよな。」

はあ、お前を迎えに行つた、かいがあつたぜ！」

「あんだ……もしかしてこの列車に乗る為に私を迎えに来たの？」

「な！？ そんなはず無いぜ！」

決して学園はお前を迎えに行つたら往復列車に乗せてやるとか言つて無いぜ！？」

「相変わらず、嘘がつけないのね。炉心溶融」

炉心溶融が手足をバタつかせ、必死に弁解するが、その無念の声はすでに逆巫女服少女には届いていない。そもそも逆巫女服少女はそんな事に興味は無かつたし、そんな事にいちいち構っている暇など無かつた。

その証拠に逆巫女服少女が今、必死に睨んでいるものは炉心溶融なんかでは無く、何の変哲もない扉……接合された車両を行き来する為の扉だつた。

その扉の先の車両は人が乗る為にあるのではなく、筈では、運ぶ事が出来ない客の荷物や、運搬貨物が置かれていた。

つまり、この列車の真の目的は人の運搬などでは無く、筈などでは到底、持ち運びの出来ない品々の運送だつた。人の運搬なんておまけに過ぎないのだ。その証拠に列車の車両のほとんどは貨物車両である。

その1つの車両に繋がる唯一の扉を必死に睨んでいると、カタツカタ、と不規則に揺れ始めた。

気にしなければ気付く事も無い程度の揺れ。しかし逆巫女服少女はその小さな揺れを見逃しはしなかつた。

手足をバタつかせて居た炉心溶融も逆巫女服少女の視線を追い、扉の揺れに気付き、2人揃つて扉を凝視する。

周囲の人はさっきまでの炉心溶融と同じく、リニアモーターレ

ーンに興奮気味で扉の揺れは愚か、扉を凝視している2人にも気付かない。

しかし今の2人の様子は、他人から見ると異様な光景に見えるであらう。

少女2人が扉を一生懸命に見つめているのだから。

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ」 「列車内での出来事」 （後書き）

あとがき

久しぶりの『機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ』です。

車両の説明が、ちゃんと伝わったかが心配です……

もうすぐ私立学園の登場 だと良いですね……

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ 「列車内での出来事2」

2人揃って、必死に見つめてる扉の揺れが少しずつ大きくなる。
そこそこの強さで揺れている為、扉の周囲の人もその異変に気付
き始める。

「お、おい、あれ、何で揺れてるんだ？」

「向こうに人が居るわね……」

「何で分かるんだ？ 第一、向こうは貨物車両だろ？」

「何で分かるんだ……って、だってそりゃ、私だもの。分からない
はずが無いわ。それに貨物車両だったら人が乗って無いって言うの
は、偏見よ？ さ、来るわよ」

「何がだよ？」

「リニアモータートレインジャックかしらね」

逆巫女服少女がそう言うと、扉がこれまでに無く大きく揺れる。
まるで扉の向こうから、誰かが扉を蹴っている様な一定の音にほと
んどの人が気付き始める。

やがて乗客同士でざわ……ざわ……と噂をする様にざわめき始め
る。

その瞬間、扉が破られ、何者かが出てくる。
さっきまであんなに騒がしかった乗客がぴたりと静まり返り、静
寂の空間が生まれる。

そんな空間に自分が空間の主だと主張するかのように1人の男が

現れ、

「この列車は俺が乗っ取った！ 死にたくなければ俺に従え！」

高らかに宣告する。

その近くで炉心溶融と逆巫女服少女がこそこそ話をしていた。

「おい、どうするよ？」

「なんだか楽しそうね、炉心溶融。さっきまでは怖がってたじゃない？」

男が懐から武器の様な物を出す。それに乗客たちは怯え、再びざわめき始める。男はそれを黙らす為に武器を構え、乗客を脅迫する。

「幽霊じゃ無いんだったら怖がる事、無いぜ！ 炉心余裕、なんちやって、てへっ」

「……2回死んで2度、生まれ変わりなさい」

「ひどっ！ 人が精一杯、考えたんだぞ！」

「うるさいわね。良い？ 良く聞きなさい。私の予想ではあいつは墮落者だと思うの。理由は扉を蹴って出てきたから、それだけ。だから力押しで良いと思うの」

「扉を蹴って出てきたから墮落者って……それこそ偏見じゃねえか」

まあね……、と小さく呟いて男の前に出る逆巫女服少女。あまりの堂々としているその態度に逆に男がビビっている。

「なんだ女？ 殺されたいのか？」

「なんだ男？ 死にたいの？ まったく……あなたも不運よね、よりによって私の乗っている列車をハイジャックするとは」

男は眉間にしわを寄せる。逆巫女服少女はそのまま会話を続ける。

「乱数調整 Tool - Assisted Speedrun（らんすうちょうせい・ツールアシステッドスピードラン）って聞いたこと無いかしら？ それ私なのよね」

車両の中が今まで以上にざわめき始める。

機械天使く科学と魔法学園の落ちこぼれく 「列車内での出来事2」

（後書き

あとがき

乱数調整 Tool-Assisted Speedrun

彼女の呼び名はこんな感じです。相変わらず独特なネーミングセンスですね^^;

そして、プログラミング？ などに詳しい方は何の事かわかって貰えたでしょうか？

そう、TASさんです。チートによく似た力ですが、チートでは無い力です。はい、意味わかりませんね^^;

そして、炉心余裕……

うん、まあ、可愛いものです。

機械天使く科学と魔法学園の落ちこぼれく 「列車内での出来事3」

「乱数調整Tool-Assisted Speedrunって聞いたこと無いかしら？ それ私なのよね」

車両の中が今まで以上にざわめき始める。

その中で一際、騒がしい少女が居た。

「うおおおおい！！！！ これから、おれらがする仕事さつき、説明しただろお！！！！ 何でいきなり通り名となる称号、暴露してんだよお！！！！」

「うるさいわね。あんたこそ、そんな事、大きな声で言わないの。それにたかが通り名、名乗っただけで怒りすぎよ。通り名は名乗る為にあるんだから名乗らないと損よ。それともなに？ 私のする事に文句つけようっての？」

乱数調整は脅迫とも言える笑顔で、炉心溶解を黙らせると改めて男を凝視する。

見るからに安っぽいボロボロの服、そこから考えて貴族と言う線はなさそうだ。その結果、厄介な遺伝魔法を使われる事はないだろう。次に扉を蹴って出現した事、この線からは男がろくに魔法も使えない墮落者だとうかがえる。一見、偏見のように感じるが、固く閉ざされた扉を魔法を使わずに肉体で開けるメリットなどほとんど無い。メリットとして考えられる線と言えば、相手に自分を墮落者の様な落ちこぼれと誤認させるくらいだ。しかしそこまで考えられる者がこんな事はしないだろう。それこそ偏見だが……

乱数調整の頭の中で次々に思考、予想されて行く男の戦闘能力。さすがは乱数調整と言えるだろう。

「で、戦うの？　どうなの？　土下座して謝るんだったら学園に報告程度で済ましてあげるけど……」

「ふ、ふざけんな！　学園に報告って最悪じゃねえか！」

男は武器を構え直し、標的を乱数調整に合わせる。その動作からして男の武器は遠距離武器の様だ。

この狭い車両に遠距離武器を、持ち込む辺りからして男が無能な事が分かる。

「なに？　その武器。わざわざ照準を合わせないと、いけない位、ぶれが激しいの？　その辺りから察すると、威力はかなりの物の様ね。けどそんな高威力の武器を、この狭い車両で使ってあなたは無事なの？　まさかこの列車ごと、吹き飛ばす気じゃ無いでしょうね。まあ、学園に報告って脅して怯えているくらいだから、テロでは無い様だけど。」

男はロケットでも飛び出しそうな、大型の銃にも見える武器の引き金に指を添える。

その指は激しく揺れ、自分は動揺しています、と宣言しているようだった。

乱数調整は引き金に指が掛つていと言つのに、何の警戒も無く男に近づき始める。

「く、来るなああ……！」

引き金が引かれる音が列車内に響き渡る。

乗客たちの顔が一気に青ざめる。炉心溶融は1人でも多くの乗客を守ろうと子供連れの親子を背後にやり、魔法名を唱えようとして

いた。

しかしこの間、どこかおかしな矛盾があった。

なぜ、高威力の銃の引き金が引かれたと言うのに、引き金が引かれた音が車内に響き渡ったのだろうか。

銃が正常に働けば、大音量の爆発音と共に、列車は吹き飛ばされていただろう。

なぜ引き金を引く音が、大音量の爆発音に掻き消されず、響き渡ったのだろうか。

引き金が引かれた音が、大音量の爆発音に掻き消されず、車内に響き渡った理由……それは簡単な話、引き金が引かれただけで、弾が発射されていないからだ。

原因は男にあった。男は己が持つ武器の威力に恐れをなし、不発を恐れ、弾を装着しないまま列車に乗り込んだのだ。そして実際にハイジャックをするという緊張から、とうとう弾を装着する事を忘れ、今に至ってしまったと言う事だ。

「今、気付いたの？ その武器、弾が装着されて無いつて。あ、それと狭い場所での戦いに向いた武器は瞬発力に優れたものよ。覚えておきなさい」

男はその場に崩れ落ちる。抵抗する術を失ったからだ。

機械天使、科学と魔法学園の落ちこぼれ、
「列車内での出来事3」(後書き)

あとがき

ひとまず、二人のお話はここでおしまいです。

次は喜希ちゃんと共に、私立学園で登場すると思います？

まあ、予定は未定ですから……

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ」 「私立学園の前で」

「着きましたよ、喜希さん。ここが我が私立学園、『Playing
プレイング・ウオッチクラフト
g Witchcraft』です」

ホストみたいな青年は、ダンスの誘導するように喜希を車から降ろす。

喜希の手にはメカメカしい機器的な筭が握られていた。恐らく一度、自宅に戻って用意して来たのだろう。

「我が学園のご感想はありますか？」

「……すごく……大きいです」

喜希は首を大きく傾けて、その学園を見上げながら答える。

喜希の前には、魔法を連想させる装飾品がついた豪華な門があり、その奥には想像を絶するほどに大きな建物があつた。横よりも縦の大きさに目を惹かれるその建物は、どこか時計台を連想させ、宮殿のようにも教会の様にも見える。やはり建物の容姿が容姿なのか『学園』とは違い、どこか神秘的な雰囲気放っていた。

喜希は貴族なので、ただ豪華な建物などとは見慣れている。しかし、そんな喜希を驚かすほどに、この建物はとてつもなく巨大だった。

「外見は……普通ですね」

「そうですね。なぜか残念です」

「え！？ 何か気に障る事、言いましたか、僕！？」

「あ、いえ。気になさらず」

喜希は、貴族の中でも特に上位の位なので、同じ貴族でも感じ方が変わってくるのだろう。

ただの貴族からすれば、豪華で文句のつけようも無いほどの建物でも、喜希からすれば、驚くべき点はただ大きい、それだけに過ぎないのだ。

しかし、それは喜希が特別なだけで、実際の所、庶民から見れば、入る事すら許されそうに無いほどの建物である。

「では、早速、中に入ってみましょうか。あ、ちなみに、この私立学園はとても大きなバリヤが張られていて、許可を出したもののしか入ることができません。ですので、お友達などを来場させたい場合は私にご報告ください」

そう言って大きな門を開け放つ。そうして門を潜ると、途端に周りが騒がしく聞こえる。

喜希はびっくりしながらも周りを再確認すると、たくさんの生徒たちが、園庭でにぎわっているではないか。

「え？ さっきまで、誰も居なかったのに……」

「大きなバリヤには、人を通さない効果と同時に、防音と視覚力モフラージュの効果があるのですよ。すごいですよね」

さすがに喜希でも、このような仕掛けは見た事が無く、心から驚いてしまった。この後、建物内に入った喜希が驚きまくった事は言うまでも無い。

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ 「私立学園の前で」 (後書き)

この章を書いているとき、私の手違いで消してしまいました。

今まで書いてきた作品が……

まあ、定期的にバックアップをとっておいたので、被害は抑えることが出来ましたが……

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ」 「私立学園の前で2」

「あれ？ 一度、学園に行くんじゃないかった？」

「おれも、そう思っていたんだけど、学園から直接、私立学園に向かつてくれて連絡があつて……」

「そう、まあいいわ。要はそのせいで、ここに居るって事ね」

「なんか白々しいな、お前。絶対なんかしただろ」

「うふふ。何の事かしら？」

例の私立学園の門の前で炉心溶融と乱数調整が話をしている。

本来2人の当初の目的は、学園に向かう事だったが、今はそれが急遽変更されて私立学園に向かわされる破目になったと言う事だ。

しかしその被害者が乱数調整だけあつて、とても無理矢理ここへ向かわされた様には思えない。と言うのも、乱数調整には不特定要素のあるものを操作する力がある。今回、乱数調整が私立学園に向かわされる事は予定だった。そう、あくまでも予定だったのだ。この様に確定されていない事項を乱数調整は意図的に操作する事が出来るのだ。

炉心溶融はその事を指摘していたのだ。

「それにしても、静かな学園だな」

「あれ？ あんたには見えないの？ この私立学園を、覆う様に張り巡らされた結界と、この結界の向こうでたくさんの人々が、まるでパーティのように騒いでいる光景が」

「お前の例え、分かり難いんだよ！ 要はあれだな、この学園の生徒達がちやほや、きゃっきやうふふしているって言う事だな」

「う、うん。まあそうね。じゃあ入るわよ」

「入れるのか？」

「当たり前よ。私を誰だと思っているのよ」

そう言って門に手を触れる。その門と手の接触箇所から赤い光が溢れ、辺りを不気味に赤く照らす。次第にその光は範囲を広げ、どんどん結界を赤く染めていく。その結果、炉心溶融にも結界を見ることが出来るようになり、乱数調整の横で首を傾げながら、この神秘的な光景を眺めていた。

「お、おい。そんな事していいのか？ 怒られないのか？ それに今、なにしてるんだよ？」

「なにつて……結界に穴あけてんのよ。見れば分かるでしょ。けどまあ、これは私も良く解つてないのよ。間隙久遠と有想夢想を玩弄する者に教わった事だから」

「間隙久遠と有想夢想を玩弄する者？ 誰だそれ？」

「学園最高理事長の事よ。知ってると思うけど、あの人が学生の成績をつけ、卒業できるかどうかを見極めているのよ。それも一人で。大量の生徒の情報を一人で管理している訳だから、すごいわよね。一体その情報はどこから手に入れているんだか……それでね、あの人が言うには世界と真理の裏が、どうたらこうたらって……まあ、あ

まり興味は無かったんだけど、魔女の血を引く人間として覚えておきなさいって、無理矢理……ああ、もう！あのクソババア！思い出したらイラついてきたわ！！」

そう言つて、赤くなつた結界を、思いっ切り殴る。

赤く変色した結界がガラスの様に飛び散り、辺りに散乱する。しかし、その破片は空気以外の物体に触れると、どろっと溶け出し、一瞬で蒸発する。

そして不幸な事に、その破片の一部が炉心溶解の柔らかそうな頬に飛び散り、炉心溶解を徐々に驚愕させる。

「ん？ って、これ？！ 結界のどろどろじゃねえーか！！ うわああああん！！！」

「あ、ごめん。顔に付いちやつた？ じゃあ、私が口で取っ」

そこまで言つて、頭を思い切り殴られる乱数調整。

しかし痛がつているのは、殴つた本人である炉心溶解で、殴られた乱数調整はびくともしていない。今も炉心溶解は、痛む手を押さえながらも、顔を必死に腕で拭いていた。

体の丈夫さは、魔力の量と比例する。実力の差がこんな所で現れたのだろう。

「うふふ……炉心溶解したら照れ屋さんね。てへっ」

「お前……いつか絶対に殺す……」

二人はけんかしながらも仲良く、破つた結界から侵入する。

機械天使、科学と魔法学園の落ちこぼれ」 「私立学園の前で2」 (後書き)

今回で乱数調整の、真の性格を書くことが出来ました。

列車内での出来事では、あまりにも乱数調整がかっこ良すぎましたので……

それでもなかった？

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ 「プレイングランク」

「では、この学園の事について少し説明しておきます。もうすぐイベントも始まる事ですしね」

ホストみたいな青年は、喜希と使い魔を豪華な大きなイスに導くように座らすと同時に、次々と説明を続けていく。

「この学園では、私のことを、『スピードの13、ダビデ』とお呼びください。ダビデと省略して頂いても結構です。この呼び名システムですが、システム自体の名称をプレイングランクと言い、強い力を誇る者に称号を与えと言うものです。お解りだと思いますが与えられた称号は、この学園内での通り名となっています」

このプレイングランクの称号は計53名に与えられる。もちろん、称号を得た者はその栄光を守るため、力を伸ばし続けなければならぬ。そうしないと称号を、別の者に略奪されてしまうからだ。

次に称号の種類だが、スピードの13、ハートの13、ダイヤの13、クラブの13、そしてジョーカーとあり、役割に応じて種類は決められ、その中の力の序列として数字が与えられる。ちなみに数字が大きい程良く、ダビデなどの名前があるのは上位113までとなっている。

「お解り頂けましたか？ 喜希さんは前にも言ったとおり『スピードの12、パラス』を名乗りください」

「わ、わかりました。パラス……ですね」

「はい。クラスでの自己紹介をする予定ですので、しっかり名乗れ

るように、なっていて下さいね。私は用事があるので、一旦、席を外しますが、喜希さんはここで待機していて下さい」

ホストみたいな青年は、大きな部屋に一人喜希を残し、この場を後にする。

取り残された様に佇む、喜希と使い魔。あまりにも雰囲気気まぐずいので、喜希が使い魔へ話しかけることにしたのか、キヨロキヨロと使い魔をチラ見しながら話しかける。

「あのー。使い魔さん？ あなたにはお名前はあるのですか？」

「無い」

「無いんですか！？ えーと……どこから来たんですか？」

「気が付いたら……お前と行動していた。それ以外の記憶は無い」

「……。その右手首の紋章ってなんだろうね？」

「さあな」

「じゃ、じゃあ！ お近づきの記念に、お名前を考えようか」

「勝手にしろ」

あまりにも単調な会話。それでも二人は少なからずとも、距離を縮めつつあった。

「初めまして。ここでは『スピードの13、ダビデ』と呼ばば良いのかしら」

私立学園の廊下と思われる場所で、乱数調整がホストみたいな青年に、背後から話しかける。

ホストみたいな青年は、背後に立たれていた事に気付いていなかったらしく、慌てて驚きながら、背後を振り向く。しかしホストみたいな青年の驚きかたが、尋常ではない。ただ、背後から話しかけられただけでは、これほどは驚かないだろう。

ホストみたいな青年が必要以上に驚いたのには、理由がある。と言うのも、この廊下は一般の生徒の立ち入りを禁止している。と言うよりは、物理的に使用できないと表現した方が適切だろう。その上この廊下を利用する者は、彼と彼の父親のみだ。にも関わらず、声をかけられたのだ。

このホストみたいな青年の驚きは、ただ、背後から話しかけられた事に対する驚きだけではないのだ。

「なにを驚いているのかしら？ 私達はこれから喜希とやらを監視する同僚でしょ？ よろしく頼むわね」

ホストみたいな青年の肩に軽く触れ、青年を追い抜かすように颯爽と歩いていく。

「巫女服……と言う事は、本当に乱数調整が来たのか！ 学園はなにを、そんなに焦っている！」

すでに彼しか居ない廊下に、青年の声が響き渡る。

機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ　「プレイングランク」(後書き)

今回は新たに、プレイングランクを紹介しました。

次から次へと、設定を作りすぎですね。

あ、『機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ』内では

『機械天使と魔法と科学と学園と』の事は忘れてくださいな^^；

一応、元ネタは……調べると出ると思いますよ^^；

(ネタバレはしないと思いますが、ネタバレ防止のため、伏せて起きます。万が一の事を考えて)

機械天使／科学と魔法学園の落ちこぼれ／「自己紹介、イベント紹介」

とても教室とは言えない様な豪華で大きな教室で、たくさんの魔法使いたちに見守られる中、喜希や使い魔、炉心溶融や乱数調整が教卓の前で、自己紹介をしていた。

「ぼ、僕の名前は、き、喜希Vivianageです。よ、よろしくお願いします！ あ！『スピードの12、パラス』です！」

女の子にも関わらず、自分の事を僕と呼ぶ喜希は、他の生徒から大きな注目を集めてしまう。喜希本人はその事に気付けるはずも無く、異様に凝視する生徒たちの視線に、緊張を覚える喜希だった。それに、異様に存在感の大きい、とんがり帽子とパラスと言う異名が、さらに注目を集めてしまっていたりもする。

「おれの名前は稚^ち気だ。よろしくな」

そして喜希と同じく、女の子に関わらず、自分の事をおれと呼ぶ炉心溶融も、同じような目で見られているが、本人は微塵も気にしていないらしく、教卓の前でただ、堂々としているだけだった。しかし喜希と違い、服装はおしゃれな着こなしに見える為、主に男子からの視線を集めていたりする。見た目だけなら人一倍に可愛いのも理由だろう。見た目だけなら。

「私の名前は神代^{かんだい}です。よろしく」

それに対して乱数調整は、あまりにも普通に自己紹介をしているのだから、大して視線を集めないのでは、と思うが乱数調整の服装は、あの逆巫女服だ。自己紹介を始めてから、視線を集め始めた喜

希や炉心溶融とは違い、自己紹介をする前から視線を集めていた乱数調整。しかし彼女もまた、喜希と同様、なぜ視線を集めたか解っていない。いや、それ以前に、気にもしていないのだろう。

「俺の名は……アガシオン……だそうだ」

使い魔はぶっきらぼうに、自分の名を名乗る。この名は先程、待機させられた時に、喜希から貰った名のだろう。アガシオンの服装は到って普通の為、特に注目を集める事も無かった。

そうして全員、自己紹介が終わった所で、ダビデが割り込むように、イベントについて、説明を始める。

「明日から始まるイベントですが、彼ら4人も交えて開催されます。そして肝心のイベント内容ですが、言ったらシンプルです。一人、一つ配布される、『ピース』と呼ばれるアイテムの奪い合いです。ただ、それだけです。力づくで奪っても、取引で取得しても構いません。最終的に一番、多くの『ピース』を取得している人の優勝です。そして優勝者には、新たな称号の取得と、持つだけで魔法の腕が上達する魔法のような、科学の本と筭が送られます。それと、『ピース』についてですが、『ピース』は最先端科学で出来ています。その為、持ち主が誰なのかをイベント開催側に送信する機能も備わっています。イベント開催側は、その送信されてきたデータを元に、ご勝手ながらランキングを作り、公開する予定でございます。それと『ピース』の破壊は禁則です。守れなかったの者は、イベント参加の権利を失います。まあ、並みの者には破壊する事は愚か、傷つける事も不可能ですが」

ダビデはそう言い終えると、胸元から無数の『ピース』を取り出し、豆をまくように投げ捨てる。

見た所、ジグソーピースのように見える『ピース』と呼ばれたア

アイテムは宙を舞い、辺りの空中に散乱する。

その空中で散乱している『ピース』を一人の生徒が受け止める。次はその隣の子が、今度は教卓のすぐ前の子と、次々に生徒達がつずつ、空中に浮かぶ『ピース』を受け取っていく。

やがて、喜希や乱数調整、炉心溶融やアガシオンの元へも、飛んで来る。

そうしてほぼ全員に『ピース』が行き渡たり、最後の『ピース』だけが浮いている時、しめるようにダビデが言う。

「イベントの開催は明日からです、それまで大事に持っていてください。明日まで手元に置く事が出来なかった者は即失格です。もちろん、明日を待たずに今日、奪った者も即失格です。それでは健闘を祈ります！」

最後の『ピース』をダビデが、大きく腕を払いながらキャッチする。

さて、前回に引き続き、今まで名称の無かったキャラクターに名称を与えました。

ホストみたいな青年が、ダビデ。

使い魔が、アガシオン。そして乱数調整と炉心溶融に神代、稚気。

今回で、この作品のテーマが具体的に明かされましたね。

落ちこぼれの主人公の学園生活が、元々のテーマですので、かなり具体的になったのではないのでしょうか。

『機械天使と魔法と科学と学園と』が途中で終了しているので、こちらでも、そうなってしまう、かも知れません。

しかし次、『機械天使と魔法と科学と学園と』が再開された時は、今の魔女、魔人編は終わらしたいと思います。これは約束します。

現在の予定では、今の章『機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ』が

終了したら一旦、短いおまけを挟み、

『機械天使と魔法と科学と学園と』に移りたいと思います。

そして今更、この更新ペースが辛くなってきた、とは言えない……

器械悪魔、組織と黒幕と運命と、「間隙久遠と有想夢想を玩弄する者」

「運命に招かれ、悲劇が訪れる。今宵は荒んだ夜陰になりそうね」

学園の学園最高理事長を務める、齢1900歳の少女は悟りきった表情で、ただ語る。

この世界で100歳越えの人間はそう珍しくも無い。しかし100歳越えとなってくると、居るか居ないかの珍しさになってくる。それも若さを保ったままの人間なんて恐らく彼女くらいしか居ないだろう。

「さて、行こうかしら。威光を放つ月の明るみを浴びた、散歩も悪くは無いわね」

漆黒のドレスを着た少女は、漆黒の傘を肩に掛けると、くるっと1回転して見せる。

そんな少女が私室として扱っている、この部屋は学園最高理事長室と言う。意味的には校長室と同意義だが、この部屋は学園最高理事長室と言う機能の他に、学園最高情報処理室という役割も持つ。

学園最高情報処理室とは、学園の関わるあらゆる情報を処理し、学園に関わる全てを支配下に置く為の物だが、この部屋に特に機械的な物は見当たらない。

と言うのもその情報処理は学園最高理事長の頭の中だけで行われており、一見、適当に過ごしてる様に見える学園最高理事長だが、する事はちゃんとしているらしく、彼女の頭の中には学園の全てと言っても過言では無いほどの知識が詰め込まれている。

「断末魔に乱数調整、その他諸々。かなりの機械天使の部品が集まったわね。さて、次は機械天使のどこを支配下に置こうかしら……」

それとも
「

学園の学園最高理事長を務める、年齢1900歳の少女はそう言い、
窓も扉も無い部屋から突然、姿を消す。騙し絵のように気が付けば
彼女はそこには居なかった。

そんな彼女を知る者は彼女の事をこう呼ぶ。

かんげきくおん 間隙久遠 ゆうそうむそつ 有想夢想 がんろう 玩弄する者

今回からは機械天使の外伝ストーリー『器械悪魔と組織と黒幕と運命と』を連載したいと思います。

『機械天使と科学と魔法学園の落ちこぼれ』が二つ目のメインストーリーに対して、こちらは完全におまけとなっています。

そのため、連載と言いましたが、ものすごく短いです。

内容は黒幕である間隙久遠と有想夢想を玩弄する者が主人公の物語です。

ちなみに器械悪魔の、『器械』は誤字じゃありませんよ。仕様です。同じ読み方でも、意味が違うんですよね。

器械悪魔とは、この黒幕を指している単語です。

機械天使は、この黒幕の目的です。

まあ、これ以上はネタバレになるので、慎んでおきます。

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者の意味は、次回、述べたいと思います。

けど、簡単な単語の組み合わせなので、調べて頂ければ、すぐにわかると思いますが^^;

器械悪魔、組織と黒幕と運命と、すべての魔法使いと根を断つ者」

「魔法を扱う者……魔法に関する全て……いない……」

黒と赤と白を基調としたフリル満点のゴスロリ服に、体を包む小柄な少女が居る。

短いスカートから大きく露出された、太ももには髑髏のタトゥーが彫れていて、同じく大きく露出された上半身の腕や首には、黒やピンクのテープの様なリボンが結ばれていた。

そんな彼女が居る部屋は、学園最高理事長室の様に窓も扉も無い部屋。しかし学園最高理事長室とは違い、決定的に華やかさに欠ける。そんな部屋を例えるならば……そう、牢獄。

うす暗いトーンに、出口は愚か、換気口すら見つからない。飾り気の無いその部屋は牢獄と言うのにふさわしい。

その部屋で少女に背後から近付く何者かが現れる。少女はその事に気付いているのか、背後も振り向かず、その人物に話しかける。

「間隙久遠と有想夢想を玩弄する者……こんな所に何の用？」

「あなたを迎えに。私はあなたの力を欲する。神が与えし、天命の中で共に踊り狂いましょう」

「私の力を欲する？ 魔神であるこの私の？」

「ええ、あなたの力が」

このゴスロリ少女は魔女だった。

この世界には無数の魔法使いが存在する。が、魔女の存在は珍しく、その珍しさゆえに世間では絶滅したと常識になっている。

魔法使いと魔女の違いだが、現在の魔法を扱う人間の事を魔法使いと呼び、生まれつき魔法を扱える生き物を魔女、もしくは魔人と呼ぶ。そして魔法使いと魔女は全く別の生き物であり、体の構図そのものが違う。その証拠に魔女、魔人は生まれつき筋肉が発達している上、神経が人間以上に繊細である。

その魔女、魔人は遥か過去に人間に戦争を仕掛け、惨敗した。敗因は人口の数だろうか、人間の方が遥かに数が多かったのだ。

その結果、魔女、魔人は絶滅寸前まで追い込まれたのだ。そしてその僅かな生き残りがこの少女なのだ。

そしてその少女は自らを魔神と称する。魔神とは魔女、魔人の上位互換であり、魔女、魔人の中で特に力の優れた者に与えられる名称だ。一説には魔法を創造した者に与えられるか、どうかと言う話だ。

なににせよ、そこらの魔法使いなら容易に消し去るほどの力はあるだろう。

「なぜ私を欲する？ 私はあなたに負け、こんな所に閉じ込められているのだぞ？ 今さら何を言うかと思えば……力を貸してほしいだろ？」

「力を貸してほしい？ 誰がそんな事、言ったかしら？ 私はあなたの力がほしいと、言っただけよ。貸して貰うなんて生易しい事は最初から望んでないの。あなたは、ただ黙って私の命令に従えば良いの。それにこの話はあなたにとっても、悪くは無い誘いと思うわよ。その証拠に、まずこの窓も扉も無い部屋から脱出する為には、この話に乗るしか無いのよ。それにこの部屋を脱出したら、私の命令を無視して逃げるなりすればいいわ。その時はその時で、私も手を打たせて貰うから」

「……いいでしょう。承諾します。この話を持ちかけて来た事、後

悔させてあげるから。間隙久遠と有想夢想を玩弄する者」

「楽しみに待っているわ。すべての魔法使いと根を断つ者」

最初の命令は、非禁禁忌の束縛

器械悪魔く組織と黒幕と運命とく「すべての魔法使いと根を断つ者」(後書き)

あとがき

ゴスロリ少女……

実は次の出番はかなり先だったりします^^；

それにしても、この黒幕、ノリノリである。

なんと言つか、黒幕臭というか、カリスマと言つか……

あれ？カリスマを感じているのは、私だけですか？

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者の次は、すべての魔法使いと根を断つ者が登場しました。

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は私のオリジナルですが、

すべての魔法使いと根を断つ者は元ネタがあります。調べると出ると思いますよ^^

ちなみに、すべての魔法使いと根を断つ者の「すべて」はあえて、ひらがなです。

忘れている訳ではありませんよ^^元ネタがひらがなだったので…

…

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は私なりに意味を込めさせて貰いました。

間隙久遠も有想夢想も自分が勝手に作った単語です。

これも調べて貰うとすぐに出てくるのですが、ここに意味を乗せる事にします^^

まあ、私が考えた単語ですので、当然ですよ^^；

で、その意味はですね、『空間と時間、執着心と理想を遊びで弄ぶ者』です。

最強クラスです。間違いない。

下にキャラプロフィールを乗せておきます。

しかし、強烈なネタバレを含みます。

（この作品のプロフィールでは本編で明かされていないキャラ設定を乗せようと言う、私の気まぐれです）

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者

性別：女

年齢：1900歳

性格：胡散臭い。溢れ出るカリスマ。いかにも黒幕みたいな性格。

容姿：黒いドレスに黒い傘

備考：黒いドレスに黒い傘。胡散臭い言動からは何か危険な香りを感じさせる。

年齢1900歳

学園最高理事長を務めるだけはあるのか實力はかなりのもの。
いや、最強クラス。

本気を出せば魔力を具現化した蜘蛛の巣を張り恵ませたような
とても美しく綺麗な翼が生える。

具体的に言くと雨の日の蜘蛛の巣が、虹色のガラスで表現された翼。

魔人、魔女との戦争を行き残った数少ない人間である。

現在は自分と近い實力を誇る非禁禁忌を危険視する割には、
親しく接している様子。

称号の意味は、空間と時間、執着心と理想を遊びで弄ぶ者。
最強？ いや最狂。

代表台詞：「運命に招かれ、悲劇が訪れる。」

宵は荒^{すさ}んだ夜陰になりそうね」

「懇篤^{こんとく}の鎮魂歌^{ちんこんか}を奏でてあげるわ。」

あなたの為のね」

「間隙久遠と有想夢想を玩弄する者……」

私がそう称される理由を、力で述べてあげるわ」

「唯の光と侮る無かれ。それは時空を歪めし万物の理に適わぬもの。」

触れれば、忽ち己を殺す凶器となろう」

代表魔法：tEe『場の方程式』

特異点『naked singularity』

ムーンダスト『月石』

スターダスト『流星』

崩壊星『コラプサー』

凍結星『フローズンスター』

事象の地平面『event horizon』

器械悪魔、組織と黒幕と運命と、「輪廻i」

「こんとく ちんこんか 悲篤の鎮魂歌を奏でてあげるわ。あなたの為のね」

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者、同時に学園最高理事長である彼女は、冷たく冷え切った声で呟く。表情も声同様、とても冷たく軽蔑する様な目で、すぐ前に立つ青年を虚ろな瞳で睨みつける。

しかしこれが彼女の平常の顔であり、特に冷たい態度を取ろうとしている訳ではない。

「久しぶりね、非禁禁忌。あなたは世界の平和を守る為、1人で戦って来たようだけど、あなたのその行動は私の計画の邪魔なのよね」

「りんね・アイ 輪廻i。世界を乱す事がお前の目的なのか？」

輪廻i。これが間隙久遠と有想夢想を玩弄する者の名である。この名を知る者が非禁禁忌の他に居るのだろうか。

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者はそんな名を呼ばれた事など一切、気にせず会話を続ける。

「そんな事はないわよ。私はこの世界を我が子の様に愛しているわ。……そんな事より、私の学園に何の御用事かしら？　ここは卒業者には無縁の場所だと思うけど？　まさかあなたが授業を開催しようとも言っのかしら？」

ここは学園の中心部。しかし中心部だと言っのに背景はすごく、こざつぱりとしている。

限りなく高い場所なのか、それとも、それ以外が原因なのか、雲が海のように溢れる場所に、正方形の足場がぼつんと不規則に

並んでいるだけだ。

しかしその大量の雲は、足場の周囲に浮かんでいるだけで、それ以上、上には一切存在しない。例えるならば、ドライアイスから発せられる煙。あの気体は周りの空気より重い為、下に沈んでしまう。この場にはそれと似た現象が起きている。

足場は大きい物から小さい物、他の足場より高い物から低い物とバラバラだが、共通している事が2つある。それは、まずどんな足場も綺麗な正方形である事。次に足場の中心に小さな灯籠が立っていると言う事。灯籠は5cm程の大きさで、中にはロウソクが小さな灯を宿している。

足場の下は当然の如く、雲が邪魔で何も見えない。足場が地に立っているのか、宙に浮かんでいるのかもわからない。それどころか、ここが高い場所なのかどうかもわからない。

「……授業を開催？ この場所ですか？」

「ふふ……そうね。」

こんな無駄話が無性に楽しいのか、輪廻はつい、笑みを露わにしよう。

しかしそこで非禁禁忌と間隙久遠と有想夢想を玩弄する者の会話は終わってしまう。

お互い話す事が無いのか、沈黙と言う静寂が訪れる。

しかしその静寂は長くは無かった。

輪廻が、唐突に月を見上げ話を始めたのだ。

「今夜は月が綺麗ね。こんなにも綺麗な月を見ると思い出すわ」

「……なにを？」

「愛しい者と過ごした日々を……」

「……それを俺に言っただろう？」

「ふふ……そうね」

2回目の台詞……だが1度目とは違い、輪廻の顔に笑みは無かった。それどころか、愛した者を失った時の様な悲しい顔をしている。

「……それで、どうするんだ？ 戦うのか？」

「あなたは何時もそうね。目的の為なら、手段を選ばない。けれども決して他人を犠牲にしようとはせず、何時も何時も自分を犠牲にする。そしてそれを止める事も出来ない、と言うことを思い知らせる様な質問……。けどね、もう輪廻は居ないの。過去の自分は捨てたわ。そう、私は間隙久遠と有想夢想を玩弄する者。たった一つの幸せを願ってここまで来たんだもの。今さら後には退けない。さあ、かかっておいで！ 私の全身全霊を掛けて、あなたを救って見せる」

器械悪魔、組織と黒幕と運命と、「輪廻」(後書き)

あとがき

今回は深い意味を込めて見ました。

物語が進むにつれて、意味が伝わるかと思えます。

それにしても、二人が今、居るところがちゃんと伝わったかが心配です^^;

この話が、いつの出来事かは今は明かしません。
過去かも知れませんか。

器械悪魔く組織と黒幕と運命とく「覚め、現る笑み」

「ほんと、あなたには妬けるわね。たった齡十数のあなたが、1900と言う幾年を生きた私と、力で並ぶなんてね」

さっきまでとは違い、殺伐に包まれた空間が出来上がる。

原因は間隙久遠と有想夢想を玩弄する者から放たれる、異様なオーラのせいだろうか。そのオーラは、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者の、体に流れる莫大な魔力が具現化した物で、未知数の魔力を誇る彼女だからこそ、成せる業だろう。

普通の人間は彼女の様に、体から魔力を垂れ流すなどと言う、無茶は出来ない。なぜなら彼女のしている事は、血液を常時、垂れ流している事と等しいのだから。

しかし血液を放出するのとは違って、こちらには、それ相当のメリットがある。と言うのも、彼女が放出しているのは血液ではなく魔力、つまり、常に体から魔法が放たれている状態なのだ。体から常に放たれる魔法は彼女を優しく、それも強力に保護する。

彼女のしている事は立派な戦術なのだ。

それに対して非禁禁忌は、相変わらず余裕の表情で立って居るかと思われるが、相手が相手らしく、珍しく構えを取っている。

非禁禁忌に構えを取らせるだけで、相手が只者ではないと言う事すでにうかがえる。

「間隙久遠と有想夢想を玩弄する者……私がそう称される理由を、力で述べてあげるわ」

そう言って、ドレスにも関わらず、大きく足を上げ空を蹴る。それと同時に蹴り上げた足の先から、一筋の光が駆け抜ける。その光

は非禁禁忌の右頬をかすり、いつまでもそこに残る。

「唯の光と侮る無かれ。それは時空を歪めし万物の理に適わぬもの。触れれば、忽ち己を殺す凶器となろう」

それを目の辺りにした非禁禁忌の顔に珍しく、表情が現れる。

それは時空を歪ませ、意のままにする攻撃から来る恐怖ではない。また、不意打ちの如く仕掛けられた攻撃に対する怒りでもない。はたまた、大きな力を悠然と誇る間隙久遠と有想夢想を玩弄する者に対する哀れみでもない。

それらを押し切って、非禁禁忌の顔に表れたのは、笑みだった。大笑いしているしている訳ではない。ただ、どこか静かに小さく笑っているだけだ。

「……そんな必死になってくれて、ありがとうな」

器械悪魔と組織と黒幕と運命と「覚め、現る笑み」(後書き)

あとがき

輪廻と非禁禁忌の戦闘が始まりました。

何度も言いますが、『器械悪魔と組織と黒幕と運命と』は、『機械天使と魔法と科学と学園と』のおまけの様な物なので、深く考えないでください。

それゆえ、この出来事が、いつ、起きたかは不明にしておきます。

それにしても、最強の二人が戦っているので、

戦闘をどんな演出にするか、悩みます。

やっぱり、最強だけあって、それなりに、

すごい戦いを描かなければ、ならないので^^;

まだ、始まったばかりで、そんなにすぐく見えませんが、

次回は飛び切りの戦闘が…… あると良いですね^^;

まあ、書いている者が私ですからT-T

それにしても輪廻は中二(r y

器械悪魔、組織と黒幕と運命と、「存在なき、禁忌」

「……そんな必死になってくれて、ありがとうな」

彼はそう言うと、触れる事を許さぬ一筋の光を、強く握り締める。しかし、握る前よりも強烈な光を放つだけで何も起こらない。非禁禁忌だからだろうか、一般人が触れればどうなるかも予想も出来ない、時空の歪みを、いとも簡単に握り、消滅させてしまう。

「ありとあらゆるものを禁止する力。その力を持つ、あなただからこそ成せる業ね。やはり万物の理に適わぬものも、あなたには敵わないのね」

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、平然と理由を述べる。

非禁禁忌は相も変わらず、ただ小さな笑みを浮かべている。

しかし次の瞬間、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者の視界から、非禁禁忌の姿が消える。

「あら？ 非禁禁忌を見る事を禁じるのかしら？ しかし、感じることは出来るわよ」

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は後ろを振り返り、オーラに溢れた片手を正面へ持つて行く。

そこへ、非禁禁忌が姿を現し、見事に手のあつた所に蹴りを入れる。

たったそれだけなのに、手と足の接触箇所からは、空気を大きく揺らす衝撃波が生まれ、ドレスと灯籠のろうそくの炎を荒ぶったかのように揺らす。それだけではない、接触箇所からは衝撃波の他に筋上の光が溢れ出ている。これは恐らく、強大な力のぶつかり合い

により、断片化された魔力だろう。

そんな日常では見れもしない現象を、目の辺りにしても、精神が揺らぐ事の無い間隙久遠と有想夢想を玩弄する者と非禁禁忌。

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者はそのまま、非禁禁忌の足を強く握り、後ろを振り向かず非禁禁忌を後ろ斜め下に投げる。

後ろ斜め下に投げられた事により、非禁禁忌は間隙久遠と有想夢想を玩弄する者の、背中を見届けながら、雲の中へ隠れて行く。

「事象の地平面『event horizon』」

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、傘を肩と頬で挟み、自由になった両手で平泳ぎの様に宙をかく。その跡に、左右それぞれ5本、合計10本の筋状の光が現れる。どうやら光は、指の爪の通った跡をなぞる様に現れるらしい。

そのまま、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は後ろを振り返り、非禁禁忌の落ちていった方角を上から下に猫の様に引かく動作をする。

左右5本ずつの光が翼の様に羽ばたき揺らめき、風に吹き飛ばされた様に左右に散る。それと同時に非禁禁忌の落ちていった辺りの雲が吹き飛ばされ、非禁禁忌の姿が現わになる。

しかし、雲の跳ね除けられた空間の先は見えない。ただ暗闇が空間を支配しており地は愚か、光すらも見つからない。

非禁禁忌が暗闇の中で、無数の武器と浮かんでいるだけだった。

器械悪魔、組織と黒幕と運命と、「存在なき、禁忌」（後書き）

あとがき

戦闘シーンは描くのが難しいな、と改めて実感しました。まだまだ、未熟なため、上手く伝わったかが心配です。

事象の地平面『event horizon』

じしよのちへいめん・イベントホライズン と読みます。情報は光や電磁波などにより伝達され、その最大速度は光速であるが、

光などでも到達できなくなる領域（距離）が存在し、ここより先の情報を我々は知ることができない。この境界を指し「事象の地平面」と呼ぶ。

と言う意味があるみたいです。

それらしい魔法にしたかったのですが、上手く伝えることが出来ないんですね。

10本の光が左右に散り、下に存在した雲が吹き飛ぶ。

左右に散ったのに、下の雲が吹き飛んだ。

実際は雲が吹き飛ぶ『何か』があったのでしようが、我々にその情報を得ることができなかったもので、ただ、雲が吹き飛んだ様に、見えたのではないのでしょうか。そう、雲以外の存在、情報を得る事ができなかったのでしょうか。

実際は雲の中で、『何か』があったのでしよう。少なくとも、非禁禁忌は無傷みたいなので、彼には捕らえる事ができていた、

の
か
も
知
れ
ま
せ
ん
ね。

器械悪魔、組織と黒幕と運命と、ありとあらゆるものを禁ずる事を可能とする

無数の武器と共に、宙に浮く非禁禁忌を捕らえた、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、その場から騙し絵の様に姿を消していた。次に彼女が現れた場所は、ワープでもしたのだろうか、非禁禁忌の真後ろだった。

「崩壊星『コラプサー』」

彼女の手から、至近距離に居る非禁禁忌に向かって、ただのレーザーが放たれる。しかし、そのレーザーを避けれるなんて考えないほうが良い。と言うのも、そのレーザーはあまりにも巨大すぎるのだ。その大きさは地上に向かって放たれば、学園自体を崩壊させかねない程。

さすがの非禁禁忌も避けることは諦めたのか、無数の武器を全て実体化し、盾の様に使い、ただ大きいだけのレーザーを塞いでいた。そうしてレーザーをやり過ごす事、数十秒後。レーザーの魔力の断片化がまだ周囲に残っている空間で、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者と、非禁禁忌は凄まじい空中戦を繰り広げていた。

二人は目で追いつけるような速度で戦ってはいない。次々に場所を変え、辺り一面に断片化した魔力の屑をばらまいていた。

大きく空間を移動しつつも、微調整の様な些細な空間移動をはさむ事により、常人じゃとても真似できないような戦い方を可能としている様だ。

「tEe『場の方程式』特異点『naked singulari
ty』ムーンダスト『月石』スターダスト『流星』」

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者の口から、次々に魔法名が溢れ

出てくる。

それと同時に、次々と放たれる奥の手レベルの連続魔法。それらの魔法は光り輝く弾幕となりて、非禁禁忌に襲い掛かる。

「あなたの力は完全ではないわ。力が強すぎて、自分でうまく操作できていないもの。そろそろ諦めたらいいかが？」

数多の魔法を避け続けている非禁禁忌は、何も答えない。

質問に答える余裕が無いのか、それ以外の理由があるのか、非禁禁忌の口は堅く閉ざされていた。しかし態度からは、諦めないと言う事はつきりと伝わってくる。

それに対して間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、静かに微笑むと、

「なんてね。まあ、私の目的は達成できましたし、私が諦める事にしますわ。今はね」

静かに姿を空間の狭間へ隠す。

そんな彼女は、非禁禁忌をこつ称する。

ありとあらゆるものを禁ずる事を可能とする者

器械悪魔、組織と黒幕と運命と、」ありとあらゆるものを禁ずる事を可能とする

あとがき

非禁禁忌と輪廻の戦いはこれで終了です。

次からは落ちこぼれでも、投稿しようかな。

今回はたくさんの、魔法が登場しました。

これで分かった人も居るんじゃないでしょうか？

輪廻は宇宙系の魔法を使います。まあ、最強に相応しいジャンルだと自分は思っています。

崩壊星『コラプサー』

崩壊星はブラックホールのことです。

ブラックホールは昔、コラプサーと呼ばれていたそうですから。

私的には、巨大なエネルギーを現したかったのです。

ですから、あのように……

器械悪魔と組織と黒幕と運命と「発端は些細な事」

フリル満点のピンク色のベッドに、そのベッドの上に存在する無数の人形。淡い光を放つ照明に、華やかな家具。全体的に乙女チックな雰囲気を放つ学園最高理事長室で、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者はSatellite『逃れる事、許さぬ眼』と言う名の魔法を駆使し、学園全体を監視していた。

彼女は、学園最高情報処理室と言う役割も持つ、この部屋で、たった一人で学園全体すべての情報を管理し、処理している。その莫大な情報の源は、いかなる場面であろうが、ビジョンとして頭の中に、思い浮かべる事の出来るこの魔法だった。いかなる場面と言うのは、どんなに距離があろうとも、どんなに密室であろうとも、どんなに過去の事であろうとも、頭の中にその映像を浮かべる事が出来ると言う事だ。

そんなに過酷な仕事を、彼女は余裕の表情で刻々と、こなしている。その仕事ぶりは、彼女が天才だと言う事を物語っていた。

「相変わらず、つまらない学園ね。生徒の前に、ほとんど姿を現さない私を追求しようって、馬鹿な生徒が現れたりしないかしら」

毎日、学園の様子をうかがっては、変わらない日常の閑散に対して愚痴をこぼしている。一見、つまらなそうに見える仕事だが、これが彼女の日常であり、本人は決して、この日常に不満を抱いていないわけではない。知らなかった知識に出会える機会でもあるし、世界の流行をいち早く掴む事も出来るのだから、それなりに暇は潰せるのだろう。

時には、告白する男女を見てはニヤニヤしたり、時には、醜い争い、いじめを見て悲しんだり、時には、ポイ捨てをする生徒に腹立ったり、また時には、そのポイ捨てされたゴミを回収する、生徒の

成長を見て嬉しく思ったりなど、彼女は彼女なりの、日常を楽しんでいるのだった。

「そうだ！ 私が生徒の前へ、出向いてあげることに行きましょう。

そうしましょう！ どこに行こうかしら……それなりに話が出る人物が良いわね。ナンバー7かナンバー3くらいが良いわね。さて

—

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、乙女チックな窓も扉も無い部屋から突然、姿を消す。

騙し絵のように気が付けば彼女はそこには居なかった。

発端は些細な事、遠因の物語

器械悪魔く組織と黒幕と運命とく「発端は些細な事」（後書き）

前回、次回は落ちこぼれでも、投稿しようかな。的な事言ってますが、間違いです。すいません。本当は『機械天使く魔法と科学と学園とく』でした。

そして、あいだを取って『器械悪魔く組織と黒幕と運命とく』にしました。

本当は前回で終了の予定でしたが、予定は未定ですからね。

さて、ナンバー3と言えば、炉心溶解の事ですが、ナンバー7は、断末魔と共に、緊急会議に参加した人物ですね。どんな、人なのでしょう。

私的には「7」に相応しい人物にしたいなと思います。

器械悪魔と組織と黒幕と運命と「学園最高の権利者」

次に間隙久遠と有想夢想を玩弄する者が姿を現したのは、今まさに会議が行われようとしていた、その時だった。それも例によつて緊急に開かれた会議である。

この会議の存在を知っている生徒は、この会議の事を『会議』または『緊急会議』と略称しているのだが、本来の名称は異なる。正式名称は、『組織方針約定会議』と言う。

本来、約定と言う単語には、約束して決める事、契約と言った意味がある。しかし現在の会議に、そのような厳しい秩序は無い。それは現在の組織が乱れ、組織本来の目的を見失っていると言う事を示す。

そして、それが間隙久遠と有想夢想を玩弄する者が、ここに現れた理由である。この組織を創造したのは間隙久遠と有想夢想を玩弄する者なのだから、今の組織の乱れ具合を訂正させなければならぬのは、最高権利者でもある彼女なのだ。

「緊急会議が開かれると聞いて」

彼女はそれだけを言うと、本来ナンバー1が座るイスへ腰を掛ける。しかし表情が決して穏やかではなく、無表情でどこか冷やかさを感じさせる。

同じ会議に参加する、ナンバー3、ナンバー7、ナンバー9の計3名は、初めて見るその人物に驚きが隠せないようだ。

「あの……あなたは誰ですか？ 偉い人なのですか？ もしかして、卒業生の方ですか？」

『9』のイスに腰を掛ける少女は、騙し絵のように現れた得体の

知らない人物に、恐る恐る身分を聞いてみる。それに対して、その人物はナンバー9に振り向きもせずに、自分の地位を答えてみせる。

「学園最高理事長よ。あしからず」

学園最高理事長。その単語で、この場の雰囲気が一気に冷められる。

ただでさえ、謎の人物が出現した事により、この場が凍りついたと言っのに、その人物の正体が学園最高理事長とならば、いくら上位のナンバーもちとは言え、緊張を隠せないだろう。

今回の会議に参加したナンバー持ち達、全員が思っただろう。今回の会議に限って参加するんじゃないかったと。

器械悪魔く組織と黒幕と運命とく「学園最高の権利者」（後書き）

生徒の前に姿を現そうと考え、輪廻が向かった先は、どうやらあの会議のようです。目的であるナンバー3とナンバー7も参加していて、何一つ気に入らない事は無いはず……にも関わらず、輪廻の表情は冷たい無表情。なぜでしょうね？

と、私が思うあとがきを少し本気で書いてみたつもりですが、なんか前回のあらすじ、見たいなノリですね^^; なぜでしょうね？

器械悪魔、組織と黒幕と運命と、後悔をしざるを得ない挑発」

「待ってください！ あなたが学園最高理事長と言うのなら、それを証明して見せてください！」

小さなナンバー9から発せられた大きな声が、会議室全体へ響き渡る。

その声が、硬直していたナンバー3とナンバー7の緊張の糸をほどいていく。

しかし、言った本人の体からは緊張が解けていない。それもそうだろう。ナンバー3とナンバー7は、ナンバー9と謎の人物のやり取りを傍観するのみ、なのに対して、ナンバー9はそのやり取りを行わなければならないのだから。

もし謎の人物が、本物の学園最高理事長なら……そう考えただけで、ナンバー9は絶望感に浸っていく。

「あら？ 私を疑うの？ 残念ね……」

謎の人物は、そこまで言う口を閉じてしまう。それに対して3人は、頭の上に疑問符を浮かべるのみだった。そこに追い討ちを掛けるように、ナンバー9は問う。

「証明できないのですか？」

「じゃあ……力で述べる事にしましょう。学園最高理事長が、たかがナンバー持ち如きに負けたりはしないからね」

その発言を聞き、3人は各々に構えを取る。

ナンバー3はイスの上に立ち、姿勢を低く保ち、どんな動きでも

予備動作をほとんど必要としない構えだった。

ナンバー7はイスに座ったまま、何かのカードと思われる物を右手に、模様の描かれた長方形の石を左手に握っている。

ナンバー9は内股で自分のした事に後悔しながら、怯えていた。

その3人に対して謎の人物はイスの上で、傘を差し、くるっと回転すると、特に構えを取る事も無く3人を挑発する。

「私は間隙久遠と有想夢想を玩弄する者と称される者。一斉にかかってきなさい。あなた達では触れる事もできないでしょうから」

器械悪魔〱組織と黒幕と運命と〱後悔をしざるを得ない挑発」(後書き)

『器械悪魔〱組織と黒幕と運命と〱』は戦闘ばかりですね。
まあ、良いんじゃないでしょうか。

と言うわけで、今回は戦闘寸前の所までです。

ナンバー9はちよくちよく登場しますね。ナンバー1より登場して
るかも……

ナンバー3とナンバー7は空気ですね^^；

器械悪魔、組織と黒幕と運命と、万物の法則に従わぬ者」

「私は間隙久遠と有想夢想を玩弄する者と称される者。一斉にかかつてきなさい。あなた達では触れる事もできないでしょうから」

「面白い事を言うじゃないか、あたいがあなたに触れる事も出来ないって？ あたいは学園のナンバー7、人呼んでライフガンブラー^{ライフガン}。例え、あなたが本物の学園最高理事長だとしても容赦はない」

ナンバー7は左手に持つ石を、宙へ投げ捨てる。石はそのまま放物線を描き、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者へ落下して行く。

「Option Dice『ヴァリアブル・ローデッド』」

複数の石が、一つの大きなサイコロへと変化し、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者を潰す勢いで直進する。

それに対して、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者はイスから飛び降りると、巨大なサイコロだけが、誰も居なくなつた座席へ落下し、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者が、飛び降りた方角とは逆の方へ落下していく。

「まだまだね。もっと自分の魔法を操作できるようにならなきゃ」

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、イスの脚の側面を垂直になりながら歩いていた。

「じゃあ、これは？！ 1 / 3 3 0 5 3 0『Heavenly Hand』」

大きなサイコロが再び、複数の小さな石へ変化する。

その複数の石はそれぞれ異色な光を放つと、高速でナンバー7の周囲を徘徊し、弾丸のように間隙久遠と有想夢想を玩弄する者へと驀進する。

「その程度で、私を貫けると思って？ c o s m i c i n f l a
t i o n 『存在無き時空』」

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、手に持っている傘を歯車の様に激しく回転させる。すると傘が白と黒に光り輝き、傘の模様が宇宙銀河を現したものと変化する。

それだけだ。それだけなのに異色な光を放つ石は、初めから存在が無かったかのように、気が付けば消えていた。

「万物の法則に従って繰り出される攻撃は、私には効果無いわよ」

あまりに突然の出来事に、3人は言葉を失ってしまう。理由は予想を大きく覆されたからだ。

ナンバー7は、異色な光を放つ石の攻撃力を、上回る魔法を仕掛けてくるだろうと予想していた。しかし実際に仕掛けられた魔法は、無条件で相手の攻撃を消滅させる魔法。もしかしたら攻撃でなくとも、任意の物質を消滅させる事が可能かもしれない。

そう考えただけで、3人は戦意を失ってしまう。特にナンバー9は、この戦いのきっかけを作った人物だ。心の底から後悔と絶望に埋もれてしまっているだろう。

「そんな恐怖に引きつった顔をしないで。私は生徒を絶望の底へ、叩き落しに来た訳ではないのよ。ただ、学園最高理事長だと言う事を証明しろと言われたので、それを実行しているだけなのだから。」

まあ、これで信じる気になったかしら？」

「学園最高理事長と、名乗るだけの力を持っているのは、わかったけど、そんなお方がこんな所に何しに来たんだよ？」

あくまでも力を認めたナンバー3は、逆に問いかける。

それに対して、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は再びナンバー1のイスへ腰掛けると、その問いに答える。

「私は学園最高理事長なの？　学園最高理事長が会議に参加する事がおかしいかしら？」

3人は何も言えなかった。

器械悪魔、組織と黒幕と運命と、「万物の法則に従わぬ者」（後書き）

圧倒的な力の差ですね。

さすがは黒幕。しかしこれまで黒幕っぽい事したっけ？

まあ、良いでしょう。

と言うわけで今回、黒幕に相応しい魔法が登場しました。

cosmic inflation『存在無き時空』

コズミック・インフレーションと読めます。

ここに書くなら、本編に振り仮名、振れよ。って感じですね。

これも調べていただければ、詳しい事が書いてますが、例によって宇宙系です。

と言うか、調べて頂けないと……ここでは表し切れませんよ^^；
なんか、すごく難しいので^^；

まあ、興味が無いの一言で切捨てるの選択のうちの一つですが^^；

要は、宇宙が出来るきっかけと、宇宙が出来上がるまでの、間の事です。

この間は、輪廻の言う、万物の法則が存在しなかったと仮説があります。

ちなみに、万物の法則とは、宇宙の法則の事です。物理法則なども、その類。

すいません、適当で>>

難しすぎて私にはこれくらいしか、わかりません>>
もしかしたら、これすら間違っているかも。です>>

まあ、話を変えて、ナンバー7の話でも^^；

Option Dice『ヴァリアブル・ローデッド』

オプション・ダイスと読みます。様はイカサマに使われるサイコロの事です。

1 / 3 3 0 5 3 0 『Heavenly Hand』

ヘブリーハンドと読みます。

これは分かった人は少ないんじゃないでしょうか？

これは麻雀役の天和の事です。

天国のような手、と言う意味です。まあ、そのままですね。

1 / 3 3 0 5 3 0 は天和の発生の確率を表しています。

この数値は、具体的に言うと、一日100回麻雀を打つても、9年に一度に発生する。と言うレベルです。

その為、実際にあがられている天和の99%はイカサマと言われています。

と言う事で、今回はこの辺で。

器械悪魔、組織と黒幕と運命と、「随意的善導」

落ち着きを取り戻した3人は、再び、自分のナンバーに合ったイスに座ると、溢れる疑問をナンバー3である炉心溶融が代表して、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者へとぶつける。

「けどよお、学園最高理事長がこの会議に参加して、何をするんだよお？」

「最近のあなた達は、だらけ過ぎよ。今も会議に参加しているのは、私を除いてたったの3人。まあ、人数に関しては、この会議が緊急に開かれた、と言うのも理由だと思うけど。それでも3人はひどいわ。後でメールで内容を伝えてる様だから、それについては厳しく説教はしないけど」

「説教しに来たのかよ!？」

「まあ、それもあるけど。一番の目的は、暇つぶしかな。……と言う訳で、会議を始めましょう。議題はなに？」

「んゝとな、最近、『墮落者』のイタズラが激しくなってるんだ。それを抑圧するのが目的なんだが、それを誰がするかが議題だ」

「じゃあ、全員でしましょう。私を含めて、ね」

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者はそう言って、腕を横に大きく振るう。その腕の通った跡に沿って、強い時空の歪みが生じる。

時空の歪みは、ブラックホールのようにただ黒く、存在しない黒い光を放っていた。その神秘的な容姿は、見る者全てに捗々しさと禍

々しさを感じさせる。

3人は未知なるものを見て、声も出せない様子。それぞれ目を見開いて、啞然としている。改めて、学園最高理事長を名乗るこの人物の、力の強大さを感じ取ったのだろう。

「主な騒ぎを起こしている『墮落者』の居所は、学園を抜け、少し歩いた所。この光放つ闇は、私達をそこまで導く悠揚とする善。さあ、行くわよ」

黒い光を放つ時空の歪みは、次第に大きく成長し、この場に居る全員を飲み込み終わると、霧のように姿を消していく。

その部屋には、すでに誰も居なかった。

器械悪魔く組織と黒幕と運命とく「随意的善導」(後書き)

『墮落者』が再び登場しますね。

前に登場した時は、断末魔様に、ボコボコにされただけですからね。けど、今度の相手は、輪廻ちゃん……結果が……もう……

さらには、数字的には断末魔様より強い炉心溶融……

だた、一方的に『墮落者』が虐められる巻になってしまつかも、です。

器械悪魔と組織と黒幕と運命と「未開の地にて」

不思議な力が働き、未開拓のままの森がある。この森は学園のすぐ傍に存在すると言うのに、人の手が加えられず、なぜか未開だった。

いったい、どんな力が働いているのかは判明していないが、その力が人体に直接悪影響を及ぼす事は無い、と言う事だけは判明されている。

それ故、この世界の住人は、この森について深く追求しようとしなかった。それがまた、この森が未開だと言う事の理由であり、原因なのだろう。

それと、この森は昼だと言うのに恐ろしく暗かった。そんな中での開拓作業は危険極まりない。それも、開拓を遠ざけてきた理由であり、原因でもあるのだろう。

「こんな所が本当に、奴らの本拠地なのかあ？」

学園を抜け、人の手がほとんど加えられていないその未開の森に、炉心溶融の音が静かに響き渡る。そう、静かに。

炉心溶融は、それなりに大きな声で叫んだつもりだが、なぜか遠くまで聞こえない。それでも、炉心溶融の近くに居る者には、必要以上に大きな声に聞こえる。

簡潔に説明すると、大きな声には違いないが、遠くまで声が届かないと言う事だ。それは単にここが森だからか、別の理由があるのかは定かではない。なににせよ、この森に存在する不思議な力が影響している可能性は低いだろう。

「彼らはこの森が未開なのを良い事に好き勝手してるわ。この森に働いてる力も都合良いわよね。開拓する事は許さないのに、住まう

事は許すのだから」

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、炉心溶融の質問に適当に答え、自分の家へ帰宅するような軽い足取りで、森の奥へと進んで行く。

無理矢理に連れて来られた3人は、迷い無く進んで行く間隙久遠と有想夢想を玩弄する者の後を、置いて行かない様に必死に付いて行く。

「そうだ、おれは、あんたをなんて呼べば良いんだ？ まだ、完全に信用した訳じゃないけどよ、悪い奴じゃ無さそうだし」

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者の事を、気に入りつつある炉心溶融は、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者の名称を聞く。

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、ほとんど接する機会の無い生徒に、予想もしていないうれしい質問をされ、内心喜びつつも、クールな表情で答える。

「何でも良いわよ」

器械悪魔、組織と黒幕と運命と、「未開の地にて」（後書き）

次回、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者に斬新な呼び名があるといいですね^^;

まあ、作者が私なので、期待はしないで下さいな。

ま、まあ、話を変えて、サブタイトルの話でも。

正直、良いタイトルが思い浮かばない……

それだけです。

器械悪魔と組織と黒幕と運命と「昔話」

「そうだ、おれは、あんたをなんて呼べば良いんだ？ まだ、完全に信用した訳じゃないけどよ、悪い奴じゃ無さそうだし」

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者の事を、気に入つつある炉心溶融は、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者の名称を聞く。

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、ほとんど接する機会の無い生徒に、予想もしていないうれしい質問をされ、内心喜びつつも、クールな表情で答える。

「何でも良いわよ」

「名前はなんていうんだ？」

「……輪廻」

「りんねアイか！ じゃあ愛ちゃんって呼ぶぜ」

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、予想を大きく覆された名称に、ただ驚くのみだった。しかし、悪くは無いかも、と内心では嬉しい間隙久遠と有想夢想を玩弄する者だった。

こうして、単調な会話が進んでいく。間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、楽しい気分になると台詞が単純になる癖があるようで、それが、どうしても会話を単調にしてしまう原因になってしまう様だ。

「愛ちゃんは何歳なんだ？」

普通の年増の女性なら、この質問をされても、あまり嬉しくは無いだろう。しかし間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、自分の年齢に誇りを持っているらしく、堂々と質問に答える。

「1900歳よ」

「1900歳!？」

「ええ、正真正銘の1900歳。この長い人生を、思い返して見ると色んな事があったわね。昔はね、魔女や魔人の文化が世界の中心で、人間である私は苦労したのよ？ 私の唯一の肉親である両親は、奴隷のように扱われる人間を解放する為、反逆のデモ行進に参加して虐殺されたわ。一人で残された私は、逆らった人間の親族として、捕虜として牢獄に閉じ込められたわ。生まれながら強い力を持つ私を、科学実験のモルモットにでも、するつもりだったらしいわね。けども、私は希望を捨てなかった。するとね、実験に使用される直前、同じ人間である一人の青年に助けて貰ったのよ。当時、人間では最高クラスの力を持つ、私の力を遥かに上回る青年がね」

「ふ〜ん……でも愛ちゃんだったら、簡単に抜け出せるんじゃないか？ さっきもワープでおれたちを運んだんだし」

「当時はね、強力な魔法は教えてくれなかったのよ。まあ、反逆を恐れた魔女たちの方策と言った所かしら。今はオリジナル魔法の基本となる魔法を学園で教わる事が出来るけど、それすらも知る事が出来なかったのよ。つまり、独学すら許されないって事ね。……って話をしているうちに、彼らの本拠地に着いたわよ」

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者が見つめる先は、無数に張られるテントだった。

器械悪魔く組織と黒幕と運命とく「昔話」(後書き)

愛ちゃんは、BBA。

と言う事で、ババアらしく昔話をさせてみました。

ほとんど明かされていない過去の話なので、貴重なお話です。

器械悪魔と組織と黒幕と運命とと「幼き墮落者」

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者が見つめる先は、無数に張られるテントだった。

この森では不思議な力が働いており、この地を開拓する事は出来ない。開拓と言う単語に基準が無いので、どこまでが開拓で、どこまでがそれ以外なのかの目安は特に無いが、この森は木で出来た小さな小屋を作る事も許さなかったらしい。

その結果、この森を居所とする『墮落者』は、満足に小屋で眠ることもできず、テントで暮らしていると言う事だ。だが、逆に捕らえれば、森はテントなら眠る事を許し、テントその物を設置する事を許したと言う事になる。

「テントが張られている……だけど、周りに誰も居ないぞ？」

「彼らの悪戯は主に、夜に行われるのよ。だから今頃、夢の中で悪戯でもしてるのでしょう」

「誰が夢中でイタズラしてるってえ？ もっぺん言ってみ？ 舌噛み切ったんでえ！」

二人の会話を聞いていた何者かが、近くの茂みからイライラしながら出てくる。『墮落者』の仲間だろうか。

しかし幼い容姿に、幼い声、さらには幼さを感じさせる八重歯まで持つ、この少女が『墮落者』の仲間だとは思えない。

「あら？ あなた『墮落者』の仲間なの？」

「『墮落者』っちゅうのは、そのテントで眠っとる、ウチの仲間を

指して言っ とんか？」

「ええ、そうね」

「……あんだ、人の気持ち考えた事あんの？ 『墮落者』 って呼ばれて喜ぶ奴なんかおると思っ とんか？」

「ふふ、面白い事を言っ わね。『墮落者』と呼ばれたく無いのなら、努力をしたらどうかしら？ 努力もしないで、人の迷惑ばかり掛けるあな達は『墮落者』に相応しくないかしら？」

「言わせとっ たら、調子乗っ て！ あんだみたいな奴、ウチが虐めたるわ！」

器械悪魔の組織と黒幕と運命と「幼き墮落者」（後書き）

さて、新キャラが登場しましたね。

幼さ100%にしたつもりですが、幼く感じますかね？

私的に、八重歯は幼さの象徴だと思うんですよ。

そして、関西弁モドキ。

関西弁と言っても、地方によって、癖が違いますからね。

この関西弁、要は私の住んでる所の、関西弁だと思って下さいな
^ ;

けど、関西弁で話す女の子って、可愛く感じへん？

器械悪魔く組織と黒幕と運命とく「制裁」

「言わせとつたら、調子乗って！ あんたみたいな奴、ウチが虐めたるわ！」

可愛らしい掛け声と共に、幼き少女が飛びついて来る。間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、飛んで来る幼き少女の手をタイミング良く掴むと、そのまま勢いを利用し、少女を空中へ投げ捨てる。

とても人に投げられたとは思えない高さまで上昇させられた少女は、なんとか空中で体制を立て直し、落下の勢いを利用して、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者に飛び蹴りを試みる。

空中でそれだけの動作をする事が出来たのだ、少女も無能ではないようだ。

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者も、その動きから、少女がただの『墮落者』では無いと予想し、改めて少女の戦闘能力を計算してみる。

そして一瞬にして答えが導き出されたのか、不敵な笑みを浮かべると、今度はすぐ前に迫った少女の足を掴み、地面に叩きつける。

少女の顔面が、地面に当たる痛々しい音が周囲に響き、炉心溶融と二人を驚かせる。

「この子は……使い魔を召還した機械天使の部品のように、魔力を持て余しているようね」

炉心溶融が、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者の呟くような台詞に反応する。

恐らく、使い魔を召還、という言葉に反応してしまったのだろう。その事を、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者に質問をしようと一歩

踏み出した時、テントの中から、数人の人が、のそのそと現れる。それを機に、次々とテントから『墮落者』が現れ、地面に倒れている少女を見ては、どんどん顔つきが悪くなっていく。

少女が地面に衝突する音を聞き、目を覚ましたのだろう。仲間同士で目を合わせては、手に持っている武器を、各々に構える。

「お前……その女に何したんや？」

『墮落者』の群れの先頭に立つ、若い男が鬼のような形相で、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者を睨み付ける。

それに対して間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、淡々とした態度で答える。

「制裁よ」

器械悪魔の組織と黒幕と運命と「制裁」（後書き）

スランプから抜け出せない……

一週間掛けて、これだけしか書けませんでした。

気分転換に違う作品でも書こうかな……

機械天使の更新は止まるけど……あ！　じゃあ機械天使の外伝でも書こう！

けど、それじゃあ、完結していない作品が機械天使系だけでも4つに……

多いな……

以上、脳内会議でした。

器械悪魔く組織と黒幕と運命とく「見落とした部品」

「お前……その女に何したんや？」

「制裁よ」

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、鬼のような形相で睨みつけてくる若い男の質問に適当に答えると、うつ伏せに倒れている幼き少女の上着を破り捨てる。

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者を除く、その場に居る全員がその行動に驚き、一歩後退するが、服を破り捨てた本人は何とも思っていないらしく、周囲の人々の視線など気にせず、露になった幼き少女の背中に浮かぶ魔法陣を凝視していた。そう、個人情報満載の個人証明の為の魔法陣だ。

この魔法陣を読み取るだけで、幼き少女の全てがわかってしまうのだ。つまり、なぜ、この幼き少女が『墮落者』のわりには強い力を持っているのかも一目でわかってしまうと言う事だ。

しかし、この魔法陣の解説は非常に難しく、並の者が解説を試みた所で、その情報を読み取る事などは不可能だろう。その為、この世界にはその魔法陣から情報を読み取る為の専用の機器が存在する。

しかし間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、並の者では無い。数多の魔法使い達の頂点に立つ者なのだ。魔法陣から黙読で情報を読み取る事など、朝飯前である。

それもただ読み取るだけではない。専用の機器よりも早々に、それも一瞬と時間に読み取ってしまうのだ。それは、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者に、個人証明の為の魔法陣を一目でも見せれば、勝機を完全に失うと言う事を意味する。

「見つけた。やっぱり、あなたは機械天使の部品だったのね」

幼き少女からの返事はない。完全に気を失っているらしく、だらしない格好でその場に倒れているのみだった。

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者は、幼き少女が反応しない事を確認すると、幼き少女と炉心溶融達の足元に、時空の歪みを発生させ、落とし穴の様に4人を歪みの中へと落とす。

そうして味方が一人も居なくなった状況を作り出すと、いかにも黒幕らしい表情が現れ、『墮落者』達に話しかけるように、魔法名を唱え、

「慈悲無き無秩序『Punishment』」

地面を踏みつける。

すると大地は割れ、土がうねりを上げ、木々が荒れ狂う。木々で休んでいた鳥達は飛び去り、悲鳴を上げるように木々がざわめき、火山の噴火のように大量の地が宙へ浮かんだのだ。『墮落者』達はその広すぎる全体攻撃を受け、なす術も無く、地に埋められ、たった一つの魔法に壊滅させられる。

器械悪魔、組織と黒幕と運命と、「見落とした部品」(後書き)

やはり無理矢理、文にすると整っていない、ヘンテコな文になってしまいました。

Punishmentには制裁と言う意味があります。まんまです
ね^^;

器械悪魔、組織と黒幕と運命と、学園最高理事長」

「『墮落者』は私が懲らしめたわ。目的は達成ね」

暗い時空の歪みの中で、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者の声が響き渡る。しかし姿が見えない。どこからともなく声が聞こえるのだ。

落とし穴のように落とされた3人は、間隙久遠と有想夢想を玩弄する者の姿を探すため、辺りを見渡している。しかし見つかるものは何も無く、ただ透き通った闇が空間を支配しているのみだった。

「目的も達成できた事だし、私は寝るわ。久しぶりに体を動かして疲れたので。あなた達も無理はしないようにね。あの小さな子はあなた達の手に負えるものじゃなかったし、これから危険なものや絶望が、あなた達を襲うかもしれないけど、決して無理しない事」

間隙久遠と有想夢想を玩弄する者がそう言い終わると、辺りに光が溢れる。

次に3人が居た場所は、例の会議室だった。その時3人は根拠は無いが確信する。

あの人は学園最高理事長だと

器械悪魔〱組織と黒幕と運命と〱「学園最高理事長」(後書き)

終わり方が少し無理矢理すぎですね^^;

魔女魔人編「悪い結果を生む反発」

「非禁禁忌!？」

那由他は驚きのあまり、思わず聞き返していた。

今でこそ断末魔を尊敬し、慕っている那由他だが、元々、那由他は非禁禁忌に憧れを持っていた。いや、今もそうだろう。

憧れといっても恋愛感情ではなく、アイドルに抱くあの気持ちとよく似ている感情だ。

そんな感情を寄せる人物が目の前に居るのだ。驚いて当然だろう。

「なんで、そんなお方がこんな所に!？」

「知らないわよ! とりあえず、ここはおとなしく退散した方が……」

葉乃愛が後退りを始めた時、非禁禁忌がこちらに向かって歩いてくる。

それに対して葉乃愛は顔を真っ青にし、那由他は少し期待を膨らませ、待っていた。

非禁禁忌は平然とした声で言う。

「……お前はあの時の……ここは危ない。今すぐ、ここから離れろ」

「そ、そうは行かないわよ。私たちだって、ここに何かあると思っ
て来てるんだから!」

葉乃愛は怯えながらも、抵抗する。本当は大人しく撤退したいのだが、相手が非禁禁忌と言うだけで、非禁禁忌の言う事に反発して

しまう。これは非禁禁忌に限っての事ではなかった。気に入らない相手には、なぜか反発してしまう。

葉乃愛はそんな自分が嫌いだった。今までその性格のせいで損をして来た。そして今回もその性格が引き金となり、望んでもいない結果を生み出してしまうのだらうと、覚悟をしてしまう。

「……Fortuna『エターナルライフ』」

突然、魔法名を口にする非禁禁忌。次の瞬間、非禁禁忌の右肩辺りに魔法陣が現れ、非禁禁忌が左手を突っ込む。そこから、大きな漆黒の剣が抜かれ、そのまま大きく腕を払う。

葉乃愛はとつさに、言う事の聞かなかった自分を攻撃するんだらうな、と心の中で覚悟する。

非禁禁忌の動きが早すぎて、振り払われる剣を避ける事など、できやしない。しかし思考だけは素早く、剣が振り払われる一瞬と言う時間の間にどんどん自己嫌悪していく。

（また私の、この性格のせいで損をする。那由他ちゃんは大丈夫かな。もしかしたら私と一緒に傷つけられてしまうかも）

もう、那由他を突き飛ばす時間も無い。魔法名を唱えている時なら、間に合ったかも知れないが、剣はすぐそこまで迫っている。あの非禁禁忌が振る剣だ、切り傷程度ではすまないだろう。

空寂な屋上に嫌気さす音が鳴り響く。

魔女魔人編「悪い結果を生む反発」（後書き）

機械天使本編、再びスタートです。この章で魔女、魔人は完結です。相変わらずスランプですが、ちょっとずつ、投稿していききたいと思います。

魔女魔人編「警告」

空寂な屋上に嫌気さす音が鳴り響く。音の発信源は、非禁禁忌の振るった剣。その剣が、人間を切り裂いた音だ。

那由他は無事だった。しかし那由他の顔からは、余裕が感じられない。それもそうだろう、人間が鋭い刃物で、切り裂かれた光景を目の当たりにしたのだから。

「あ、葉、葉乃愛さん……？」

あまりにも衝撃が大きいのか、那由他は大きな目を落ち着き無く、動かしながら思わず呟く。

それに対して葉乃愛は何も答えない。その場に力無く、ぐったりと座り込み、ただ目を瞑って硬直している。

「は、葉乃愛さん！？ 葉乃愛さん！！」

那由他が、葉乃愛の体を大きく揺さ振る。その揺れで葉乃愛の首は、大きく左右に振られる。

その時、非禁禁忌が人事のように呟く。

「……だからここは危ないと、言っただろう」

大きな揺れのせいで、動揺する人々。みな、そこに立ち止まり静かにざわめいている。

そんな中、断末魔とアンノウンは、揺れの原因を突き止めるため、

原因と思われる場所に向かっていた。

「あア？ 屋上って、こっちだったかア？」

「断末魔君って方向音痴だね。屋上はこっちだよ」

アンノウンに手を引かれ、走る断末魔。彼は走りながらも鬱陶しそうに手を振り放す。

他人から見れば、そこそこの仲の良いカップルに見えなくも無い為、周囲の人々に、こんな状況で、なんて歡樂的なんだと冷たい目で見られつつあった。

そんな二人の前に、立ち塞がる様に現れる人物。

「そんなに急いでどこに行くんだい？ まあ、興味はねえけど」

空間の歪みと思われる隙間から、姿を現すナンバー1。

あまりに突然、現れたので、立ち止まってしまう二人。

「オメエには関係ねえだろ！ よくもノコノコと俺の前に姿ア現したなア。ぶっ殺すぞ」

「まあまあ、そんな怒るなって。俺だってお前にした事は反省してるんだぜ？ だから、今もこうして罪を償おうと、お前の前に現れてやったんじゃないか。なあ？ だから、まあ聞け」

「私たち急いでるんだよ？ そんな風に見えなかった？ だから、言いたい事があるなら早く！」

「じゃあ簡潔に言っぞ？ お前たち、屋上に向かってんだろ。やめときな。屋上には非禁禁忌が居るぞ」

ナンバー1を含めた3人に沈黙が生まれる。その時、再び校舎が大きく揺らめく。

魔女魔人編「警告」(後書き)

更新ペースがありえないほど、遅くなりましたね。^^;
しかし、最近スランプから抜け始めたかも……です。

魔女魔人編「消える者、現れる者」

「……だからここは危ないと、言っただろっ」

「は、葉乃愛さん！ 目を覚ましてください！ 敵が迫っていますよ！」

葉乃愛は那由他に頬を強く叩れ、自分が斬られたと言う、妄想から目が覚める。

葉乃愛が慌てて状況を確認すると、非禁禁忌の鋭き剣に二つにされる何者かが、驚いた顔付きで倒れて行く場面だった。

どうやら非禁禁忌は剣を出現させ、大きく振るい、そのまま背後に迫っていた人物を切り刻んだようだ。

「あれは……何者！？」

とつさに叫ぶ葉乃愛。

非禁禁忌に刻まれた人物は、外見から若い女性に見える。黒と赤と白を基調としたフリル満点のゴスロリ服。それに、短いスカートから大きく露出された、太ももに彫られた髑髏のタトゥーが特徴的で、同じく大きく露出された上半身の腕や首には、黒やピンクのテープの様なりボンが結ばれていた。

そしてその人物は非禁禁忌の剣により、体を二つに分裂されられても、なお、大きく鋭い目で非禁禁忌を睨みつけ、倒れながら言う。

「愚かしく忌々しい魔法使い……あなたは禁忌され続け、孤独の世界に堕ちて行くだろっ。これで私が死ぬとも思っな。私の名は

」

若い女性は、名を告げる前に消滅する。地面に触れると同時に、霧のように消え去って行ったのだ。

その様子を確認した非禁禁忌は、もう安全だと判断し、対象を葉乃愛と那由他に変更する。もちろん、戦闘相手としての対象ではなく、話の相手としてだろう。

「……お前達はここで何をしている？ 目的はなんだ？ 第一、お前達だけで俺の付近に訪れるのは不可能のはず。誰の手引きを受けた？」

「わ、私の目的は揺れの原因を探る事。だけど、手引きって何の話？」

話している相手が相手の為、動揺を隠せない葉乃愛。その横で那由他は、見知らぬ人物の攻撃から助けて貰った上（と那由他は考えている）初めて見る非禁禁忌に、胸をときめかせ、目をキラキラと輝かし尊敬の視線を非禁禁忌に送っていた。

葉乃愛はその目が、そこはかとなく気に入らなく、腹が立っていた。

その時、屋上へと続くもう一つの扉が大きく開け放たれ、那由他や葉乃愛が良く知る人物が登場する。

魔女魔人編「消える者、現れる者」(後書き)

次回、あのキャラに異変が!?

みたいな次回予告って王道ですよ〜

魔女魔人編「甦り死『断末魔』」

いきなり屋上へと続く扉が大きく開け放たれ、那由他や葉乃愛が良く知る人物が登場する。

その人物は辺りを見渡すと、すぐに非禁禁忌達を見つけ、凶悪な目で睨み付ける。そう、断末魔だ。

断末魔の、その目、態度、雰囲気からは異常なほどに、極悪で不吉なものを感じさせる。周囲の人に戦慄を覚えさせる断末魔に、その場に居る誰もが感じ取った。いつもの断末魔では無いと。

断末魔は『断末魔』と言う異名を持ちながらも、人懐こい部下の影響で、最近短期間で性格が随分と丸くなった。それが非禁禁忌との再会と言っきっかけで、一瞬にして崩れ、元の残酷で凶悪な断末魔に戻ってしまったのだ。

「久しぶりだなア？ 今は確か……非禁禁忌と言う名だったかア？」

断末魔は非禁禁忌に対して、礼儀正しく無い挨拶をする。
それに対して非禁禁忌は仕方無いと言った感じに対処する。

「……お前は……あの時の『墮落者』か」

「オイオイ、誰に向かって口聞いてンだア？ 『裏切り者』。今のお前に俺を『墮落者』呼ばわりする権利があると思つてンのかア？ それにここに何しに来たンだア……？ ここはお前の居るべき所じゃねエよ。殺すぞ、ゴミクズ」

「……俺の目的は魔女狩りだ。これだけ言つて分からないのなら、知る必要は無い」

「黙レ……！ 殺ス！」

断末魔が予備動作もなく、駆け出す。その速度は瞬間移動に近いが、それ程にも速くない程度。なんにせよ、ナンバー1との戦闘の時点ではありえない速度だ。那由他にも言ったとおり、断末魔はナンバー1なんかに本気を出していなかったのだろう。

「墮天サセテヤンヨオオオオ！！ 死ヲ賭セヨオオ！！！」

非禁禁忌と断末魔との距離は十数m。その距離を刹那と言う間に縮め、掛け声と共に非禁禁忌の腹部を蹴り飛ばし、屋上から突き落とす。

あまりにも早すぎる速度のせいか、飛ばされた非禁禁忌の隣に居た那由他と葉乃愛が、断末魔を遅れて目で追う。

「だ、断末魔様……？」

断末魔の変わり様に、驚きと恐怖が隠せないのか、声も満足に出せない那由他。

そんなかすれた小さな声を、断末魔は聞き逃す事無く、しっかりと捕らえ、那由他をさらに恐怖させる凶悪な目で睨み付ける。

「ナンダア？ クソガキ。気安ク俺ノ名ヲ、クチニ、シテンジャネエゾオ？！ 殺スゼエ？」

魔女魔人編「甦り死」断末魔」（後書き）

断末魔様の台詞の、変なカタカナは、これの伏線だと気付いて貰えたか心配なので、あとがきで補足してみる。

これぞ、断末魔らしい姿なんじゃないかなーと思います。
もういっその事、一生このままで居て貰おうかなー

魔女魔人編「因縁尽いた出会い」

「ナンダア？ クソガキ。気安ク俺ノ名ヲ、クチニ、シテンジャネエゾオ？！ 殺スゼエ？」

そう言つて、那由他の^{こめかみ}蟀谷を片手で掴み、持ち上げる。

那由他はあまりの恐怖に、声にならない叫びを上げ、断末魔の手を必死に握る。頭蓋骨が割れるような強烈な痛みもあり、何の思考も出来ない。那由他はその回らない思考の中、断末魔が『断末魔』と呼ばれる理由を自分の体で体感する事になってしまった。

その後ろで、恐怖のあまり、涙を流す葉乃愛が那由他を助けようと、破れかぶれになり、ヒステリック気味に抗議する。

「あ、あんた、何やってのよ！！ や、止めなさいよ！！ あ、ア
ンノウンはどうしたのよ！！ あんたと一緒に居たじゃない！！」

断末魔は片手で掴んでいた那由他を地面に叩き付ける様に放り捨て、今度は葉乃愛の腹部を押し、奥の壁に叩き付ける。ドシンツ……と、人の体から鳴ったとは思われない、重く深い音が鳴り響き、再び校舎全体を大きく揺らす。

その衝撃で壁にひびが入り、葉乃愛の体と地面に、壁の破片が落ちてくる。

葉乃愛の体から力が抜け、ぐったりと手足が垂れる。

「力無キ者ハ哀レダナア……！！ ギヤハ！ アギヤハハア……！！
ヤッパリ一寸ノ虫ニハ所詮、一寸ノ魂シカ宿ラネエナ！ オイ、ナ
ントカ言ツタラ、ドウダア？！ オイ、聞イテンノカア？！ ゴミ
ヨオ……！！」

断末魔は、魂が抜けたかのように力無い葉乃愛を、そのまま地面に捻じ伏せ、小さな体を何度も蹴り潰す。

そのたびに校舎が揺れ、地面にひびが入り、くもの巣のようにひびを拡大していく。

「もう……！ やめて！ 断末魔様！ お願いします！」

辛うじて意識が残っていた那由他は、何度も蹴り潰される葉乃愛を助けようと、倒れたまま止めに入る。

その声を聞き、断末魔の動きが、ピタツと停止し、しばらく静止する。

「断末魔様……？」

自分の声が届き、断末魔の理性を取り戻せたのかと、安堵する那由他。しかしそれは間違いだった。今の断末魔に、那由他の声が届くはずも無かったのだ。そう、『那由他』の音が届くはずも無かったのだ。

断末魔は、首だけを那由他に向けると、那由他をギロギロと睨みつける。

「ひっ！」

その恐怖に那由他は、大粒の涙をボロボロと滝の様に流し、硬直してしまう。

「オイ……。ドコノ、ドナタカ、存ジ上ゲマセンガ、気安ク俺ノ名ヲ、クチニスルナ、ツテ言ワナカツタカア？！ アア！？ 何様ノツモリダア？！ オイ、クソガキイ！！」

断末魔が、逃げる力も失い倒れたままの那由他に、じりじりと近づいて行く。

その遅い一步一步が、那由他を恐怖と絶望の渦の中心へと、引きずりこんで行き、那由他の顔から血の気を引かせていく。

そんな中、その様子を見るに見かねた非禁禁忌が現れる。

「……それくらいにしたらどうだ？ 断末魔。もう、周囲の人に迷惑をかけるな」

魔女魔人編「因縁尽いた出会い」（後書き）

主人公同士の大切な戦いなのに、私はスランプですorz

魔女魔人編「断末魔の具現化」

「……それくらいにしたらどうだ？ 断末魔。もう、周囲の人に迷惑をかけるな」

「周囲ノ人ニ迷惑ヲカケンナア？ 『裏切り者』ガ、ホザイテンジヤネエゾ？」

「……お前に蹴り飛ばされた時、そのままこの場を去ろうと考えたが、お前をこのまま放置する事は出来ない。これ以上、罪無き3人を見過ごす事はできない。Magus 『ルクステウム』」

「ギャハツ！ ギャハハハハハハ！！ Re：Union『再結合』オオオオ！！！」

断末魔の足元に、黒い門の魔法陣が現れる。断末魔はそこに腕を突っ込み、門をこじ開け、中で何かを探す動作をする。

「コレハナア……断末魔ア……ソオウ、俺ヲ具現化シタ様ナ存在ダア。アヒヤ、ヒウヒヤハハハ！！ 幾久しい断末魔トナツテ、シネ！」

断末魔はそう言つて、腕を一気に引き抜く。足元の黒い門は消え、後に残されたものは、断末魔の手に握られる大きな鎌だった。

断末魔の等身ほどある、大きな刃に大きな柄。その柄には色取り取りの宝石が埋め込まれていて、何重もの鎖とその鎖に繋がれた懐中時計が巻きついていて。刃は先は白い稲妻に覆われおり、異様な禍々しさを放っている。

それに対して非禁禁忌は、平然と地に立っているだけだった。魔

法名を唱えたにも関わらず、何も起きない。断末魔は、そんな事はお構い無しに駆け出す。瞬間移動に近いが、それ以下の速度で。

その移動により発生した風が、葉乃愛と那由他の衣服を揺れ動かし、周囲の誇りや塵が扇状に吹き飛ばし、倒れながらも二人の戦いを観戦する那由他の目を痛める。

そして断末魔は、瞬く間に距離を縮め、完璧に近いタイミングで斬りかかる。しかし非禁禁忌は何もしない。ただ、断末魔を強く睨み、その場に立つのみ。

そのまま断末魔の鋭き鎌が、非禁禁忌を綺麗に切り裂……… かなかった。と言うのも、鎌と非禁禁忌の直線状に、天使の翼の形をした光溢れる大剣が、忽然と現れたのだ。

大剣は独りでに動き、鎌を弾き、断末魔を大きく吹き飛ばす。大剣は勢いを殺す事無く、そのまま激しく回転し、天使の羽を周囲に撒き散らしながら、非禁禁忌の手元へと帰って行く。

魔女魔人編「断末魔の具現化」(後書き)

非禁禁忌の性格が最初の方と比べて、かなり変わってきたような気がする。

まあ、いいかb

魔女魔人編「司る者の支配権」

「オモシレエ……ソウシテ生長ラエルカラコソノ、断末魔ダア……
アア?! ソウダロオ?!」

断末魔は鎌を激しく回転させながら、非禁禁忌に向かって投げる。それだけで、強烈な風が生まれ、コンクリートで出来た周囲の建物を傷つける。さらにその被害は建物だけでなく、近くに倒れている葉乃愛と那由他までもに及ぼうとしていた。

だが、非禁禁忌がその二人を見捨てるはずが無かった。

その証拠に、非禁禁忌は二人を風の刃から守るため、天使の大剣を投げ、二人の前に設置したのだ。

しかし、それでは非禁禁忌の身が危ない。あの非禁禁忌だ、風の刃で傷つく事は無いだろうが、本体の鎌を食らっては無傷ではない。

その事を一番良く知る非禁禁忌は、空高く舞い上がる。

「……武器の魔術師、そう呼ばれた時代が俺にもあったと言う事を教えてやろう」

非禁禁忌は一言呟くと、そのままムーンサルトの様に体を激しくひねらせ、回転しながら、断末魔の目の前に降り立つ。

それでも、また一言。

「……即ち、いかなる武器でも、全ては俺の支配下にあると言う事だ」

その瞬間、断末魔の鎌が綺麗に断片化される。それはまるで発光するガラスのように、周囲へ破片を撒き散らしていく。やがてそれ

は、空気以外に物質に触れると、雪のように静かに消えていく。

「……残念だが、お別れだ」

非禁禁忌がそう呟いた途端、断末魔の体から力が抜け、その場へ倒れこむ。

断末魔の背には、非禁禁忌の天使の大剣が、刺さっていた。

魔女魔人編「司る者の支配権」(後書き)

あけましておめでとうございます。

相変わらずの進行スピードですが、なんとか決着までは書く事ができました^^；

魔女魔人編「傍観者の会話」

「おい、これは、どう言う事だ？　ここ最近、色んな事が同時に起き過ぎじゃないか？」

ねはんじゃくじょうアーカーシヤ

涅槃寂静 Akasha……即ち、学園のナンバー1は、独り言をこぼしながら、断末魔とその部下達が少数の救急員に運ばれていく所を、空間の歪みから眺めていた。

そしてその独り言は、何者かに聞えているらしく、ナンバー1が居る空間の歪みに返事が返ってくる。

「非禁禁忌の各所徘徊行為、それを阻害する者への容赦無い攻撃、それから魔人復活の噂ね。あなたも、解っていると思うけど、これらの事件は全て相關しているわよ。つまり、全ては一つの異変なのよ。……それにしても非禁禁忌も非禁禁忌よね。世間に『裏切り者』と呼ばれる事を承知に、この事件に首を突っ込むのだから。呆れたわよ。……まあ、この事件は私が解決するから、あなたは何も考えなくて良いわよ。……そんな事より、あなたに依頼しておいた真の『裏切り者』の排除は完了したかしら？」

「ああ、もちろんだ。崩壊したビルに埋まつまっている衰弱した老人の排除など、何の苦にもなりやしねえよ」

「そう。だったら、次はもっと危険な依頼でもしようかしら。例えば……非禁禁忌の束縛とかどうかしら？　丁度、この任務の請負人が、失敗した所なのよね」

「悪いが、その依頼はパスさせて貰う。死にたくは無いんでね」

「そう、残念だわ。とりあえず、あなたには断末魔の相手をして貰いたいわね。断末魔如きと戯れるくらいは出来るでしょ？ 彼には強くなって貰う必要があるの。よろしくね」

ナンバー１と会話していた何者かは、ナンバー１に依頼を押し付け、この場を後にする。

残されたナンバー１は、あまりにも強引に仕事を請け負わされた事に対して溜息をついた後、空間の歪みへと完全に姿を隠した。

魔女魔人編「傍観者の会話」(後書き)

この作品の投稿はかな〜り、久しぶりです……

失踪はしておりません、書き溜めをしておりました^^;

私気付いたんですよ、書き溜めしてる方が余裕があつて、広々と自由に作品を書ける事に。

と言うわけで、舞い戻るにはもう少し時間が掛かりそうです^^; しかし、その間、更新ゼロと言うのも悲しいので、こうして投稿させてもらいます。

あ、小説書くの飽きた訳ではないですよ？ むしろ逆です>< 良い作品が書きたくて戸惑い、躊躇したり、と言った感じです><

風呂敷を広げ過ぎて收拾が付かないとか、言えないTT
え、何のつて？ 気にしないで下さい><

まあ、したい事はたくさんあつて、私の脳内ではキャラクター達が大活躍しています。魔人魔女編が終わり、次の作品が始まり、そして終わり、さらに次の作品が始まったりしています。

なんていうか、上手に文字に出来ないって感じ……かな？

まあ、失踪はしてませんし、しません!! ので><
ではでは。次の作品でお会いしましょう><

いつになるのやら……

魔女魔人編「とある病院にて」

あらゆる自然災害からの干渉を拒否する為に、人の足のみでは辿り着けそうにも無い場所に大きな病院が建っている。

そんな辺境の場で、断末魔と那由他と葉乃愛の3人が、治療を受けていた。

本来ならば、貴族しか治療を受ける事が許されない、豪華で近未来的な集中治療室で、液体に浸されたカプセルに投入されているのだ。

葉乃愛だけは、貴族なので、この部屋で治療を受ける事は不思議ではないのだが、断末魔と那由他は貴族ではない。

本来、貴族ではない者の立ち入りすら禁止しているこの部屋で、一般人が治療を受ける事など前例が無いほどの特例で、これだけで複雑な事情が絡んでいる、と言う事がうかがえる。

そして、その部屋に断末魔と同じく、貴族ではない別の一般人の声が響き渡る。

「病み上がりの所、わりいんだが、おれと付き合ってくれや」

空間の歪みから姿を現したナンバー1は、断末魔が投入されているカプセルを破壊しようと、手を向ける。

しかし、いきなり断末魔の目が開き、拳をそのまま前にやりカプセルを自ら破壊する。

「言葉に甘えてお付き合い願おうかア?!」

そして勢いを残したまま、ナンバー1へと殴りかかる。意表を突かれたナンバー1は、成す術無く地面に飛ばされていく。

だが、ナンバー1も無能ではない。と言うのも、そのダメージを

最小限に抑える為、地面と衝突する寸前に空間を歪めたのだ。その結果、ナンバー1の体は地面へと消えて行き、姿を空間へ完全に隠していく。

「ああ……悪い夢でも見ていたかのようなア……そんな気分わりイ中、気色悪い男に告白されちまってエ……」

断末魔は頭を片手で抱え、首を横に振る。

そして余った片手を、人の首を握るように手を前に伸ばす。そこに都合良く現れるナンバー1。

「今の俺は機嫌が悪い。気の毒だが本気で殺すぜエ？」

下に向けていた顔をゆつくりとナンバー1へ向ける断末魔。その態度は、発狂したときとはまた違った狂気を帯びていた。

次の瞬間、ナンバー1の体は空高く宙に浮いていた。それも体を大きく、くの字に曲げて。

断末魔はさらに追い討ちを掛けようと、跳ね上がり意気揚々と拳を握る。

しかし、ナンバー1の体が再び空間の歪みへと消えていく。

魔女魔人編「とある病院にて」(後書き)

前回、言い忘れていましたが、この巻付近は、スランプ真っ盛りでした。

内容的にも、文体的にも酷いものになっております^^；
ご了承ください。

魔女魔人編「決意の確認」

「病院では静かにするのが常識だ。今は引いてやるから、大人しくしてろ」

ナンバー１の姿が完全に消える。どうやら本当にこの場を去ったようだ。それを境目に断末魔から狂気が抜けていく。今の断末魔に残されたものは、脱力感だった。

断末魔は力の抜けた無表情の顔を那由他と葉乃愛に向ける。

「ああ……こいつらは俺がしちまったんだ……恩を仇で返すってのはこう言う事を言うのかア……」

傷付いた体をカプセルの培養液に預ける那由他と葉乃愛。日常では見る事も無いその残酷な姿に断末魔は心を痛める。『断末魔』らしくないその感情に、断末魔自身も驚きを隠せないようだ。

「俺にも良心つてのが、あつたのか？ 俺にこんな感情があつて良いのか？ そもそも俺はこんな善人と日常を過ごして良かったのか？ 俺は何の為にここまで努力してきた？ 『墮落者』を救う為？ 善人を傷付ける俺に、そんな事を夢見る権利があるのか？ 俺はどうしたら良い？ 教えてくれよ、非禁禁忌。俺の――」

「……今のお前に出来る事は、この二人の傍に居てやる事だ。結ばれた絆を壊したのはお前だ。再び繋ぎ止めるには苦勞と時間が付き纏うだろう。お前がする事は、その苦勞を乗り越え、二人に日常を戻してやる事だ。今の未熟なお前に、それ以上を成し遂げる事は不可能だ。理解したのならば、再び眠りにつくが良い」

「やっぱり居やがったかア……ナンバー１の野郎がやけにあつさり去って行ったのも納得がいく。……これからお前はどうすんだア？『裏切り者』と呼ばれても、成さなければならぬ目的があんのかア？」

「……守らなければならないその為に……俺は行動する。それだけだ」

魔女魔人編「決意の確認」（後書き）

なぜ、お前がここにいる！！ 非禁禁忌！！

彼は、どこにでも現れます。彼の有してる能力はそれほどまで強力なんです。

断末魔と対になっている人物でもあるからかな？

まあ、非禁禁忌は優しいお方です。だからここにいたんですよ。たぶん……

非禁禁忌の接近に感付いたナンバー１は流石ってことですね。

まあ、ナンバー１以前に断末魔ですら予想できてたみたいですけど
^^^ ;

魔女魔人編「裏方では……」

以前、断末魔が救急員に運ばれていく場面を眺めながら、ナンバ―1と空間の歪み内部で話をしていた者の声がする。

「世界を闇に陥れるそれは、学園の深い深い底に眠っているの。その事実が気付くまで、どれ程の時間が必要か、解る？」

黒いドレスに身を包み、黒い傘を手に持つ漆黒の少女は、学園の深い深い地下で誰かに問い掛ける。

しかし返ってきたのは、何重にもなって反射されてくる少女の声のみ。

だが周囲はかなり薄暗く、その音でさえ頼りになる程だった。

「嘗て、人を恐怖の底に陥れた知能と才能に溢れる魔人、とはとても思えないような惨めで無様な行動ね。……『永久機関 Per fect E t e r n a l A n E n g i n e』、そこに居るのはわかつているわ。そしてあなたの目的もね」

「ああ、見つかっちゃったか。まあ、それはいいが……元々モルモットだった女が、なぜ偉そうなんだ？ それに無様なのはお前だろう？ なんでも知ったかでもしたら、相手がビビるとでも思っているのか？ ったく、目が覚めて最初に話した相手がモルモットだったなんて、世界一不幸だわ、俺」

相手の姿はお互いに見えない。しかし互いに強烈な魔力を体から放っているからか、二人とも居場所をはっきりと掴んでいた。それ故に、少女は何も見えない闇の中で、一点を睥睨^{へいげい}していた。

「あの老人が具体的に何を起こしたかは、把握して無いわ。だって、学園外で起きた事だもの。でもね、それが原因であなたが蘇ったって事はわかってるのよ？ 間違っではないわよね」

「……はあ、それでどうすんだ？ 結局戦うんだろ？ いくぜ？」

永久機関と呼ばれた男は、姿を隠すのに利用していた岩を蹴り飛ばす。とても人力とは思えない速度で飛ばされた岩は、風を切りながら一直線に少女へと向かい、激突する。

しかし紙くずのように散っていったのは、少女ではなく、岩の方だった。それどころか岩は少女と接触する前に、何か見えない壁にぶつかったかのように、何も無いところで爆発したのだ。

そしてそれと同時に散乱する岩以外の断片。その断片は、目に見えて岩の断片とは大きく違っていた。

「魔力の断片か……魔力を魔法に利用せず、直接防御に使うなんて大胆な技、いつから覚えやがったんだ、クソガキ。魔力の消費が大きくて、カッコイイ技を見せ付けたかったのか？ それとよお、お前は何の為に、俺の邪魔をするんだ？ 俺みたいな魔人の生き残りが、再び世界を征服できるとでも思ってるのか？」

「理由なんて、特に無いわ。私は世界を見守る大魔法使いの一人なの。だから蘇った魔人の排除は、大魔法使いである私の義務……と言った所かしら。それにあなたの目的は世界征服では無いのでしょう？ そう、もっと簡単な事。人間の抹殺よね？ 私情を挟むとすれば、私の大切な人がそれを望んでないみたいだし、私は、私の出来る事をしてるまでよ」

魔女魔人編「裏方では……」(後書き)

謎の人物が動き出した!?

けど、この人、もう忘れられているかもしれませんね^^;

それにしても、忙しいー><

就職活動、略して就活。嫌な響きだ……

魔女魔人編「おぞましい何か」

右手首から手の甲周辺を包帯で隠している青年は、闇がひたすら続く長い廊下を歩いていた。青年の着ている服は黒が基調の為、それが保護色となり、この場所に無駄に良く馴染んでいる。

当然だが、青年はこの廊下がどこに向かっていているのか分かっているらしく、常闇だと言うのに、その歩みからは不安や恐怖といったものは一切感じさせない。それどころか、馴れによる余裕までもを感じさせる。この場所は青年にとって、安堵を与えてくれる場所なのだろう。

それから幾分歩いた先に、青年はステンドグラスで出来た大きな扉に直面した。そのステンドグラスを良く見ると、女の人が着物や花で綺麗に彩られている。そして、その大きな大きなステンドグラスの扉の先からは微かな光が漏れており、青年を優しく包み込んでいた。

「……あいつはこの世界を我が子のように愛してるみたいだ。けどそれは俺も同じ事。だったら、俺は、俺の出来る事をするまでだ」

青年は目を瞑り大きく頷く。自らを納得させたのだろう。そして、急に険しい顔付きに変化したかと思えば、目の前の扉に手を触れだした。

それと同時に扉全体を覆うような大きな魔法陣が現れ、地響きのような、また雷のような、けたたましい音が鳴り響き、大きな扉が開放される。

青年は、扉の先を紅い目で凝視しながら再び歩みを再開する……が、さっきまでとは違いその時の青年の顔には余裕は無かった。非禁禁忌と称される彼に、険しい顔をさせるようなおぞましい何かが、この先にはあるのだろう……

魔女魔人編「おぞましい何か」(後書き)

目の前の扉に手を触れだした……って、変じゃないですか？
まあ、いいや。

魔女魔人編「魔人の最終セキュリティー」

非禁禁忌と称される青年が越えた扉の先には、見事なまでに美しい景色が広がっていた。

暗闇の世界にたった一筋の道があり、その先には大きな教会が存在している。その様子は、まるで教会へと導いているかのようにだった。

また、教会の周りはある程度スペースがあり、特に教会の前は広場のように地面が広がっていた。

しかし、本当に凄いのはこれからだ。と言うのも、その道も広場も教会も全て、非禁禁忌が通った扉同様に、ステンドグラスで構成されていたのだ。

「もう、終わりにしよう。C i d e『ジエノサイド』」

左手首から手の甲周辺を包帯で隠している青年は、徐にそう呟おもむろいた。それと同時に、青年の周囲に無数の紅い魔法陣が現れ徘徊を開始する。

今、青年が居るこの奇妙な場所は、魔人の最終セキュリティーと呼ばれる文化遺産の一つである。もちろん、魔人が作り出し、残したものだ。

本来、この場所には誰も訪れる事は無い。いや、訪れる事などできない。なぜなら、ここは危険な場所であるが為、力持つ者によって固く閉ざされているからだ。

何が危険かと言うと、ここでは、異常なほど魔力が安定しないのだ。だからと言って、魔力が無造作に増えたり減ったりするわけではない。具体的には、恐怖や緊張状態に本来の力を発揮する事が出

来なくなる事があるだろう。その時に良く似た症状が現れるのだ。それも極端に。つまりどういう事か、魔力が安定しなければ、当然満足に魔法を放つ事もできない。それどころか、身体能力、気分、意思などにも悪影響を及ぼす。

その脅威の効力からここは魔人の最終セキュリティと名付けられたのだろう。

しかし、固く閉ざされた理由はそれだけでなかった。

「……面白い展開だ」

この場所は、ただでさえ魔力が安定しないと言うのに、訪れた者の力に見合った試練を与えてくるのだ。

魔女魔人編「魔人の最終セキュリティー」(後書き)

ギリギリ保存用メモリーに残っていた話。

と、いつでも無茶苦茶な下書きが残っているだけだったけど^^;

なんかもう、内容も文章もむちゃくちゃです。

一度、書いたことがある話ですので、「あれ？　ここの説明とかしたっけ？」みたいな状況になるんです……

挙句の果て、前のほうが良かったな……みたいな結果に……

改善の余地はないか、長い時間悩みましたが、変にいとすると矛盾な
どが発生したりするのが怖いので、結局大した事はできていません
;

説明とかほんとグダグダですんません……

自分で読んで、理解しがたいです……

ちゃんと伝わったでしょうか……

これから定期的に更新できればな、と思っております。

はい、と言うことで、今回は新たな文化遺産ができました。

色々と、意味のわからない小説ですね、はい。

魔女魔人編「非禁禁忌に見合った試練」

魔力が安定しない上に、訪れた者の力に見合った試練を与えてくると言う、魔人の最終セキュリティ。訪れた者の力に見合った試練を与えてくると言うのは、『万全の状態』での実力の事だ。

そんな危険なこの場所に非禁禁忌は居た。

あの非禁禁忌だ。ここがどういう場所だか、知らないわけではない。だが、彼にはここに来なければならない理由があった。

「……俺には成し遂げなければならない事がある」

左手首から手の甲周辺を包帯で隠している青年は、魔法名を呟き周囲に浮く紅半透明の武器に触れる。

その瞬間、さっきまで半透明だった武器は色を得、その実態を明らかにする……が、その様子が、今までとは大きく違っていた。

と言うのも色を得た武器は、周囲の景色と気味が悪いくらいに同化していた。

具体的にはその武器までもが、あろう事かステンドグラスで出来ていたのだ。

「……面白い展開だ」

さらには武器を手についた青年までもが、ステンドグラスへと変化していつてしまう。右手の指から徐々に、手首へ、腕へ、胸へ、さらには顔へと侵食して行く。しかし、青年に苦しそうな表情など一切無かった。

「……C i d e『ジエノサイド』」

それに対して非禁禁忌は、自分がステンドグラスに侵食されていく光景を目の辺りにしながら先程、呟かれたばかりの魔法名を呟き返していた。そう、自分に良く似たステンドグラスと戦う為に。

「……もう終わりにしよう」

ステンドグラスで出来た道を、二人は同時に走り出す。ステンドグラスの道の下には、恐らく何もないだろう。なぜなら、ステンドグラスの下は底無き闇が空間を支配しているだけだからだ。落ちたらどうなるかは、わからない。もしかしたら、底の無い空間を永遠に落とされるだけかも知れない。それだけならまだ良い、最悪、落ちた瞬間、その存在を消去されるかも知れない。そんな危険な場所を非禁禁忌は全速力で駆けていく。

この先にある、世界の平和に繋がる何かの為に。

魔女魔人編「非禁禁忌に見合った試練」(後書き)

「……俺には成し遂げなければならない事がある」

入れるか入れないか悩みました。
入れました。

魔女魔人編「己との戦い」

非禁禁忌は走りながら、すぐ傍で浮いている半透明の剣を手にする。その瞬間、剣は色を得、その実態を明らかにする。それに合わせるかのように、ステンドグラスだけで存在する青年も、武器を握っていないもう片方の手に武器を取る。

そして衝突。

半透明の武器達は、次々に色を得、その実態を明らかにしては、意思を持ったかのように相手に襲い掛かる。互いを狙う武器を互いの武器が防ぎ、魔力を散らす。

その武器達の激戦の中で、さらに激しい戦いを展開させる青年が二人居た。

時には殴り、時には武器を取り戦う。横になぎ払いが来れば、しやがんで回避し、縦に剣を振られれば、身をそらし回避する。時には剣を剣で受け止め、投げては遠距離攻撃に利用したりもする。

しかし、さすがは非禁禁忌と称されるだけはあるのか、互角の戦いの中にわずかに差が生まれ始める。

それを良く思わないステンドグラスの青年は、大きく飛び跳ね教会の上へと回避する。押され始めたと言えど、差はわずか、距離を置く位の余裕はあるのだろう。さらに、その余裕を見せ付けるかのように、非禁禁忌に語りかける。

「面白い展開だ。俺は戦いを拒む事はしないし、特に推薦もしない。だが、自分の行動には責任を取ってもらう。非禁禁忌……ここに足を踏み入れた罪、しっかりと償って貰おう。そして、罪から逃れようと足掻くのならば、無条件で終わりにさせて貰おう」

「……プログラム通りにしか行動できないお前に、裁きを下す権利など無い。応用力を手に入れてから嘯^{うそぶ}け」

次に瞬間、非禁禁忌は青年の背後に立っていた。青年が、慌てて背後を確認した時には、非禁禁忌の強烈な蹴りが青年を吹き飛ばしていた。

あまりの勢いに身動きが取れない青年、そのままステンドグラスの教会を貫通し、周囲に大量のガラスが割れるけたたましい音を鳴り響かせながら、次々に破壊していく。

そこに追い打ちかけるべく、力強く飛翔する非禁禁忌。目標である青年に向かって一直線に高速移動する。

魔女魔人編「己との戦い」(後書き)

ふむ、ここはわりと綺麗にかれたのではないだろうか。

ここも、アクシデント中の話だから、どこで矛盾が発生する事が……

それにしても非禁禁忌かつこいいね。

はい親ばかりです。

魔女魔人編「無機質な悲鳴」

青年は結局、体勢を立て直せずに空中で足掻いていた。そんな最中、高速で接近してくる非禁禁忌が居る。それをどう対処するべきか、青年は必死に思考を張り巡らせた。

そして、そこに一つの作戦が思い浮かばれる。

「Magus『ルクスデウム』」

辺りに静かに響く魔法名。非禁禁忌はそれを聞き逃さなかった。

「……その魔法を使うのか。それは光を武器とする魔法、お前に操作できるのか？　Universitas『エテルナヴァリタス』」

青年の両手に、天使の羽がデザインされた純白の槍が握られる。

その槍は、逆に青年を操作しているかのように軽やかに演舞すると、青年の体制が理想の形へ整っていく。そして準備が整った青年は、右手に持っている槍を非禁禁忌に向かって、投げ放つ。

さすがは非禁禁忌の魔法と言ったところか、辺りの光を壮絶に捻じ曲げながら直進する槍。

非禁禁忌は、己の前でただ手を広げるのみだった。

そして、衝突する。それにより発生した光と闇の閃光が、辺りを激しく照らし、槍は今まさに非禁禁忌を貫通しようと直進し続けるが、見えない何かに遮られているのか、その場で静止している。

「この時を待っていた。要は、お前の動きを止めれば良いのだ。さあ、終わりにしてやる」

青年は、非禁禁忌の背後へ光の速度で瞬間移動し、そして、もう

片方の槍を非禁禁忌に向かって放とうとする。

だが青年の前には、既に槍が迫っていた。

ガラスが碎ける音と共に、青年の額を高速で貫通していく槍。右手を額に当て、落下しながら、もがき苦しみ断末魔をあげる青年。そしてそれを空中で眺める非禁禁忌。

青年は、青年自らが放った槍に、自らを崩壊させたのだ。

「……残念だが、俺の魔法は、俺以外には扱えない」

青年が地面と衝突し、その姿はガラスの断片へと変貌する。
やがて青年の断末魔は、静かに消えていく。

魔女魔人編「無機質な悲鳴」（後書き）

本当は、「無機質な断末魔」にしたかったのですが、しませんでした。

あと、槍のあたり理解できたでしょうか？

私は、何回か読み直して理解できました。

作者なのに…… ^^ ; 作者なのに…… ; ; ;

それにしても、最近良くしゃべりますね。非禁禁忌さん。
キャラが崩れますよ？

魔女魔人編「短気な少女」

「非禁禁忌……とうとう、この地に足を踏み入れたのね。それは、人間を捨て魔人を選んだと言う事を意味する」

辺りに大量のガラスの断片が散乱する道を、歩いてくる少女。周囲は無音で、散らばっているガラスの断片が踏まれる素っ気無い音だけが響き渡る。

「まあ、もつとも、あなたなら魔神クラスと言っても過言ではない程の力を身につけているから、どちらにせよ、魔人には変わり無いわね」

黒と赤と白を基調としたフリル満点のゴスロリ服に、小柄な体を包む少女が歩いている。

短いスカートから大きく露出された太ももには髑髏のタトゥーが彫れており、さらに同じく大きく露出された上半身の腕や首には、黒やピンクのテープの様なリボンが結ばれていた。

戦闘を終えた非禁禁忌は、そんなゴスロリ服の少女の話を無視し、地に刺さっている天使の羽がデザインされた純白の槍を引き抜く。

「あなたがここに、何のよう？ 私は魔人復興の為を思つて、ここで見張りをしているの。見張りである以上、あなたをこのまま見過ごす訳にはいかないわ」

少女の問いかけに、非禁禁忌は何も答えない。ただ黙つて、少女の横を通り過ぎるだけだった。

「私を無視する気？　ねえ、魔神である私を?!」

形相を変えて怒りを露わにし、全身を使って語り掛ける少女。それに対して非禁禁忌は、歩みを止めると一言。

「……お前など、利用されているに過ぎない。残念だが、そんな前が知る事はなにも無い」

その言葉に、少女はとうとう我慢の限界を超えたのか、舌打ちをして

「その態度、後悔させてあげるわ！！　そして、すべての魔法使いと根を断つ者と呼ばれる私の力を見せつけてあげる！　E t e r n a l J u d g e m e n t『永遠の審判』！」

魔法名を唱え、非禁禁忌へと猛烈な勢いで攻撃を仕掛ける。

魔女魔人編「短気な少女」（後書き）

短気過ぎんだろおおおおおおおお。

もう少し、引つ張れば良かったなあ、と反省中です。

最近、場面が変わりすぎて読みにくさMIXのような気がする。
読者、置いてけぼりだよ。ひどういよね。
そこも、反省しております。

魔女魔人編「鳥肌」

「その態度、後悔させてあげるわ！！　そして、すべての魔法使いと根を断つ者と呼ばれる私の力を見せつけてあげる！　E t e r n a l J u d g e m e n t『永遠の審判』！」

魔法名を唱えると同時に、少女の手に握られ、振るわれる一筋の刀。それは、白く美しく、見る者すべてを魅了する程だ。

そして、あるう事が、それは非禁禁忌の首筋に到達する頃には、大きく膨張していた。

「くらえ！！！」

少女の掛け声と同時に、膨張と見合った爆発を遂げる美しき刀。その衝撃で、少女の掛け声は掻き消され、声どころか、反動で少女まで吹き飛ばされる。

「きゃっ！」

自らの攻撃の反動を受け、らしくない声を上げて、尻餅をつく少女。急いで、前方を確認すると、爆発による煙で辺りは覆われていた。

そして、煙に覆われながらも確認できる、地面に開いた大きな穴。どうやら、爆発の衝撃でステンドグラスの道に穴を開けてしまったようだ。

非禁禁忌の戦闘ですら、破壊されなかった地面に、大きな穴を開けるほどの攻撃。少女はその一撃で非禁禁忌を仕留めたと確信した。

「さすがの非禁禁忌でも、あの不意をついた攻撃は避けられなかつ

たようね……」

そして確信と同時に、少女の中を駆け巡る喜びと言う感情。それは心地良い鳥肌となつて少女の体に現れた。

この場所を守るだけでなく、あの非禁禁をたつたの一撃で葬り去ることが出来たのだ。これほどの功績を、少女は喜ばずにはいられなかった。

最初こそ、驚きにより顔が引きつっていたが、徐々に笑顔が漏れ始める少女。そして、段々大きくなっていく笑み。気付けば、少女の笑みは、高笑いへと変化していた。

魔女魔人編「鳥肌」（後書き）

私の心地よい鳥肌は、マッサージが気持ち良かった時です。

足の方から、頭の方へと駆け抜けていきます。たまりませんよね。

………はい！　と言う事で、今回は、少女と非禁禁忌の戦闘です！
いかがでしたか？　楽しめましたか？？

今回はわりとテンポ良く、サクサク進んだのでは？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8602n/>

機械天使～魔法と科学と学園と～

2011年11月27日12時53分発行